

大分県文化財調査報告第76輯

安岐城跡 下原古墳

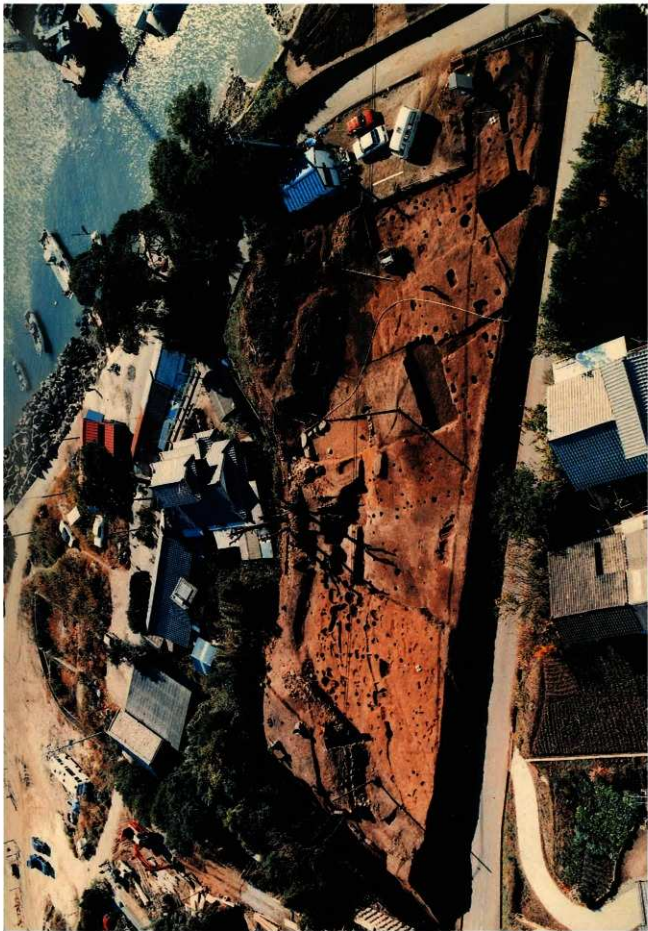
一般国道213号線安岐バイパス関係埋蔵文化財調査報告

1988

大分県教育委員会

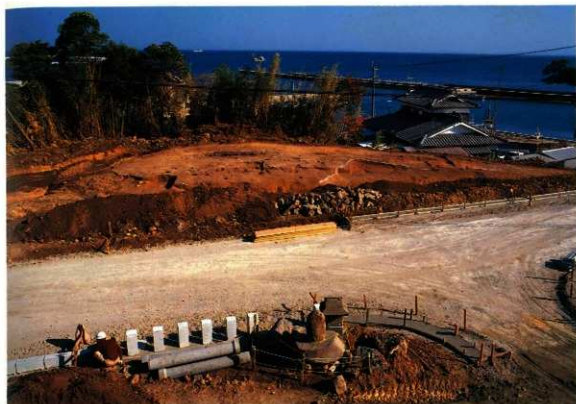
安岐城跡
下原古墳





安岐城跡空中写真

(西方向より)



下原古墳全景（西方向より）

主体部全景（東方向より）



安岐城跡出土陶磁器類

安岐城跡陶磁器・土器類

序 文

九州の北東部に位置し、瀬戸内海に面する国東半島には、先史から近世に至るまでの歴史を彩る数多くの遺跡が残されています。今回発掘調査を実施した安岐城跡も、中世大友時代から近世に移行する歴史を具さに物語る貴重な文化財であります。また城域内から県内最古の古墳が発見されたことは予想外の成果であり、この地が早くから畿内地方との交流をもっていたことを教えてくれます。

調査の契機は道路の改良工事という開発行為であり、それによって遺跡の一部が消滅したことは残念ではありますが、本書が今後の文化財の保護及び学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査に多大な御協力をいただいた関係者各位に深甚の謝意を表します。

昭和63年3月31日

大分県教育委員会教育長

嶋津 文雄

例 言

1. 本書は大分県教育委員会が昭和58～60年度に実施した安岐城跡・下原古墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は一般国道213号線安岐バイパス工事に伴って実施した。
3. 各年度の調査団の構成は次のとおりである。

第一次調査（昭和58年度）

調査主体 大分県教育委員会 **調査指導** 賀川光夫（別府大学教授・現学長） **総括** 手嶋誠一（教育長）、秋吉辰郎（文化課長）、後藤光（課長補佐） **庶務** 橋本淳一（主幹兼係長）、伊東正行（主任） **調査員** 後藤宗俊（文化財専門員兼係長）、清水宗昭（主任）、栗田勝弘、西哲弘（以上主事）

第二次調査（昭和59年度）

調査主体 大分県教育委員会 **調査指導** 賀川光夫（別府大学教授） **総括** 手嶋誠一（教育長）、高塩至（文化課長）、塔鼻勝人（課長補佐） **庶務** 橋本淳一（主幹兼係長）、伊東正行（主査） **調査員** 後藤宗俊（文化財専門員兼係長）、渋谷忠章（主任）、玉永光洋（主任・現大分市歴史資料館）西哲弘（主事）、吉武学（嘱託・現福岡市教育委員会）

第三次調査（昭和60年度）

調査主体 大分県教育委員会 **調査指導** 賀川光夫（別大教授）、阿蘇品保夫（熊本市立高校教諭）、大橋康二（九州陶磁文化館係長） **総括** 藤井義美（教育長）、高塩至（文化課長）、塔鼻勝人（課長補佐） **庶務** 阿部正博（主幹兼係長）、伊藤正行（主査） **調査員** 後藤宗俊（文化財専門員兼係長）、渋谷忠章（主査）、玉永光洋（主任）、西哲弘、小林昭彦（以上主事）その他第一次～三次調査補助員、綿貫俊一（別府大学卒業生）国井和哉、原裕司、前嶋秀張（以上別府大学生）

4. 本書の執筆は主として調査員が分担し、文責を文末に記した。Ⅵについては武本弘文（国東高校教諭）先生に執筆頂いた。
5. 遺構・遺物の実測・製図・撮影は主として玉永・小林が行ない、後藤一重（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）、桑原幸則（佐賀県神埼町教育委員会）、小柳和宏、友岡信彦、松本康弘、後藤晃一（以上大分県文化課）、行時志郎、神田高志、永松みゆき（以上文化課嘱託）、坪根伸也（鹿児島大学）、井口あけみ（文化課資料室）の協力を得た。
6. 発掘調査については、中野昭純（安岐町教育委員会）、菊田徹（日杵市教育委員会）、小倉正五、佐藤良二郎（以上宇佐市教育委員会）の協力を得た。記して感謝します。
7. 本書で使用している方位は真北を示す。（磁針方位西偏約 $5^{\circ}50'$ ）
9. 本書の編集は玉永・小林が行なった。
8. 陶磁器については大橋康二氏の指導を得た。

本文目次

序文

例言

I はじめに	1
調査経過	1
遺跡の立地と環境	1
遺跡の調査概要	3
II 遺構	4
1. 本丸地区の遺構	4
a 居館段階の遺構	4
b 城郭段階の遺構	10
c その他の遺構	13
2. 北地区の遺構	15
III 出土遺物	17
1. 土器	19
a 陶磁器	19
b 瓦質・土師質・須恵質土器	32
2. 金属製品	35
3. 瓦類	48
4. 石塔類、石製品	65
IV 方形周溝墓・下原古墳の調査	76
1. 方形周溝墓	76
2. 下原古墳	76
V まとめ	82
VI 豊後国安岐城の歴史的 성격	89
VII 資料篇 安岐城関係資料	94

挿 図 目 次

第1図	安岐城跡周辺遺跡分布図	
第2図	安岐城跡調査地区位置図	2
第3図	本丸地区城館変遷図	5
第4図	第2期櫓・土塁実測図	8
第5図	SX2土層模式図	9
第6図	Ⅲ区山土土錘平面図	9
第7図	本丸地区炉跡実測図	9
第8図	SD8と石組の関係図	11
第9図	東櫓西面土層断面図	11
第10図	東櫓土層断面図	12
第11図	東櫓上部礎石建物実測図	13
第12図	SB23実測図	14
第13図	北地区南北方向断面図	16
第14図	北地区土塁V字薄断面図	17
第15図	安岐城跡出土遺物実測図(1) 青花碗1	20
第16図	安岐城跡出土遺物実測図(2) 青花碗2 青花皿1	21
第17図	安岐城跡出土遺物実測図(3) 青花皿2	22
第18図	安岐城跡出土遺物実測図(4) 青磁碗Ⅲ 白磁Ⅲ 小坏 赤絵坏 李朝皿 唐津埴	23
第19図	安岐城跡出土遺物実測図(5) 瀬戸 美濃系天目碗 灰釉小皿	31
第20図	安岐城跡出土遺物実測図(6) 塩壺	32
第21図	安岐城跡出土遺物実測図(7) 瓦器埴 須恵質土器 備前甕・甕・搦鉢・鉢	36
第22図	安岐城跡出土遺物実測図(8) 瓦質土器A鼎 鍋 鉢 釜	37
第23図	安岐城跡出土遺物実測図(9) 瓦質火鉢 搦鉢	38
第24図	安岐城跡出土遺物実測図(10) 瓦質土器B鼎 鍋 鉢 搦鉢 火鉢 釜	39
第25図	安岐城跡出土遺物実測図(11) 土師質土器 坏 皿	40
第26図	安岐城跡出土遺物実測図(12) 土錘	41
第27図	安岐城跡出土遺物実測図(13) 金属製品	42
第28図	安岐城跡出土遺物実測図(14) 鏡瓦Ⅰ・Ⅱ類	49
第29図	安岐城跡出土鏡瓦復元図	50
第30図	安岐城跡出土遺物実測図(15) 字瓦Ⅰa	52
第31図	安岐城跡出土遺物実測図(16) 字瓦Ⅰb	53
第32図	安岐城跡出土遺物実測図(17) 字瓦Ⅰc・Ⅱ	54

第33図	安岐城跡出土遺物実測図18	宇瓦Ⅲ	55
第34図	安岐城跡出土宇瓦復元図		56
第35図	安岐城跡出土遺物実測図19	男瓦	58
第36図	安岐城跡出土遺物実測図20	女瓦 慰斗	59
第37図	安岐城跡出土遺物実測図21	鳥衾 小菊瓦	60
第38図	安岐城跡出土瓦拓影		61
第39図	安岐城跡出土遺物実測図22	一石五輪塔	65
第40図	安岐城跡出土遺物実測図23	五輪塔地輪部	66
第41図	安岐城跡出土遺物実測図24	五輪塔地輪部	67
第42図	安岐城跡出土遺物実測図25	石塔基礎部	67
第43図	安岐城跡出土遺物実測図26	五輪塔火輪部	68
第44図	安岐城跡出土遺物実測図27	五輪塔火輪部	69
第45図	安岐城跡出土遺物実測図28	国東塔笠部	70
第46図	安岐城跡出土遺物実測図29	五輪塔風・空輪部	71
第47図	安岐城跡出土遺物実測図30	地藏尊石仏	72
第48図	安岐城跡出土遺物実測図31	石臼	73
第49図	安岐城跡出土遺物実測図32	手水鉢	74
第50図	方形周溝墓実測図		76
第51図	方形周溝墓主体部実測図		77
第52図	古墳及び方形周溝墓平面図		78
第53図	古墳主体部実測図		79
第54図	下原古墳出土遺物実測図		81

表 目 次

表1	安岐城跡建物一覧表	6
表2	安岐城跡出土土器集計表	18
表3	安岐城跡出土土器組成表	18
表4	陶磁器類観察表	24-30
表5	豊後の土師質土器分類表	32
表6	土器法量相関表	33
表7	瓦質・土師質・須恵質土器観察表	43-45
表8	土器観察表	46
表9	出土金属製品一覧表	46

表10	出土金属製品出土地点一覧表	47
表11	安岐城跡出土瓦一覧表	62
表12	鎧瓦・字瓦型式別出土量一覧表	62
表13	出土瓦計測表1 (鎧瓦・烏袈・小菊瓦)	63
表14	“ 2 (字瓦)	63
表15	“ 3 (男瓦)	64
表16	“ 4 (女瓦)	64
表17	下原古墳出土遺物観察表	80

写真図版目次

図版1	本丸地区全景(1・2期)・本丸地区Ⅰ・Ⅱ区遺構群(1・2期)・本丸地区Ⅲ区遺構群(1・2期)
図版2	本丸地区Ⅱ・Ⅲ区遺構群(1・2期)・本丸地区Ⅲ区建物群近景(1期)・本丸地区SX4全景
図版3	本丸地区Ⅰ区(3期)隅櫓建物群・本丸地区Ⅰ区(3期)SB19, SA22近景・本丸地区Ⅰ区(3期)SB18近景
図版4	本丸地区Ⅰ区隅櫓土層断面・本丸地区Ⅱ区SA2土層断面・第Ⅰ, Ⅱ次整地層・本丸地区Ⅱ区SA2南端部土層断面
図版5	本丸地区Ⅰ区SA2全景・本丸地区Ⅰ区SA2基部石列・本丸地区Ⅰ区隅櫓、下半部石積状況
図版6	本丸地区Ⅰ区隅櫓SB22と瓦敷き・本丸地区Ⅰ区隅櫓SB22全景・本丸地区Ⅰ区隅櫓SB21
図版7	本丸地区Ⅱ区第2号炉跡・本丸地区Ⅱ・Ⅲ区SD7(左)SD8(右)全景・本丸地区Ⅱ・Ⅲ区SD7断面
図版8	本丸地区Ⅲ区SD6東西方向土層断面・本丸地区Ⅲ区SD6全景・本丸地区Ⅲ区SD6側面
図版9	本丸地区Ⅲ区SB23・本丸地区Ⅲ区SB23北西隅・本丸地区Ⅲ区SB23石列
図版10	北地区SD1全景・北地区SD1西端部・北地区SD2, SX1
図版11	北地区SD1東端部・北地区石積東半部・北地区石積西半部
図版12	北地区SA1断割状態・北地区SA1上層断面・北地区SA1土層断面
図版13	本丸地区方形周溝墓全景・本丸地区方形周溝墓主体部・本丸地区方形周溝墓主体部土層断面

- 図版14 本丸地区 下原古墳くびれ部，主体部・本丸地区下原古墳周溝及び崩落墓石・本丸地区下原古墳周溝
- 図版15 本丸地区下原古墳主体部全景・本丸地区 下原古墳主体部構築状態・本丸地区下原古墳主体部掘形
- 図版16 安岐城跡出土磁器類
- 図版17 安岐城跡出土陶磁器類
- 図版18 安岐城跡出土磁器類
- 図版19 安岐城跡出土陶磁器類
- 図版20 安岐城跡出土陶器，土器類(1)
- 図版21 安岐城跡出土土器類(2)
- 図版22 安岐城跡出土土器類(3)
- 図版23 安岐城跡出土土錘
- 図版24 安岐城跡出土金属器類
- 図版25 安岐城跡出土瓦(1)
- 図版26 安岐城跡出土瓦(2)
- 図版27 安岐城跡出土瓦(3)
- 図版28 安岐城跡出土瓦(4)
- 図版29 安岐城跡出土瓦(5)
- 図版30 安岐城跡出土石塔類(1)
- 図版31 安岐城跡出土石塔類(2)
- 図版32 安岐城跡出土石塔類(3)，石仏
- 図版33 安岐城跡出土石製品
- 図版34 下原古墳出土土器

付 図 目 次

- 付図1 安岐城跡別辺字図(1/2000)
- 付図2 安岐城跡復原図
- 付図3 本丸地区遺構分布図(第1・2期)(1/200)
- 付図4 本丸地区遺構分布図(第3期)(1/200)
- 付図5 本丸地区土層断面図及び東側側面図(1/80)
- 付図6 北地区遺構分布図及び土呈横断面図(1/200)

付 表

安岐城跡出土遺物一覧表(陶磁器、土器類)



第1図 安岐城跡周辺遺跡分布図

I はじめに

調査経過

大分空港より大分市内への所要時間短縮を主目的とした空港道路整備工事の内、一般国道213号線安岐バイパス工事に関する埋蔵文化財の発掘調査は、昭和58年9月着手した。

この地区は、古くから田原氏及び熊谷氏の居城安岐城跡として周知されており、本丸・天守・小丸といった城跡に係る字名がよく残されている。国東鉄道の跡を利用した町道を拡張してつくるバイパス工事によって、上郭（字本丸）の東端部が削平されることになり、昭和58年～61年の三年次にわたる全面発掘調査を実施した。

遺跡の立地と環境

安岐城跡は、大分空港の南西約2kmの大字下原にある。下原台地の東端部、安岐川河口右岸（現在の安岐川は、城跡の南約1kmで東に直進し海にそそいでいる。）の標高約13～16mの台地に立地する。東にのびる台地は、北は自然谷、東～南は断崖となっており、海に面し要害堅固な構である。

安岐城をとりまく歴史的環境をみると、旧石器～古墳時代の遺跡が数多く分布している。なかでも安岐川の右岸と左岸の丘陵裾に分布する古墳と横穴墓が特徴的である。

人物、鳥、馬、家屋などの形象埴輪を出土した6世紀中ごろから後半頃の築山古墳、複室構造の横穴式石室をもつ6世紀後半ないし末頃の塚山古墳などが有名である。しかし、この地域には5世紀以前の古墳の存在は知られていなかった。ところが、今回の調査で安岐城跡の最下層から竪穴式石室をもつ初期前方後円墳下原古墳が発見され、時間的に九州最古式の宇佐赤塚古墳と大差ない古墳であり、東九州における初期古墳研究に一石を投じたことになる。

前方後円墳と城郭、権力を象徴する二者が同一地点に立地していることは、偶然ではなくこの地の地理的環境を雄弁に物語っているといえよう。（玉永）

周 辺 遺 跡 一 覧

No.	遺 跡 名	種 別	時 期	No.	遺 跡 名	種 別	時 期	No.	遺 跡 名	種 別	時 期
1	内山遺跡	散布地	縄文～古墳	20	荒帯古墳	古墳	古墳	38	大車古墳	古墳	古墳
2	カラカミ遺跡	散布地	縄文	21	肥後油道跡	散布地	弥生～古墳	39	龜山古墳 1号墳	古墳	古墳
3	吉見古墳	古墳	古墳	22	塩見貝塚	貝塚	縄文	40	龜山古墳 2号墳	古墳	古墳
4	内泊遺跡	散布地	弥生	23	アネド古墳	古墳	古墳	41	岡山古墳	古墳	古墳
5	北原遺跡	散布地	弥生	24	行者原第3古墳群	古墳	古墳	42	美神森古墳	古墳	古墳
6	塚山古墳	古墳	古墳	25	岩崎横穴	横穴墓	古墳	43	妙地山古墳	古墳	古墳
7	市道古墳	古墳	古墳	26	塩部糸里道跡	道跡	(奈良)	44	小川古墳	古墳	古墳
8	築山古墳	古墳	古墳	27	下原古墳	古墳	古墳	45	志口道跡	散布地	弥生
9	中村古墳	古墳	古墳	28	安岐城跡	城跡	豊前～国東	46	志口古墳	古墳	古墳
10	丸山古墳	古墳	古墳	29	西ノ平古墳	古墳	古墳	47	古森石古墳	古墳	古墳
11	千人塚古墳	古墳	古墳	30	アネド古墳群 2号	古墳	古墳	48	京多城跡	城跡	
12	吉松古墳 1号墳	古墳	古墳	31	アネド古墳群 3号	古墳	古墳	49	野辺上地遺跡	散布地	縄文
13	2号墳	古墳	古墳	32	権現山古墳	古墳	古墳	50	御馬手道跡	散布地	縄文
14	黒川原古墳 古墳群 1号	古墳	古墳	33	東古墳	古墳	古墳	51	古市道跡	散布地	弥生
15	地盤遺跡 縄文包合跡、灰窯 縄文下層、中層(?)	古墳	古墳	34	堀古墳	古墳	古墳	52	東長迫第1遺跡	散布地	縄文
16	上の横穴	横穴墓	古墳	35	塚本古墳	古墳	古墳	53	行者原第2古墳群	古墳	古墳
17	穴倉横穴	横穴墓	古墳	36	大塚古墳	古墳	古墳	54	行者原第4古墳群	古墳	古墳
18	心月寺古墳	古墳	古墳	37	龍宮堂古墳	古墳	古墳	55	赤家貝塚	貝塚	
19	伊予野古墳	古墳	古墳		原古墳	古墳	古墳	56	御手道古墳群	古墳	古墳



第2図 安城城跡調査地区位置図

遺跡の調査概要

一般国道213号線安岐バイパス工事に伴う発掘調査は、第一次から第三次（昭和58年～60年度）にわたり実施した。以下順を追って各年次の調査概要を述べていく。

第一次調査（昭和58年9月～12月）

この地域は慶長5年（1600年）に落城し、以後破却された安岐城跡として周知されており、バイパスは、城跡の主郭を含む東端を南北に縦断するコースを取っていた。路線内及び取付道路内には、土塁、堀、隅櫓などの遺構が比較的良好に残っていることから、まずこれらの地形測量を行ない、併せて全城の試掘調査を実施した。この時点で調査地点が離れるため字本丸と称する地区を本丸地区、谷を隔てて北側の字熊谷寺・馬落地区を北地区として設定した。試掘調査の結果、本丸地区に大規模な整地層が確認され、整地層下部にも遺構の存在が明らかとなったため、調査主体を本丸地区に移した。しかし、この地区は移転未完の住宅があることから、完掘は不可能であるため、北側よりⅠ～Ⅳの小調査区（付図2参照）を設けⅡ区及びⅢ区の一部について調査した。

第二次調査（昭和59年7月～12月）

一次調査の結果、整地層上面とともに、下面遺構についても広範囲に分布することが明らかとなったため、調査の全体計画の見直しを計り、二次調査では遺構が重層する本丸地区の完掘を目的とし、併せて約130,000m²におよぶ安岐城全城の地形測量を実施することとした。

調査の結果、整地層下部からは掘立柱建物群とそれを方形に囲むと想定される小溝が検出され、上部遺構に先行する居館の遺構が明らかとなった。小溝内から室町期の輸入陶磁器、国産陶器などが出土し、居館と上部の城郭との年代的関係が注目された。上部遺構では、本丸地区の北及び東を画す土塁、それに接続する北東隅の櫓跡の他に掘立柱建物、土橋を挟み本丸地区を東西に画す堀跡などが新たに検出された。

また、土塁や櫓遺構の基部に石積みや石列が施され、表面には人頭大の栗石を葺く状況は下部遺構と大きく異なる工法であった。さらに、櫓及び周辺部から多量の瓦が出土し、瓦ぶきの建物が一部ではあるがこの段階に出現することが明らかとなった。

二次調査も終盤に近づいたとき、予想外の発見があった。櫓直下及び周辺から方形周溝墓と前方後円墳の一部が検出された。周溝内出土の遺物から九州最古式に属する古墳と推定され、にわかに未掘部分の取り扱いが問題となった。

第三次調査（昭和60年10月～昭和61年3月）

古墳未掘部分の取り扱いについての協議の結果、上部の櫓・土塁を含め調査を行なうことが決定された。そのため三次調査は北地区とともに櫓・古墳部の調査が主たる目的である。

北地区の調査は、字下池の沖積谷を囲む土塁と堀跡の遺構を中心とし、熊谷寺の字名が残る地区でもあることから、土塁内側の状況も併せて行なった。しかし寺跡に関する遺構は検出できなかった。一方本丸地区では、櫓跡から礎石建物などが検出され、3段階の変遷が確認された。古墳については墳丘がすでに削平を受け主体部の遺存が危ぶまれていたが、幸にも木棺を

納めた竪穴式石室が検出され、その出土遺物から最古式に属する前方後円墳であることが明らかとなった。3ヵ年にわたる発掘調査面積約8,000m²、安波城全体の約16分の1である。

(玉永)

Ⅱ 遺 構

1. 本丸地区遺構 (図版1～9)

調査区は、堀と土塁で囲った安波城跡の主郭東端部にあたり、調査前より北面と東面の土塁・この土塁と北東隅でつながる櫓跡が顕著に残存していた。調査の結果、これらの現存する施設の下には大規模な整地層が検出され、さらには、整地層下部においても溝で囲まれた掘立柱建物群が確認され、大きく3期にわたる遺構の変遷が把握できた。

各期の遺構をみると、1期・2期の遺構は小規模な土塁(1期は不明)と溝をめぐらし、主屋を含む建物群が南側に集中する共通性が認められる。このことから1期と2期の遺構には有機的関係がうかがえるのに対して、3期の遺構は、各施設の配置はもとより、土塁、溝(堀)の規模、土塁や櫓の基部に石列や石積みを実施する工法など前者の遺構のあり方とは大きく異なる。このことは、1期から2期にみられるような連続的な(例えば拡充や改作)変化ではなく、新たな計画による新たな縄張りを目的とした城づくりがなされたと考えられる。

a 居館段階の遺構 (第3～7図)

現存する安波城跡は、縄張りの特徴から明らかに平城としての性格をもつ城郭である。しかし、城郭遺構の下面で検出された室町～戦国期にかけての遺構は、いわゆる国人層の居館跡とするにふさわしい特徴をもつものである。居館段階の遺構には、掘立柱建物跡(群)・溝・土塁・堀・竪穴などがある。これらの遺構は、建物の方向、溝の改作(拡充)状況等により2小期に分けられる。

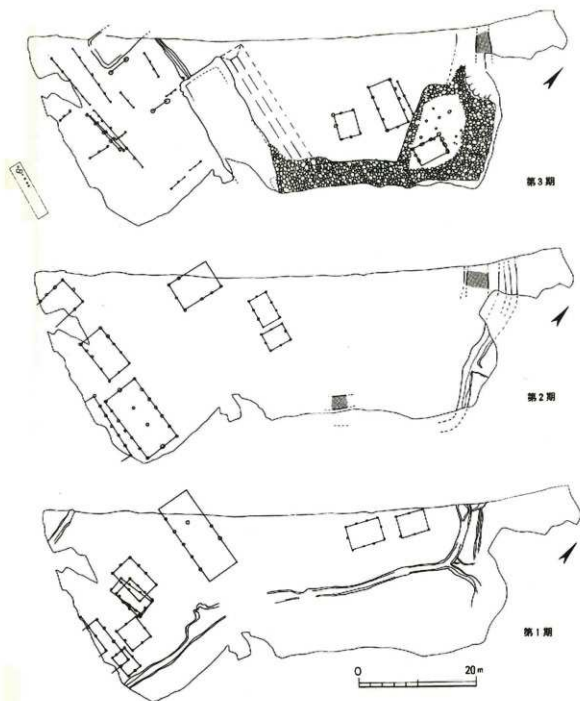
以下各期の遺構の概要についてのべていく。

第1期の遺構

溝跡(SD1・SD2) SD1及びSD2は溝の形態、土層の堆積状況、出土遺物等からみて、下原台地の東端部をややいづつであるが長方形に区画する溝として理解され、規模は南北約80m、東西約300m程と推定される。

SD1は北面から北東部で南に折れ東面を区画する部分を言う。溝は北面では2条(造り替えか?)をなし、北東コーナーより排水のためと思われる小溝が台地端にむかって流れる。東面では基本的には一条であるが、SB13の東側付近で、溝底に若干の段差をもつ掘り始め部と思われるダブリ部分が確認された。溝はこの部よりやや東に振れ掘削されている。また、この部分より南へ約20mの間、溝幅が1mほど内側に広がっている。溝の形態は逆梯形をなし、溝幅1.5～3.0m、深さ0.7～1.0m(いずれも検出面から)である。出土遺物は、輸入陶磁器、国産陶器、土師質土器、瓦質土器等が出土し、出土遺物の大半がこの溝より出土した。

SD2は、おそらく長方形区画の西面を画す溝と思われる、その一部分が検出された。SD1と同



第3図 本丸地区城館変遷図

表1 安岐城跡建物一覧表

遺構名	地区名	原 形				原 形			主軸方位	注 記	
		間		柱間寸法 (cm)	西側より	間		柱間寸法 (cm)			北側より
		(間)	(cm)			(間)	(cm)				
SB 1	本丸3区	—	—	西 180-180-180- 東 180-180-—	北 — 南 —	北 520- —	北 260-260- —	N 5° E			
SB 2	本丸3区	北4間 南4間	北 780 南 800	北 182-173-182-243 南 150-146-248-256	東 — 西 —	東 458 西 455	—	N 77° W			
SB 3	本丸3区	北3間 南3間	北 650 南 650	北 190-180-280 南 208-174-298	東2間? 西2間	東 390 西 420	東 195-195 西 210-210	N 81° W			
SB 4	本丸3区	北3間 南3間	北 630 南 650	北 180-221-229 南 180-229-241	東2間? 西 —	東 280 西 250	東 120-160 —	N 90° W			
SB 5	本丸3区	北3間 南3間	北 540 南 550	北 185-170-185 南 191-168-191	東2間 西2間	東 380 西 370	東 190-190 西 190-190	N 86° W			
SB 6	本丸3区	北4間 南 —	北 720 南 —	北 226-150-165-150	東 — 西 —	— —	—	N 76° W			
SB 7	本丸3区	北4間 南 —	北 880 南 —	北 203-275-267-195	東 — 西 —	— —	—	N 78° W			
SB 8	本丸3区	北2間 南2間	北 400 南 420	北 180-220 南 190-230	東2間 西2間	東 400 西 430	東 200-200 西 210-220	N 71° W			
SB 9	本丸3区	北6間 南 —	北 1,180 南 —	北 192-190-204-180-206-200	東 — 西 —	東 — 西 —	—	N 71° W			
SB 10	本丸3区	北6間 南5間	北 1,200 南 1,200	北 215-190-198-167-220-210 南 200-230-200-180-200-200	東2間 西2間	東 630 西 610	東 312-318 西 305-305	N 76° W			
SB 11	本丸3区	北3間 南3間	北 420 南 420	北 110-122-188 南 110-(155)-(155)	東 — 西 —	東 270 西 270	—	N 81° W			
SB 12	本丸 1・2区	西4間? 東4間?	西 — 東 760	西 ()-()-()-110 東 190-190-(190)-(190)	北 — 南2間	北 — 南 510	南 255-255 —	N 19° E			
SB 13	本丸 1・2区	北 — 南 —	北 — 南 —	北 (X)(X) >250< (X) 南 (X) >270-200-250-250< (X)	東 — 西 —	東 570 西 —	—	N 75° W			
SB 14	本丸2区	北3間 南3間	北 490 南 510	北 150-155-185 南 170-160-180	東2間? 西2間	東 325 西 340	北 160-170 南 165-145	N 19° E			
SB 15	本丸2区	西2間 東2間	西 415 東 400	西 225-190 東 200-200	北2間 南2間	北 330 南 310	北 160-170 南 165-145	N 71° W			
SB 16	本丸1区	西3間 東3間	西 570 東 600	西 190-190-190 東 210-180-210	北2間 南2間	北 385 南 380	北 210-175 南 190-190	N 29° E			
SB 17	本丸1区	西2間 東2間	西 480 東 490	西 250-230 東 260-230	北 — 南 —	北 390 南 330	—	N 23° E			
SB 18	本丸1区	北2間 南2間	北 420 南 450	北 210-210 南 210-240	西2間 東2間	西 360 東 340	西 210-150 東 170-170	N 55° W			
SB 19	本丸1区	北4間 南4間	北 790 南 790	北 201-183-187-219 南 196-204-201-189	西2間? 東2間?	西 390 東 390	西 195-195 東 195-195	N 61° W			
SB 20	本丸4区	—	—	西 85-90-70-85-80	—	—	—	N 69° W	礎石建物? 基壇あり		
SB 21	本丸1区南	—	—	—	—	—	—	—			
SB 22	本丸1区西	西3間 東3間	西 510 東 510	西 170-170-170 東 (170)-(170)-(170)	北3間 南3間	北 330 南 330	北 110-110-110 南 110-110-(110)	N 24° W	—		
SB 23	本丸1区 礎石	—	—	—	—	—	—	—	—		

様逆台形をなし、溝幅約2.4m、深さ約1.2mである。SD1溝内の堆積土の状況は、SD1では、溝底から中層程ではレンズ状の堆積を示すが上層部分では人為的に埋められた状況を示している。SD2では、黄褐色と黒褐色の互層で一気に埋められている状況が部分的にはあるが確認された。このことは、SD1及びSD2は、次の第2期の段階における整地によって埋められたものと考えられ、これらの溝に伴っていたであろう土塁についてもこの段階の整地により取り除かれたものと理解される。

掘立柱建物跡 建物跡は11棟検出された。建物配置をみると、主屋とみられるSB13が、長方形区画の中央よりすこし南に位置し、その南側に7棟の建物が偏在している。さらに、SB13の北方東側にはSD1に平行し、主軸を南北にとる2棟の建物が並んでいる。建物構造は、梁行・桁行柱のみの簡単な建物がほとんどであり、庇はない。しかし、主屋と考えられるSB13については床束柱か間仕切り柱らしい柱穴があるが不明な点が多く断定はできない。平面形は長方形が圧倒的に多く、方形はSB8の1棟のみである。建物規模は、SB13が最大で桁行6間（6間×2間か）あり、この期の中心建物と考えられる。他の建物は小規模で、4間×2間（1棟）、3間×2間（2棟）、3間×1間（2棟）、2間×2間（3棟）である。また、これらの建物跡のなかでSB3～SB5、SB6・SB7・SB11において建物の重複が認められ、第1期の時間幅のなかで少なくとも3回程度の立替えがあったものと考えられる。

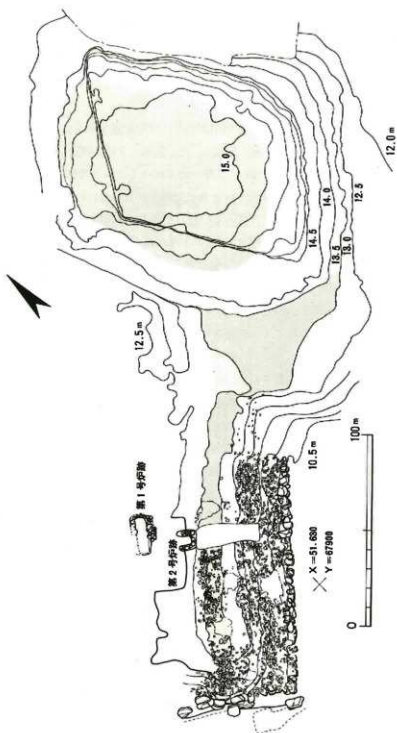
第2期の遺構

2期は、第1期の居館を拡大、拡充し、より強固な居館へと変貌している。調査区のⅠ～Ⅱ区において厚さ30～50cm程の黒褐色土を基調とした整地（第Ⅰ次整地層）が認められ、土塁と溝の構築と一連の作業で行なわれていた。

溝・土塁 溝（SD4）は1期のSD1より北へ約6mいった台地端で、3期の上塁（SA1）、槽下部で検出された。断面は葉研堀りに近いV字形をなし、上幅約4m、深さは土塁頂部より約3.8mである。溝の内側には上幅約7m、高さ約2mの土塁がある。この土塁は東面においても3期土塁（SA2）下部で確認されたことから北面から東面の台地端に沿ってつくられているものと考えられ、おそらく1期で想定したように2期においても建物群を土塁と溝で囲む居館になるものと考えられる。土塁は黒褐色土と黄褐色土との互層により入念に造られている。

掘立柱建物跡 建物跡は7棟検出された。建物群は1期に比べ整然とした配置となり、全体に南へ移動している。SB10を中心とする主要な建物が南側に集中して東西に並び、その北側に3棟の建物により、広場的空間をもつ逆コの字状をなしている。建物構造は1期と同様簡単なもので、平面形は長方形である。その内主屋と思われるSB10では間仕切り柱や床束柱の柱穴が2本検出されたが、柱通りが少しズレていることや柱間が広すぎる等不明な点が多い。建物規模はSB10が最大で6間×2間ある。SB9は一部分の検出であるがSB10とほぼ同じ規模になると考えられるが、建物方向が違い同時存在とは考え難い。この2棟が2期では最大であることから主屋の建替えが行なわれたのであろうか。その他は4間×2間（1棟）、3間×2間（2棟）、2間×2間（1棟）、不明（1棟）である。

X=51660
 Y=67900

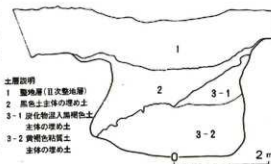


第4図 第2期槽・土塁実測図

第1期・2期におけるその他の遺構

居館段階におけるその他の遺構に、SK2・SK3・SK5・SK8・SK16・SK17・SX1～SX6などの性格不明の竪穴遺構がある。SKと呼ぶ遺構は平面形が隅丸方形、楕円形をなすもので深さが約30～60cmある。SXは不定形な竪穴状遺構を言う。これらの遺構は、1・2期いづれかの時期へ明確に位置づけることが困難であった。そのなかでSX2・SX3・SX4については所屬時期を知り得た。SX2は断面フラスコ状の竪穴であるが、第2期に掘られ、一気に埋められ、その上には第Ⅱ次整地層がのっている。SX3は不定形の竪穴で、SX4は排水施設をもつ長方形の竪穴であるが、SX3は第Ⅰ次整地層、SX4は第2期土層下部で検出されたことからいずれも第1期に属するものであり、竪穴出土遺物は第1期居館の下限を知る資料を提供した。

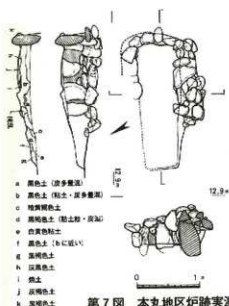
さて、各期の所屬年代であるが、輸入陶磁器等の実年代のわかる資料からみると、第1期・2期は15世紀後半～17世紀初頭の遺物が出土しており、その中心時期はいずれも16世紀後半～末である。従って使用時期の長い資料からで



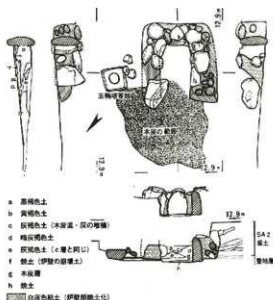
第5図 SX2土層模式図



第6図 Ⅲ区出土土錘平面図



第7図 本丸地区炉跡実測図



は各期の成立時期を限定することは難しく、文献資料とのクロスチェックが必要となる。詳細は後にゆずるが、第1期を16世紀中頃～後半、第2期を16世紀後半～末と考えたい。(玉永)

b 城郭段階の遺構 (第3・8～12図)

安岐城跡が近世的城郭としての体裁を整える段階である。調査対象地は、現在残っている文献及び土塁、堀などの状況から安岐城の主郭方一町の東辺部の防衛施設を中心とする範囲と考えられる。この東辺部の遺構群は、SD6、8によって区画された主郭北東区に建物群、東辺にSA2の上塁、北東隅に櫓、堀の南部には柵列群が配置され、主郭防衛の最終施設として堅固な構となっていた。主郭北東区の整地作業は、第2期居館段階の遺構面に10cm～100cmの黄褐色土主体層を盛り平坦面を形成することによって行われていた。特に、東端部、北端部は第2期の土塁との比高差をなくすため厚い盛土となっていた。

柵列・溝跡 (SD6～SD8) 南面の約600m²の範囲に柵列が堀と平行或いは直交する方向に13列配置されていた。区画する堀と直交方向に配置された柵列には、SA8、9、11～14の6列がある。SA8、11はSD6東辺と平行し、SA9、12、14はSD8西辺に平行しており、入口の幅に沿った配置が行われていた。又、SA11、12は他の柵列とは柱穴の規柱も異なり堀との近接した位置関係より機能の差が想起される。区画の堀と平行する柵列にはSA4～7、10、15の6列がある。このうちSA15はSD8とSD6の間の入口部分前面の最も近い部分に配され、SD4～7、10はSD6の南辺と平行する位置関係にある。

柵列の規模は、SA10が2間、SA15が3間と短く、SA6、7が4間、SA4が6間、SA5は6間が2列連続していた。SA5、6、7は極めて近接しており、数回の作り替えの結果と考えられる。以上のように柵列は主郭内の防衛であり、南の主郭出入口を意識した配置となっている。しかも柵列の構成は南北方向の配置が東西方向へ変更されており、更に作り替えなども確認でき、当時の早急な防衛の要請状況を示したものと云えよう。

SD6、7、8、主郭は堀によって南北に区画され、更に北半郭は東西に分けられている。調査区では南北の区画堀であるSD6、SD8が検出された。SD6は東端部により南へ10m程突出し、SD7は東端部が台地縁辺へ伸びていた。堀の規模はSD6が幅6m、SD8は幅8.5mである。SD7は幅0.6～1.5mで断面逆台形を呈し2つの堀と接続していた。SD6は南辺の壁下に径0.1～0.3mの小ピットが8個ほぼ壁に沿って設けられていた。上端からの深さは、SD6が約2.2cm、SD7は1.8m、SD8は3.8mであり、底面の柱高もSD7、SD6、SD8の順で堀が深く掘られていた。

土塁 発掘調査を行なった土塁は主郭北東区を囲む北、東辺部の土塁であった。北辺部土塁は北西より南東に伸び隅櫓に接続するものと考えられるが接続部分を道路によって切断されていた。この土塁の構築方法は北西端部に設定したトレンチの上層断面で観察できた。

土塁の構築は、第2期の土塁と同一の高さまでの整地作業に伴って行なわれていた。次に第2期土塁の北辺溝であるSD4が埋められ、黄褐色土、暗褐色土及び黒褐色土を版築状に盛土して土塁が形成されていた。この土塁は第2期土塁に比較して5.4m北へ拡張され、高さは約1

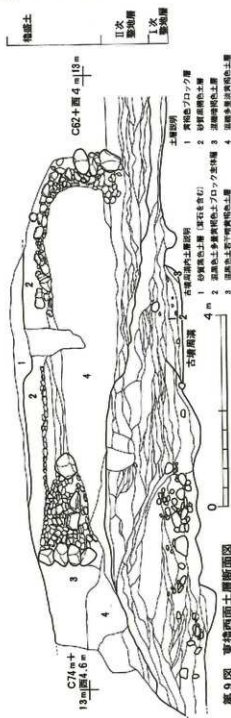
m高められていた。東辺土塁のSA2は、2段階の形成、補強作業が認められた。1段階では、第Ⅱ次整地面に第1期土塁とほぼ同一位置に約1m程土盛して土塁が構築されたいた。この段階では土塁東面下部に長さ約50cmの石材を用い石列を設けこの上に土塁が形成されていた。

土塁の内側にはSA21の柵列が石列にそって7間6.6mの長さで配置されていた。SA21の西側には小溝、ピット、土坑があり、土塁に伴う施設と考えられた。2段階では、更に30cm程盛土を行ない東部の拡幅に伴い土塁内側の遺構も埋められていた。隅櫓主郭には各隅部分及び要所に櫓が想定されており、調査を行なった櫓は北辺土塁と東辺土塁SA2の交わる主郭東端に位置していた。

隅櫓 一辺が13~14mの矩形を呈していた。構築方法は、整地面に混雑淡褐色土を主体に盛土し、壁面に径0.3mの河原石、石塔各部を外面に用い裏込めに礫、更に版築状の土盛を行っていた。又、櫓下部は、長さ0.5~1mの石材を数段積み上げ石垣状の基礎をなしていた。特に北東面、南東面には顕著にみられた。櫓上面は10m×7mの北西方向に長い平坦面が主郭内部寄りに形成されていた。この上面の遺構は3段階の変遷が認められた。第1段階は、不整形の掘立柱建物SB21が建てられた段階。第2段階にはSB21の上に0.3m程盛土し、SB22が構築されていた。SB22は3間×3間の礎石建物で、櫓上向の東端に位置し、海に対面する形で長辺が向けられていた。第3段階にはSB22で用いられた瓦を敷き、更に約0.7mの盛土を行ない他の遺構を伴わない。主郭内の建物としては、SB18、19、更にSB19の北辺に沿ってSA22の柵列が検出



第8図 SD8と石組の関係図



第9図 東側西面土層断面図

C69より東 7 m

C69より西 8 m
15.0 m

第3段階
第2段階
第1段階



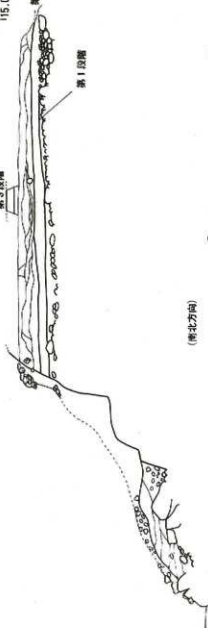
東檜土層断面図(東西方向)

第10図 東檜土層断面図

C77より西 4 m

C65より西 4 m
15.0 m

第3段階
第2段階
第1段階



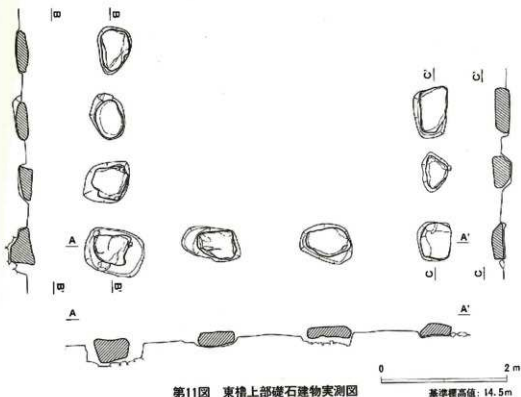
(南北方向)

された。その他、主郭内西部に残存する土塁の状態より見て、SA2南端よりSD8北辺に沿う東西方向の土塁が想定される。石組を用いた炉が主郭内の東部に検出された。第1号炉跡は、2辺を残す長方形を呈し、第2号炉は「コ」の字に形態を呈していた。SB20は礎石建物の1部であるが主郭南端の施設と考えられる。以上のように土塁と隅櫓には数段階の改造が行われておりその対応関係が問題となる。遺構の構築状態と配置より次のような見解を示しておく。まず、SA2、隅櫓構築段階にSA21、小溝、土坑、ピット及びSB18、19、SA22が配置される。櫓上部のSB21は短期間存続し、主郭内建物と方位を一にする。SB22が建てられ、防衛機能の充実が計られた。更に次の段階ではSA2と隅櫓に盛土が施され防御の補強がなされ、SA21及び周辺遺構もSA2の盛土に伴って埋められる。この段階では、SB18、22、SA22が存続したと思われる。

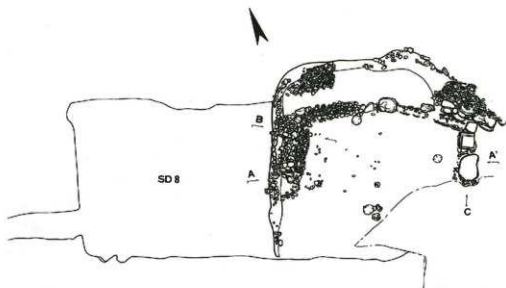
この大きな2回の改造は、堀の南部欄列の設置状況と併せて考えれば、極めて緊急且つ、近接した時期の防衛体制の変遷を示すものと理解できる。

c その他の遺構

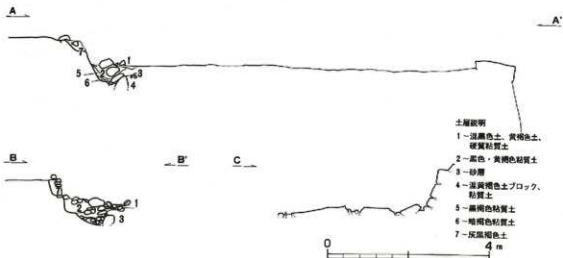
SB23はSD8の東端部に構築されたもので安岐城廃絶後の遺構と考えられる。遺構は四辺を囲むと思われる石列が北辺8.5m及びそれと連続する西、東辺の一部に残存していた。区画内には、若下のピットは認められたが、礎石或いは柱穴などは残っていなかったものの石列の状態



+ X=51645
 Y=67880



+ X=51600
 Y=67890



第12図 SB23実測図

より建物遺構と思われる。石組はSD8の埴土上に構築されており、西端部では2段の掘り込みが認められた。下段は礫を用いた壁の補強が見られ、上面に河原石による石組が敷設されていた。上段は礫を積み上げこの区画の外縁をなしていた。東辺部では、石組に土塁の石列の石材が用いられ、北辺は旧土塁の裾部をそのまま北の区画として踏襲していた。SB23では安岐城櫓部の瓦と同様の瓦が建物区画形成時に石材と共に使用されていた。若干出土した近世瓦より江戸期初頭頃に比定できよう。(小林)

2. 北地区の遺構 (第13・14図 図版10～12)

安岐城の郭の形成は主郭を東部に置き、西部へ回郭展開されているが、主郭北部には「船入」とされる深い谷が位置し、これを防衛する一部が北部に設けられている。北地区と呼称した調査区はこの防壁の東部に該当する。

北地区の遺構北西方向へ伸びる土塁、東端部の石積、堀、土塁の南部平坦の槽、溝、建物遺構・ピットである。

土塁SA1の長さは東端部まで35mである。しかし、東端部は削平により一部しか残っておらず、又、中途を道路によって切断されており、土塁の旧状は西部25m程度に窺うのみであった。土塁の規模は、南部の平坦面からの比高3.4m、幅は南裾部より北裾部まで18m～20m、上部平坦面の幅7m～8mであった。

土塁表面の整形は全面に小礫を被覆して行なわれていたが、上部平坦面では稀薄であった。一方、南裾部では、西半の裾部付近に0.2～0.4mの河原石を13m×2mの範囲に貼り付けた状態で補強が施されていた。

SA1上面はほぼ平坦面をし、この面においてSK1～3の遺構が検出された。SK1は長辺2.5m、短辺1.7mの隅丸不整形を示していた。SK2は径1.6mの円形を呈し、SK3の東端にほぼ接して掘られていた。SK3は長さ7.9m、幅0.5～1.4mの溝状を示し、土塁上面南縁部に沿って位置していた。土塁上面の遺構の機能については不明である。

土塁の構築方法は、土塁と直交して切断した土層の観察によって確認できた。土塁形成は大きく3段階の整地、盛土を通じて完成されていた。第1段階では、旧表土層の上に暗褐色土、黒色土を盛って整地する。第2段階に、土塁の中核部分の形成が行なわれており、アカホヤブロック、黒色土、黒褐色粘質土による厚さ10cm～50cmの互層の盛土が見られる。この盛土は土層の量を変えた3工程の作業によって行なわれていた。第3段階はまず第2段階の中核に南側より2層の盛土を行ない幅を広げ、更に全体を覆う0.3m～0.2mの盛土によって土塁が完成されていた。

土塁東隅は深い谷となっており石積によって、構築当初より堅固な構えが採られていた。石積みは東隅より北辺に向う17mの長さで確認でき、高さは基底部より4.7mであった。残存する土塁の頂部までは更に2.7mあり、石積が土塁の基底部から約8割を占めていたことになる。石積の平面的な形態は東隅で屈曲し、更に北辺で北東に対面するように逆Z字状を見していた。

構築には1m×0.8m×0.5mの大きさ为主体とする自然石が用いられており、石材の空隙は

礫で補填されていた。積上げの方法は、まず基底部より長辺を横位にした石材を2～3段積み、その上に順次石材が積まれていた。基底部の石積より上の積上げは位置によって異なる手法が用いられており、東半部では石材の長軸方向を基準に見ていくと斜方向へ4～5段積み上げ、中央付近では水平位と斜方向が併用され、更に西端部では大小の石材が混然と積まれていた。

SA1北縁の堀は、東部の谷に達せず、途中で止っていた。堀の幅11m以上と推定され、深さは1mと浅いものであった。堀の底面にはSD1がありこの堀の排水機能をもつと考えられ東の谷へと伸びていた。確認長16.5m、上幅2.2m～2.6m、床面幅1.0m～1.4mであるが、東端部は上幅7m、底面幅1m深さ約3mと上幅が広がったV字溝に近い形状を呈していた。SD1を挟むSA1裾部には長径1m程の石材と礫が残存し、対岸には、堀の東辺に沿って同様の石材と礫の被覆を伴う土塁状の遺構があり、SD1の排水に対する土塁と堀の保護の機能を果たしたものと考えられる。又、SD2、SX1は堆積物の状況よりSD1とはほぼ同時期の所産と考えられるが、機能については明らかでない。

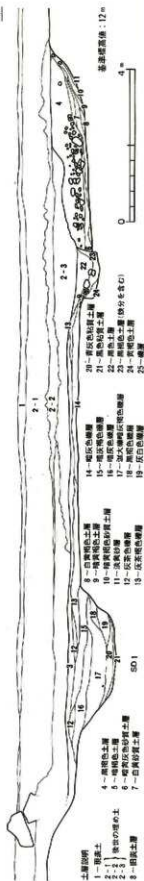
SA1の南側は「船入」の谷との間が平坦面となっており、遺構群の存在が想定された。しかし溝、柵列建物の一部が検出されたに留まった。

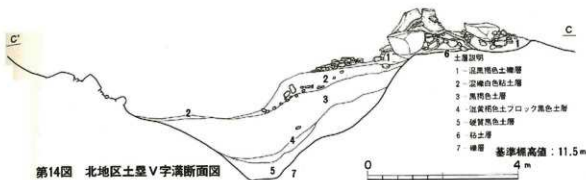
SB1はSA1裾部にはほぼ沿う位置に確認した礎石建物の一辺である。3間を確認できる礎石及びその痕跡が残っていた。礎石は深さ0.1～0.15mの掘形をもっており、西端の礎石には五輪塔の火輪が使用されていた。

SA3は5間10.5m、3間6mの規模をもち共にSA1と平行する方向に設けられていた。SD3は幅0.2mの小溝であるが、SA1を直交する方向に伸び南端で屈曲する。SD4・5、SK4～6については性格の不明な部分が多い。

北地区のSA1を中心とする遺構は、堀の有り方やSD1などの排水に関する施設の補強など注意すべき点が見られる。又、土塁東隅部の石積については「石垣」的形態の構造をもつものであったが基本的には土塁補強という機能の範囲に留まるものである。このことは本丸地区SA2の石列に同様の構築手法が認められることからも首肯できよう。(小林)

第13図 北地区南北方向断面図





Ⅲ 出土遺物

本丸地区及び北地区より出土した遺物には、輸入陶磁器や国産陶器、瓦質土器、土師質土器などの他瓦、金属製品、石臼、石塔類など中世から近世初期にかけての各種の遺物が数多く検出された。これらの出土遺物については以下個別的に述べていくが、その前にここでは遺物群の大半を占める生活（日常）雑具について、出土状況及び出土量と組成について整理しておく。

遺物群の出土状況は、第1期に属するものが圧倒的に多く、SD1や掘立柱建物の柱穴内、竪穴などの遺構の他に第Ⅰ次整地層内より出土している。遺構出土遺物については全て二次的堆積の状況で出土しており、SD1を除いては器種もすくなく細片の遺物が多くあまり良好な出土状態ではない。遺物群の大半はSD1及び第Ⅰ次整地層より出土している。第2期ではSX2や第Ⅱ次整地層出土遺物が主体を占めるが量的には少ない。また3期では城の中心部を調査していないため北地区を含めても確実に3期とする遺物は極めて少量であった。

それでは遺物群の組成についてみてみる。

各期の組成については、出土量にかたよりがあり、組成の推移を比較することは不可能である。遺物分類についても同様であることから、ここでは一応調査区約8000m²内における出土量と組成をデーター化してみた。さてその方法であるが、総点数1033点におよぶ遺物をいかに実体に近い個体数を算出するかである。まず単純に個体（全体の1/3以上のもの）と口縁部、底部の和（推定最大個体数・第3表A）を出してみた。これによると輸入陶磁器19.4%、国産陶器6.5%、瓦質土器22.2%、土師質土器杯・皿51.3%、須恵質土器0.6%となった。次に個体と底部の和（推定最少個体数・第3表B）では、輸入陶磁器16.9%、国産陶器8.2%、瓦質土器19.7%、土師質土器杯・皿54.1%、須恵質土器1.1%となり、前者に比べ土師質土器杯・皿・国産陶器・須恵質土器の比率が若干増し、他のものが減少しているが全体的には同じ傾向を示している。しかし、ここで問題となったのは、土師質土器以外の遺物については、接合関係、胎土、色調、文様等による個体識別をかなり厳密に行なえたのに対し、土師質土器杯・皿については、識別が困難な部分が多く個体重複がかなりあることが想定されたことである。

そこで、実体に近い個体数と思われる輸入陶磁器と国産陶器、須恵質土器については表Aのデーターを使用し、個体識別を行なったとは言え問題の残る瓦質土器、そして土師質土器の二

者について、次の2つの方法で行ってみた。

一つは、瓦質土器と土師質土器・皿を表Bのデーターを使用する方法である。(第3表C)これによると、輸入陶磁器28.8%、国産陶器9.6%、瓦質土器16.2%、土師質土器44.5%、須恵質土器0.9%となり、輸入陶磁器の増加とともに瓦質土器の減少が問題となった。もう一つは、土師質土器のみ(この場合にも底部の固体重複が想定されるが)表Bのデーターを使用してみた。(第3表D)その結果、輸入陶磁器24.6%、国産陶器8.3%、瓦質土器28.2%、土師質土器38.1

表2 安岐城跡出土土器集計表

出土遺物種類	A						B					
	全体	口縁	底面	計	全体	底面	計	全体	底面	計	全体	底面
輸入陶磁器	青釉	8	25	5	38	8	5	13				
	青釉	5	17	8	33	8	8	16				
	青釉		3		3		3	3				
	青釉	3	3	4	10	3	4	7				
	青釉	2	1		4	2	1	3				
	白釉	7	14	5	26	7	5	12				
	白釉	3	6	1	10	3	1	4				
	土師											
	土師	2			2			2				
	土師	1			1			1				
土師質土器・皿	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
	土師											
瓦質土器	瓦質	52	141	146	339	52	146	198				
	瓦質	1	2	1	4	1	1	2				
	瓦質	2	6	5	13	2	5	7				
	瓦質	3	12	7	22	3	7	10				
	瓦質	1	1	2	4	1	2	3				
	瓦質	1	1	2	4	1	2	3				
	瓦質	1	1	2	4	1	2	3				
	瓦質	1	1	2	4	1	2	3				
	瓦質	1	1	2	4	1	2	3				
	瓦質	1	1	2	4	1	2	3				
須恵質土器	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
	須恵	1	1	1	3	1	1	2				
その他	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
	その他	1	1	1	3	1	1	2				
合計	105	304	251	660	105	260	365					

▲印は瓦質器

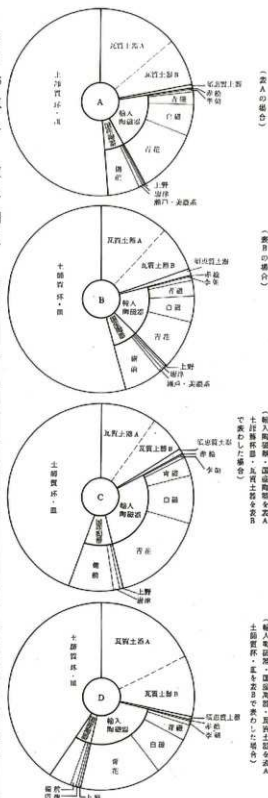


表3 安岐城跡出土土器組成表

%、須恵質土器0.8%となった。

以上、より実体に近いと想定されるデーター化を行ってきたわけであるが、実際のところどのデーターをとるかは難しい。しかし、総破片数からみた全体的傾向や個体重複をできるだけ避けた表Dのデーター結果を評価したい。

ここでみた、生活雑具の量と組成は、本遺跡における16世紀後半代の貿易陶磁器、国産陶器、在地系土器などの商品流通の状況を物語ると考えられ、遺物群の主体を占める第1期の居館における状況をも反映するものであろう。(玉永)

1. 土器

a 陶磁器

輸入陶磁器 (第15～18図 表4 図版16～19)

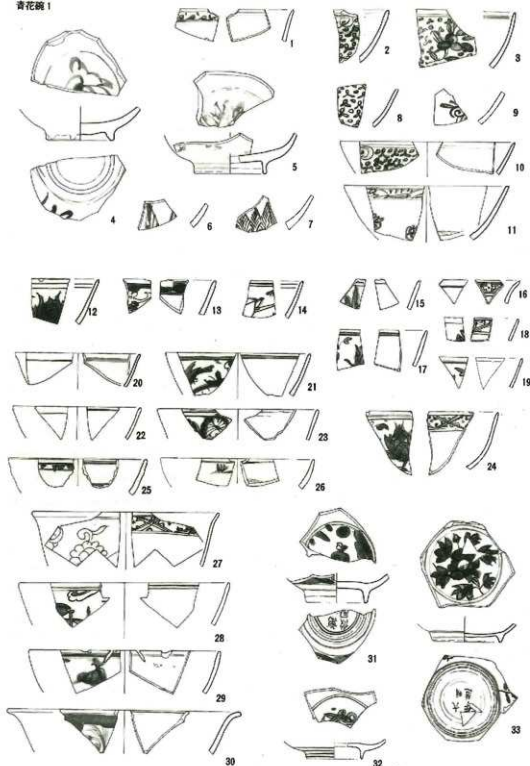
青花(染付)は、㊤15世紀後半～16世紀中頃、㊦16世紀中頃～後半頃、㊧16世紀末～17世紀初頭のおおまかに3時期に大別できる。産地窯は、景德鎮窯系と福建・広東系の二系統があり前者が主体を占める。(第4表参照)

㊤に属するものはあまり多くなく、碗1～11、皿39～42である。碗は、内面底部が丸く凹み内湾気味に開くいわゆる蓮子形碗を中心とする。文様は、口縁外面に波濤文1・11、胴部外面の主文様には花文と丸をくっつけた文様2・3・8・10、蕉風葉文6・7、アラベスク風文様で連弧状の唐草文5などがあり、見込部に花文を描く4・5がある。皿は、碁笥底の39・40をなすものと口縁端反りの2タイプがある。前者には見込部に人形化した寿字文39や梵字文40があり、後者は外面に番蓮唐草文41、外面に牡丹唐草文と見込部に玉取獅子文を描く42などがある。

㊦に属する青花が最も多く出土した。碗は、見込部中央が上方にふくらむ饅頭心形碗を中心とし、皿は一部口縁端反り皿も含むが、大半は内湾気味に直口して開くタイプである。文様の描き方は、景德鎮窯系は輪郭を濃い細線で描き、内部をダミで塗りつぶすのが特徴であり、描き方も精緻である。釉調は濃いブルーである。碗の文様には、見込部に折枝花文33・35、山水人物31・34? 蚊竜文32などがあり、口縁部内外面には1～2条の界線をめぐらすものが多いが、内面に四方禪文13・18・24を描くものもある。体部外面の主文様には、牡丹唐草文も12・24、菊折枝文35?、梅枝文37などがあり、唐草文を多く描いている。また外底面には「万福敕同」31・35、「大明年造」33の文字があるものもある。16・27は小鉢と思われる。口縁内面に四方禪文、外面に花唐草文の暗花文(27)が描かれている。皿の文様は、見込部に松竹梅文63・64、花文67・68などの他「竊園長図」の吉祥句が書かれる62もあり、外面主文様は唐草文等の文様と界線のみのもなどがある。また外底面には「宣徳年製」62・63や二重の方形枠内に「富貴征園」の文字が書かれている65などもある。福建・広東系については、碗・皿の見込部に蛇ノ目鉢ハギが多く、釉調にもこり、絵付も雑である。㊧に属するものは見込部に蛇ノ目鉢ハギで花文?を描く57と60の皿2点が出土した。

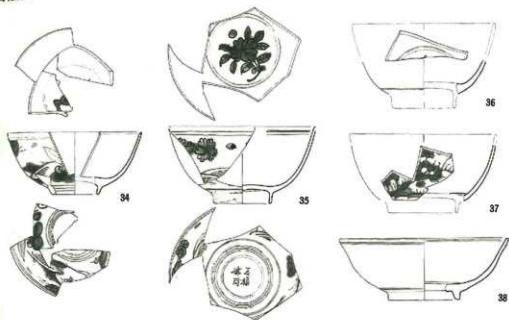
青磁は、碗は連弁の頭部が剣先形になる細弁化した連弁文71～73、ややくずれた雷文あり、文帯74、くずれた波濤状文76、見込部に印花文75・79などがある。皿は碁笥底と稜花皿の2タ

青花碗1

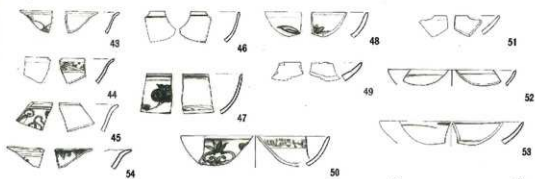
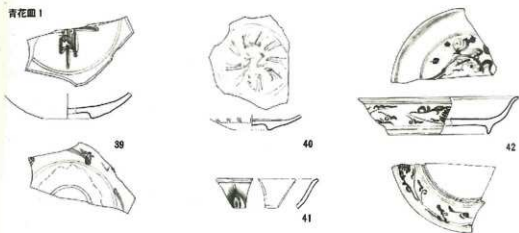


第15图 安岐城跡出土遺物実測図(1) 青花碗1

青花碗 2



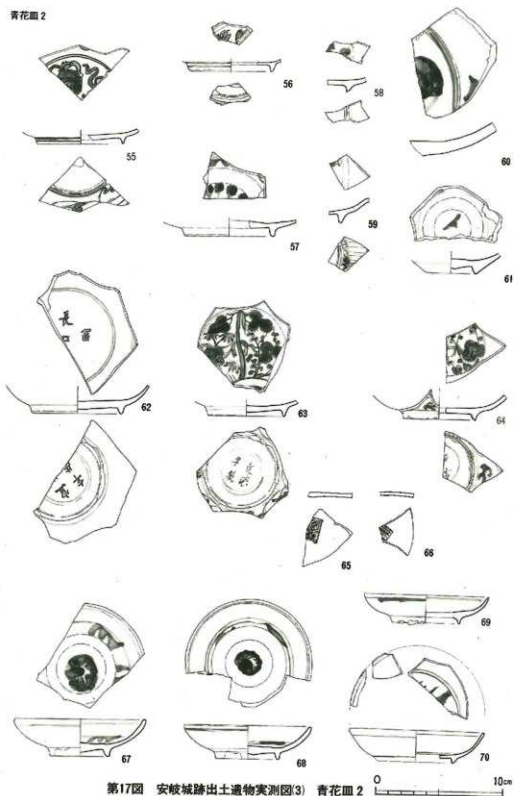
青花皿 1



第16图 安岐城跡出土遺物実測図(2) 青花碗 2 青花皿 1

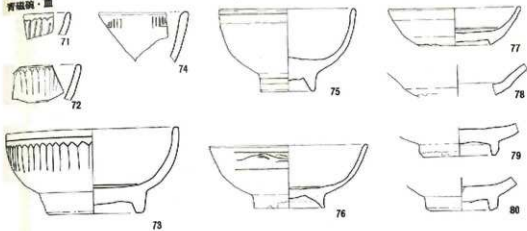
0 10cm

青花圖 2

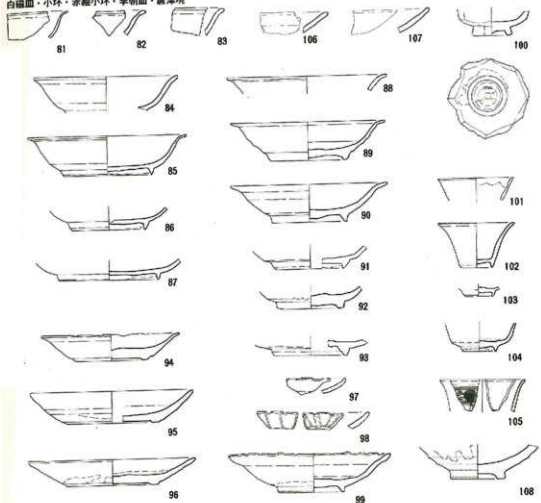


第17圖 安岐城跡出土遺物実測図(3) 青花皿 2

青磁碗・皿



白磁皿・小坏・赤繪小坏・李朝皿・唐津境



第18図 安岐城跡出土遺物実測図(4)

青磁碗皿 白磁皿 小坏 赤繪小坏 李朝皿 唐津境

0 10cm

表4 陶磁器類観察表

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			産地系名	特 徴	出 土 地 点	備 考
		口径	底径	高さ				
1	蓮子碗	—	—	—	京池田系	口縁外面波線文 口縁内面外面界線 2	北地区遺土	
2	蓮子碗	—	—	—	京池田系	花文と丸を3つくった文様 口縁内面・外面界線 2	本丸2区第Ⅱ次発掘地	NO 8・10 と同一個体?
3	蓮子碗	—	—	—	京池田系	口縁内面・外面界線 2 外面花文と丸を3つくった文様	本丸2区第Ⅱ次発掘地	
4	蓮子碗	—	—	5.1	福徳・広康系	足込花文 腰部界線 1 外面文様不明・真鍮太腰シェーブでない	本丸2区 S D 1	
5	荷花碗 (中筒形)	—	—	(5.7)	福徳・広康系	内面花文 外面アラベスク風文様 外面腰部・真鍮太・界線 2	本丸1区第Ⅱ次発掘地	
6	蓮子碗	—	—	—	福徳・広康系	腰部外面葉風文	本丸2区 S D 1	
7	蓮子碗	—	—	—	京池田系	腰部外面葉風文	本丸2区第Ⅱ次発掘地	
8	蓮子碗	—	—	—	京池田系	丸を3つくった文様	本丸1区貯蔵土	NO 2・10 と同一個体?
9	蓮子碗	—	—	—	福徳・広康系	外面波線花文	本丸3区柱穴	
10	蓮子碗 (14.0)	—	—	—	京池田系	花文と丸を3つくった文様 口縁内面外面界線 2	S X 2	NO 2・8 と同一個体?
11	蓮子碗 (13.4)	—	—	—	京池田系	重ね焼きの時目砂付着 真入否不明 口縁外面波線・文様部外面花文	S B 1 附近検出面	
12	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	外面牡丹唐草文 口縁内面外面界線 2 口縁虫くいあり	S X 2	
13	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	口縁内面四方唐文 外面牡丹唐草文?	本丸2区 S D 1	
14	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	外面花鳥折枝文?	本丸2区第Ⅱ次発掘地	
15	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	口縁外面界線 2 口縁内面界線 1 外面文様不明	本丸3区柱穴	
16	鉢	—	—	—	京池田系	口縁周反り 口縁外面界線 1 内面四方唐文	本丸地区表層	
17	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	口縁内面外面界線 2 外面牡丹唐草文	S B 7 柱穴内	
18	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	口縁外面界線 1 外面波線文? 内面四方唐文	S B 1 附近検出面	
19	焼皿心形碗	—	—	—	京池田系	口縁内面外面界線 1 外面波線文?	本丸1区第Ⅱ次発掘地	

図版 番号	器 種	法 量 (cm)			産地・窯名	特 徴	出 土 地 点	備 考
		口徑	器 高	底徑				
20	甕壇心形碗	(10.1)	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面界線 1 口縁外面界線 2 無文?	本丸 2 区第Ⅱ次整地層	
21	甕壇心形碗	(11.7)	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 2 外面花鳥折枝文?	本丸 1 区魯灰土	
22	甕壇心形碗	(10.4)	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 1 無文?	本丸 1 区 SD 1	
23	甕壇心形碗	(12.8)	—	—	福徳・広東系	口縁内面外面界線 2 外面文様花文? 口縁部出く	SB 1 附近検出面	
24	甕壇心形碗	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁外面界線 2 牡丹草文 内面口縁四方禪文	本丸 2 区 SA 2 盛土内	
25	青 花 碗	(11.2)	—	—	福徳・広東系	口縁外面無文? 口縁内面界線 2 腹部内面界線 1	本丸 1 区 SD 1	
26	青 花 碗	(12.5)	—	—	福徳・広東系	外面文様略字? 口縁内面・外面界線 1	本丸 3 区表土	
27	青 花 鉢	(14.8)	—	—	景徳鎮窯系	口縁端反り 外面青花文 (花唐草文を線彫) 口縁内面四方禪文	本丸 1 区第Ⅰ次整地層 本丸 1 区 SD 1 接合	
28	甕壇心形碗	(17.1)	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面・外面界線 2 外面雲と山水?	本丸 1 区第Ⅱ次整地層 本丸 3 区焼乱土接合	
29	青 花 碗	(15.4)	—	—	福徳・広東系	口縁内面外面界線 2 外面文様不明	SK 3	
30	青 花 鉢	(18.8)	—	—	福徳・広東系	口縁端反り 外面文様不明 口縁内面界線 2	本丸 2 区 SD 1	
31	甕壇心形碗	—	—	4.6	景徳鎮窯系	見込み山水人物文・界線 2 高台内縁あり 外面腹部界線 2 高台界線 1 二次の火熱にあっては 外面文様不明	SA 2 トレンチ内	「高麗牧馬」銘
32	甕壇心形碗	—	—	(4.4)	景徳鎮窯系	見込み破電文 界線 2 外面腹部界線 2 高台界線 2	本丸 2 区第Ⅱ次整地層	
33	甕壇心形碗	—	—	5.6	景徳鎮窯系	内面見込み花文・界線 2 高台内縁あり 界線 2 外面文様折枝文? 外面腹部界線 1 高台界線 1	SK 4 本丸 1 区第Ⅰ次整地層	「大明年造」銘
34	甕壇心形碗	(10.8)	5.0	(3.9)	景徳鎮窯系	見込み人物? 界線 2 外面折枝文? 口縁内面・外面界線 2 外面腹部界線 1 高台界線 2	本丸 1 区 SD 1 と SX 3 接合	
35	甕壇心形碗	11.9	6.2	4.8	景徳鎮窯系	外面折枝文 腹部界線 1 高台界線 2 見込み花文 界線 2 高台内縁あり 界線 2 口縁内面外面界線 2	本丸 1 区 SD 1 と 本丸 2 区第Ⅰ次整地層 接合	「高麗牧馬」銘
36	甕壇心形碗	(11.4)	(6.8)	(5)	景徳鎮窯系	見込み界線 2 外面腹部界線 1	本丸 1 区第Ⅰ次整地層	
37	青 花 碗	(11.6)	(6.3)	(5.4)	景徳鎮窯系	外面折枝文	本丸 1 区 SD 1 と本丸 1 区第Ⅰ次整地層接合	
38	青 花 碗	(13.5)	5	(5.7)	福徳・広東系	見込み蛇ノ目輪ハギ 界線 1 口縁内面外面界線 1 外面腹部界線 1 高台内縁あり	本丸 1 区 SD 1	

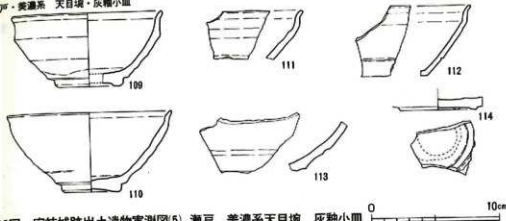
図位 番号	器 種	注 量 (cm)			産 地 名	特 徴	出 土 地 点	備 考
		口徑	高	底徑				
39	青花蒜筒底皿	—	—	(3.7)	景徳鎮窯系	見込み人形寿字文 界線 2 外面略字? 腰肩界線 2	本丸 2 区第 I 次整地層	
40	青花蒜筒底皿	—	—	2.6	景徳鎮窯系?	見込みと外面見字文 見込み界線 1 外面腰肩界線 1 底面肩辺には多くの砂付着	SD 6	
41	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁周反り 口縁内面外面界線 1 外面多葉唐草文	本丸 1 区第 I 次整地層	
42	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	見込み玉點線子文 口縁内面外面界線 2 外面牡丹唐草文 高台界線 2 見込み界線 2	SX 4	
43	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁周反り 口縁内面外面界線 2 外面牡丹唐草文	本丸 1 区第 I 次整地層	
44	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁周反り 口縁外面界線 1 口縁内面四方唐文	本丸 2 区 SD 1	
45	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁周反り 外面文様不明 口縁内面外面界線 2	本丸 3 区表土	
46	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 1 見込み界線 2	本丸 1 区 SD 1	NO70 と同一個体
47	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 2 外面唐草文 見込み界線 2 口縁出く	SX 2	
48	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	外面唐草文 見込み花文? 口縁内面外面界線 1	本丸 3 区 SK 16	
49	青 花 皿	—	—	—	福隆・広東系	口縁内面外面界線 1	本丸 1 区 SD 1	
50	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	外面唐草文 口縁内面外面界線 1 口縁内面四方唐文くずれ?	本丸 1 区 SD 1	
51	青 花 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 1	本丸 1 区第 I 次整地層	
52	青 花 皿 (10.3)	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 1	本丸 1 区 SD 1	
53	青 花 皿 (11.4)	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁内面外面界線 1 見込み界線 1	本丸 2 区第 II 次整地層	
54	青 花 皿 (競花形皿)?	—	—	—	福隆・広東系	口縁外面 3 本の界線 口縁内面文様不明	本丸 2 区 SD 1	
55	青 花 皿	—	—	(7.0)		外面唐草文 見込み文様不明 界線 2 高台界線 2	SK 11	
56	青 花 皿	—	—	(6.8)	景徳鎮窯系	見込み文様不明 界線 2 高台界線 2	本丸 1 区第 I 次整地層	
57	青 花 皿	—	—	(7.3)	福隆・広東系	見込み蛇ノ目盤ハキ 花文 高台無縁	本丸 1 区 SD 1	

図版 番号	形 種	寸 量 (cm)			産地名	特 徴	出 土 地 点	備 考
		口 径	器 高	底 径				
58	青花皿	—	—	—	福建・広東系	見込み文様不明 界線 2 高台界線 2	SB 23 1面	
59	青花皿	—	—	—	福建・広東系	見込み文様不明 界線 2 高台文様不明 外面割線彫文あり	本丸 1 区第 1 次整地層	
60	青花大皿	—	—	—	福建・広東系	見込み文様不明 界線 2	SB 23	
61	青花器用武皿	—	—	3.9	福建・広東系	見込み彫ノ目線ハギ 界線 1 文様不明 底部彫輪 底部外面界線 1	本丸 2 区第 2 次整地層	
62	青花皿	—	—	7.3	景徳鎮窯系	見込み銘あり 界線 2 高台内面あり 界線 2 口縁内面四方彫文 外面腰部界線 1 外面腰部文 見込み彫竹柄文 界線 2 高台内面あり 界線 2 内面に成形時の布目痕を残す	本丸 2 区第 1 次整地層	見込み「西園社図」 高台内「京」字年刻
63	青花皿	—	—	6.2	景徳鎮窯系	外面腰部文 見込み彫竹柄文 界線 2 高台内面あり 界線 2 内面に成形時の布目痕を残す	本丸地区 表土	高台内「宣徳年製」銘
64	青花皿	—	—	(5.8)	景徳鎮窯系	外面腰部文 高台内面あり 界線 2 見込み松竹梅文 界線 2	本丸 1 区 SD 1	「〇〇年製」銘
65	青花皿	—	—	—	景徳鎮窯系	高台内中央ニ東方形跡内に 「京 青 園 社 図」 彫割れている	本丸 2 区第 2 次整地層	
66	青花皿	—	—	—	景徳鎮窯系	高台内彫化した紋あり	本丸 1 区 SD 1	
67	青花皿	10.7	3.0	4.8	福建・広東系	見込み花文 紋ノ目線ハギ 高台彫輪 口縁内面外低界線 1 腰部内面外低界線 1 見込み花文 紋ノ目線ハギ 高台彫輪 口縁内面外低界線 1 腰部内面外低界線 2 外面界線 1	本丸 1 区 SD 1	
68	青花皿	10.4	2.7	5.0	福建・広東系	見込み花文 紋ノ目線ハギ 高台彫輪 口縁内面外低界線 1 腰部内面外低界線 2 外面界線 1	本丸 1 区第 2 次整地層	
69	青花皿 (99)	2.3	(5.4)	(5.4)	景徳鎮窯系	見込み花文の 1 部? 口縁内面外低界線 1 腰部 1 本見込み 2 本の界線	本丸 2 区第 1 次整地層	
70	青花皿 (10.8)	(2.6)	(6.2)	(6.2)	景徳鎮窯系	見込み花文の 1 部? 口縁内面外低界線 1 腰部 1 本見込み 2 本の界線	本丸 1 区 SD 1 SX 4 接合	系 46 と同一個体
71	青磁刺先蓮弁文皿	—	—	—	龍泉窯系	刺先蓮弁文 釉は緑褐色	本丸 2 区 SD 1	
72	青磁刺先蓮弁文皿	—	—	—	福建・広東系	刺先蓮弁文 釉は緑褐色	本丸 2 区第 2 次整地層	
73	青磁刺先蓮弁文皿 (14.3)	6.8	7.8	7.8	福建・広東系	高台内に道具を当てて彫した痕あり 見込み部分に時計回りのへう割り痕 底部内面へう割り 接合部分も無胎	本丸 1 区 SD 1 SB 23 接合	
74	青磁皿	—	—	—	龍泉窯系	口縁部山花文(雷文) 釉は緑褐色	本丸 1 区第 1 次整地層	
75	青磁皿	11.2	6.7	4.5	龍泉窯系	外面内面ともに輪の貫入 見込み花文 釉は緑褐色	SD 6 本丸 1 区第 1 次整地層	
76	青磁皿	12.8	5.1	5.7	福建・広東系	口縁部に緑帯文(波線文?) 高台内無胎 釉は緑褐色	SX 1	

図形 番号	器 種	尺 量 (cm)			産地・系	特 徴	出 土 地 点	備 考
		口徑	器高	底徑				
77	青磁茶碗底皿	(10.6)	3.0	(5.8)	福建・広東系	釉は草緑色	本丸2区埋品土内	
78	青磁紋花皿	—	—	—	福 泉 系	釉は灰緑色	本丸2区SD1	
79	青 磁 碗	—	—	5.9	福 泉 系	見込み印花文 高台部釉 黒部の増着痕あり 釉は灰緑色	SⅡ 23 石積みう4込 め内	
80	青 磁 碗	—	—	—	福 泉 系	高台部釉 釉は灰緑色 黒部の増着痕あり	本丸2区第Ⅱ次整地層	
81	白 磁 皿	—	—	—	福建・広東系	口縁端反り	本丸3区埋品土	
82	白 磁 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁端反り	本丸3区表土	
83	白 磁 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁端反り	本丸3区SK3	
84	白 磁 皿	(11.8)	—	—	景徳鎮窯系	口縁端反り	本丸3区表土	
85	白 磁 皿	12.9	3.2	7.0	景徳鎮窯系	口縁端反り 口縁部紋花風	SX4	
86	白 磁 皿	—	—	(5.9)	景徳鎮窯系	高台に砂付青	本丸2区SD1	
87	白 磁 皿	—	—	(8.1)	景徳鎮窯系		本丸2区SD1	
88	白 磁 皿	—	—	—	景徳鎮窯系	口縁端反り	本丸2区第Ⅱ次整地層	
89	白 磁 皿	12.6	3.1	6.2	福建・広東系	口縁端反り	本丸2区表土	
90	白 磁 皿	12.7	3.0	6.1	福建・広東系	口縁端反り 筒底は不規 表面に無数の亀裂が入る	本丸2区SD1	
91	白 磁 皿	—	—	(5.7)	景徳鎮窯系		本丸1区SD1	
92	白 磁 皿	—	—	(6.5)	福建・広東系		本丸1区表土	
93	白 磁 皿	—	—	—	福建・広東系	見込み蛇ノ目軸ハギ	本丸3区表土	
94	白磁紋花形 皿	(11.3)	2.2	(5.8)	福建・広東系	見込みと高台部釉 黒部 紋花形に口縁部をカットしていると思 われる	本丸3区表土	
95	白 磁 皿	(13.3)	2.6	(7.5)	福建・広東系	見込みと高台部釉	本丸2区SD1	

図面 番号	器 種	法 量 (cm)			産地名	特 徴	出 土 地 点	備 考
		口 径	高	底 径				
96	白 磁 皿	(13.5)	2.1	7.3	福徳・広東系	口縁部ズブ掛け	SK 16 本丸3区埋戻土 接合 本丸3区表土	
97	白磁鉄花形 皿	—	—	—	豊後・高良系		本丸1区第1次築地層	
98	白磁菊形皿	—	—	—	福徳・広東系		本丸1区第1次築地層	
99	白磁鉄花形 皿	12.6 12.8	3.0	5.3	福徳・広東系	足込み蛇ノ目輪ハギ 貫入あり 外面腹面～高台無釉 粗製	本丸1区埋戻土内	
100	白磁八角小 杯	—	—	3.3	福 徳 系	高台内「正」あり 高台無釉	本丸1区SD1	
101	白磁小杯	(6.2)	—	—	福徳・広東系		本丸1区SD1	
102	白磁小杯	6.2	3.6	2.5	豊後・高良系	足込み砂が付着	本丸2区SD1	
103	白磁小杯	—	—	—	福徳・広東系	足込み蛇ノ目輪ハギ	本丸1区第1次築地層	
104	白磁小杯	—	—	—	福徳・広東系	足込み蛇ノ目輪ハギ	本丸1区第1次築地層	
105	小杯(赤輪)	(6.8)	—	—	豊後・高良系	赤・緑の発色 文様不明	SB 20	
106	陶 器 皿	—	—	—	李朝(朝鮮)	灰褐色発色	本丸1区SD1	
107	陶 器 皿 (輪胎)	—	—	—	李朝(朝鮮)	灰褐色発色	本丸1区SD1	
108	碗	—	—	(4.3)	唐 律 系	胴部下半部高台無釉 草緑色	北地区SD3	
109	天 目 碗	(12.0)	5.8	(4.75)	瀬戸・美濃系	胴部下半部～高台無釉 黒色～黒褐色 胎土灰黄褐色	北地区SA1	
110	天 目 碗	(13.1)	6.3	4.4	瀬戸・美濃系	胴部下半部～高台無釉 茶色～コグ茶色 胎土灰白色	SX 4	
111	天 目 碗	—	—	—	瀬戸・美濃系	黒褐色～コグ茶色 胎土黄褐色	本丸1区砂穴	
112	天 目 碗	—	—	—	瀬戸・美濃系	黒褐色～コグ茶色 胎土灰白色	SX 4	
113	天 目 碗	—	—	—	瀬戸・美濃系	コグ茶色 胎土灰黄褐色	本丸1区第一築地層	
114	灰 輪 小皿	—	—	(10.0)	瀬戸・美濃系	足込み無釉 高台内輪トシ	本丸3区表土	

図面 番号	原 西	法 量 (cm)			産地署名	特 徴	出 上 地 点	備 考
		口 深	口 径	口 径				
123	横 鉢	(25)	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸 色調 内面赤褐色外面灰褐色、被褐色 胎土 緻密	本丸1区SD1	口縁沈線2条
124	横 鉢	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸 色調 内面灰褐色外面灰褐色 胎土 白色砂粒を少々含み緻密	本丸1区西表土	口縁凹線2条
125	横 鉢	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも凹凸のロクロ製あり 色調 内面・外面暗赤褐色 胎土 緻密	本丸2区SD1	口縁沈線2条 内面の磨目1単位 9本〜10本
126	横 鉢	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で 色調 内面・外面とも明赤褐色 胎土 石英を含み緻密	SB23	口縁沈線2条 内面の磨目1単位 13本
127	横 鉢	—	—	(12.7)	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸あり 外面磨目時の凹凸あり 外面磨目地盤で底面盤で 色調 内面・外面暗褐色 胎土 灰褐色緻密	SB8北側柱穴	内面の磨目1単位 11本
128	鉢	(29.2)	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で 口縁部自然焼 色調 外面暗赤褐色、内面暗褐色 胎土 自然砂粒を含み緻密	本丸2区SD1	
129	甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で 口縁部内面へう盤で 色調 暗赤褐色 胎土 白色砂粒を含み緻密	本丸地底表土	
130	甗	—	—	—	備 前	調整 盤で、外面灰褐色あり 色調 内面・外面とも明赤褐色 胎土 石英を含み緻密	SX2	蓋印あり「  」
131	甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で 色調 暗赤褐色 胎土 白色砂粒を含み緻密	本丸3区表土	
132	小 甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で 色調 内面暗赤褐色、外面被褐色白色自然焼 胎土 緻密	SX16	
133	小 甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸 外面へう盤に、自然焼あり 色調 外面暗褐色、内面被褐色、内面暗赤褐色 胎土 白色砂粒を含み緻密	SX2	胎面
134	小 甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で 凹凸のロクロ製あり 色調 内面暗褐色、外面暗褐色〜黄褐色 胎土 白色砂粒を含み緻密	SB5柱穴内 SB4検出面	外面磨目上や蓋印あり「  」
135	小 甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸あり 外面盤で、底面回転利用の盤あり 色調 暗赤褐色 胎土 砂粒を含み緻密	本丸2区第Ⅱ次盛地盤	
136	小 甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸あり 底面回転利用の盤あり 色調 内面暗赤褐色 胎土 白色砂粒を含み緻密	本丸1区第Ⅰ次盛地盤	胎面
137	甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸あり 底面盤で、外面へう盤に、自然焼あり 色調 外面暗褐色〜黄褐色、内面黄褐色 胎土 白色砂粒を含み緻密	SB3柱穴内	
138	甗	—	—	—	備 前	調整 内面・外面とも回転利用の盤で凹凸あり 外面盤で、底面回転利用の盤あり 色調 暗赤褐色、外面被褐色 胎土 1mm程度の砂粒・小石を含む	SA1第Ⅱ次盛地盤	



第19図 安岐城跡出土遺物実測図(5) 瀬戸 美濃系天目埴 灰釉小皿

イブからなり、窯も龍泉窯系と福建・広東系の2系統がある。年代は15世紀後半～16世紀後半の幅をもつが、78・80は16世紀前半代を下限とすると考えられ、76・77は16世紀後半頃に位置づけられよう。

白磁は、皿と小皿があり、㊤15世紀後半～16世紀中頃、㊦16世紀中頃～後半の二時期がある。㊤は口縁部が端反り、高台部がうすく削られた皿84～87、高台部から直接外反して開く小皿102などの景德鎮窯系と底面外面に「三」の朱字を書き、胎土が淡黄白色で釉が淡黄褐色の福建系の八角小皿100がある。㊦には、皿4種ある。口縁部が端反り高台部内面を内傾させ、断面三角形に厚く削り出し、釉が淡乳緑色の皿88～93と低い削り出し高台をもち、高台部から直口して開き、見込部無釉の皿94～96、菊皿状の98、貫入がはげしく口縁部が稜花状になり、見込部に蛇ノ目釉ハギがある99などがある。これらはいずれも福建・広東系である。小皿は、高台部から一度腰部でふくらみ、大きく外反して開き、見込部に蛇ノ目釉ハギのある101・103・104があり、105の赤絵小皿もこのタイプと考えられる。景德鎮窯系である。

朝鮮(李朝)系には、釉が灰淡黄褐色～灰緑褐色でガラス状の高沢をもつ雑釉陶器皿(106・107)で、時期は15～16世紀である。

国産陶器(第18・19・21図 表4 図版19・20)

備前は、甕・擂鉢・壺・鉢などが出土している。甕130・131・138は玉縁が下方に垂れ下がり、外面にはまだ凹線状の沈線がない。時期は備前焼Ⅳ期後半(16世紀後半)である。130には窯印がある。壺129・137は玉縁が大きく、コ字状に角ばり備前焼Ⅴ期いわゆる大窯期(16世紀末～17世紀)と考えられる。擂鉢123～127は、口縁部が直口し、外面に2条の凹線風の沈線があり、口縁部内面が外方向に斜面を形作り全て備前焼Ⅴ期に属す。その他に徳利形をした油壺と思われる小壺133・134・136と口縁部が小さく開き器高の低い小壺132・135などがある。これらは、第1期16世紀後半であろう。123は、器形・産地・年代に不明な点が多いが一応鉢形としておく。

瀬戸・美濃系陶器は、天目埴・灰釉皿がある。天目埴は、胎土は淡黄褐色で、釉は黒褐色～

こげ茶色の鉄釉である。形態は口径に対し器高が低く、胴部にまるみがみられる特徴があるが、口縁部及び底部の仕上げにより2つのタイプに分けられる。外反する口縁部のくびれが大きく、高台を削り出し底裏が内反りとなす110～112と口縁部が直口気味に開き、くびれ小さく端部を薄く仕上げ、底部は削り出しの輪高台をなす109である。前者は美濃大窯Ⅳ期（16世紀後半）、後者は美濃大窯Ⅴ期（16世紀末）と考えられる。114は灰釉小皿で高台内に輪トチンが残る。16世紀第4半期に属す。

唐津系は碗と皿が出土した。108は灰釉碗で16世紀末～17世紀前半である。

上野系は、薬灰釉大皿の小破片1点出土したが図化できなかった。慶長～17世紀前半である。（玉永）

b 瓦質 土師質土器 須恵質土器

瓦質土器（第21～24図 表7 図版20・21）

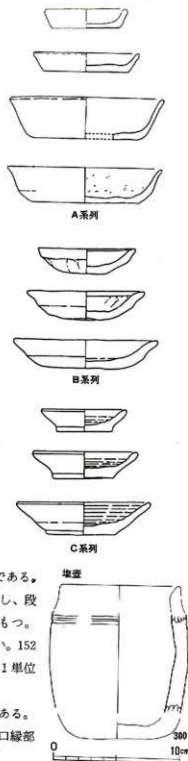
焼成状態の異なる2種がありA・Bと分類した。Aは還元焰焼成によって灰色を基調とする。Bは酸化焰焼成で一見土師質を呈する。

瓦器碗 115・116が内湾する体部の破片、118は底部破片で16世紀後半ころのものである。117は器形や調整の特徴より13世紀後半代に比定できる。

瓦質土器A 器種には鼎、柄付鍋、釜、浅鉢、大鍋、火鉢、播鉢がある。139・140は鼎の破片である。139はくちばし状の口縁部をもつ。139・140共に胴部大半に格子目タキに施されている。141は中空の柄をもつ鍋と思われる。142は肩部に鐙をもつ釜である。143～151の9点は浅鉢である。口縁部の形態に3種類ある。143～146は口縁端部が外側へ肥厚し、段をなす。又、143・145は断面方形を呈し、144・145は丸味をもつ。150・151は口縁部外面に稜をもつ。147は直線的に伸び端部が丸い。152は大鍋と考えられる。161～167は播鉢である。内面に5～8条1単位とするおろし目6単位が方射状に施されている。

瓦質土器B 器種には播鉢、浅鉢、鉢、鍋、釜、鼎、火鉢がある。168は口縁部付近を残す播鉢である。170・171は浅鉢で、170は口縁部が矩形を呈し肥厚する。171は低い台を有する底部破片である。

表5 豊後の土師質土器分類表



第20図 安岐城跡出土遺物実測図(6) 埴堂

172・176～178・180・181は鉢の口縁部～体部の破片である。172は、内湾気味に立ち上がり、176～178・180は口縁端部がやや肥厚する。181は口径36.6cm、器高12.7cm、底径24cmの法量をもつ。口縁部は細かく外反する。173は釜の破片で薄い鈎をもつ。174は胴部上半以上を残す鼎である。口縁部は外反し、端部で内面に向い逆「く」の字状に屈曲する。169は鍋の破片で、丸味を帯びる体部に緩く外反する口縁部をもつ。175・179は火鉢である。175は口縁部が大きく外反し、体部に8条の深い沈線が施されている。

瓦質土器の所属時期は142・161・168が第2期、154・157・159・171が第3期に伴うものであり、他は全て第1期に属している。しかし器種の特徴に時期的な差は認められず、ほぼ16世紀後半代に比定できる。

土師質土器 (第25図 表7 図版21・22)

坏、小皿、特小皿の3器種が出土している。

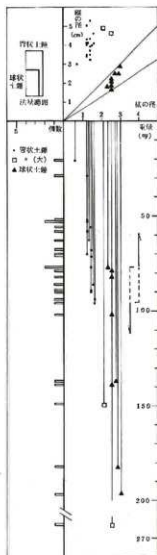
このうち基本的なセット関係を示すものは坏(212)1種、小皿(183・184・186～201)1類と考えられる。坏1類は復原口径17.4cmをもち、体部は直線気味に大きく開き、内面に明瞭なロクロ痕を残す、口縁部は細くなる。小皿は坏の形態を基本的に踏襲するものと思われる。坏2種は平底を呈する底部より、直線的に開く体部をもつ。復原口径11.7cm、器高4.8cm、底径6.3cmの法量である。坏3類(211)は、復原口径13.3cmをもち、小皿3類と組み合わせる手捏土器である。小皿1類(183・184・186～201)は、坏1類を小型した形態と考えられ、浅い立ち上りを呈す。口径10.3cm～12.9cmで10cm～11cmが主体であり、器高は2.3cm～3.2cm、底径5.9cm～7.8cmである。小皿2種(185・202・203)は外端部が突出する厚い底部に上半が大きく内湾する体部が付く。口径9.8cm～10.2cm、器高2.6cm～3cm、底径6.4cm～7.2cmの法量をもつ。小皿3類(209～210)は丸底を呈し体部が大きく開く手捏土器である。口径は8.8cm～9.4cmである。特小皿(204～208)は直立する体部に細く内湾する口縁部をもつ。口径5.4cm～5.8cm、器高1.3cm～1.8cm、底径4.0cm～4.7cmの法量はほぼ同一規格である。

坏・小皿1類は、大分市岩屋寺遺跡出土例に類似するが後出的な要素を含んでいる。相互の輸入陶磁器に示される所見と矛盾はなく16世紀後半代と考えられる。

坏2類は、高知県中部地域の田村遺跡出土土器に系譜の推移と類例を見ることができ、16世紀末頃に比定できる。佐伯市榎牟礼城跡古市地区出土の坏に先行する形態が見られる。

小皿3類は、岩屋寺遺跡の中心器種であるが安岐城の例は体部の立ち上がりの傾斜などに後出的な形態を示しており坏、小皿1類と同様の傾

表6 土師法量相関表



向が寝られる。

土師質土器の出土地点より見た所属時期は2期に183・184・211・220・3期に219が伴ない、他は全て1期に比定できる。しかし、1・2期に器形の差は認められない。3期の219は1・2期では全く検出されておらず、この事実を重視すれば、新しい時期に招来された器形と考えられる。このように土師質土器はほとんどが1期の組成を示すものと考えられる。1期に伴う輸入陶磁器は16世紀前半の数例も存在するが同期の土師質土器は大半が16世紀後半に比定される。後続する2期（～1590年頃）との間に土師質土器の型式的な差は認められない。又、3期（～1600年）との差も新来の器形を除けばないものと云える。

須恵質土器（119～122）

119・120は共に口縁部が逆「く」字状に短く屈曲する。内外面に横撫でが施されている。器種は鉢と思われる。121は壺の破片である。口縁部は「く」字状に外反し、体部が張る形態を呈するものと思われる。体部内面には同心円の当見痕を残す。122は甕の破片であり、口縁部は緩く外反し、端部は丸く肥厚する。

塩壺（第20図）

胴部^{1/2}の破片である。胴部上位に2条の粗い沈線が施されている。外面は横方向ナデ、内面には指頭による整形痕が残る。内外面共に黒褐色を呈する。胎土に多量の角閃石粒を混入している。出土地点は本丸地区隅櫓上部の最終整地層中であり、第3期に伴うものである。

土鍾（第26図 表6 図版23）

土鍾は54点出土した。形態は管状タイプと球体タイプの2種類がある。管状タイプは大きさに2種類あり、縦径3cm～5.3cm、横径0.7cm～1.6cmのものをA-1とし、横径が2cmを越えるものをA-2とした。更に球体タイプはBと分類した。完形品27点を用い法量比図を作成した。各タイプの縦、横径と重量の関係はA-1タイプが法量に幅があるものの重量は9.6gを越えるものがなく、Bタイプに7.7g未満の例はない。7.7g～9.6gの間は両者が重複する範囲となっている。従って、限られた質料ではあるが、重量に形態が反映されたものと考えられる。土鍾52点中32点はA5区SB1南部の一括出土であった。SD1からは5点出土しており第1期に伴うものと考えられる。

土師質土器について（表5参照）

豊後の土師質土器については、近年調査研究が進展しその組成と系譜が次第に明らかにされつつある。その成果をもとに安岐城跡出土土師質土器の位置付けを試みた。

15世紀後半より16世紀の土師質土器の坏、小皿を中心にその系譜と主体となる器種を「系列」と捉えていくと、豊後には、大きくA・B・Cの3系列が考えられる。

A系列：玖珠郡玖珠町に所在する伐株山城跡¹³の出土土師質土器を示すことができる。16世紀後半代に比定されている坏AⅥ、Ⅶ、小皿AⅤ、AⅥは、九州の土師質土器がへう切りから糸切りへ転換した以降（豊後では、10世紀後半代）の坏、小皿に系譜を求め得る器形であり、伐株山城跡の主体をなす土師質土器である。

B系列: 大分市岩屋寺や守岡遺跡²⁾出土の丸底を呈す手捏ね土器の坏、小皿、特小皿のセットが基本となる。坏の形態が小皿、特小皿にも踏襲されており器種の差は法量で区別される。

C系列: 安岐城跡で主体をなすと考えられる坏1類、小皿1類を基本組成とする。

A系列は、16世紀後半代の伐株山城跡では主体をなす組み合わせであるのに対して、同時期の安岐城では、同様の形態をもつ坏、小皿は全くみられない。しかし、17世紀～18世紀代とされる杵築城跡では若干出土している。技法の変化、特に焼成と器形のシャープな整形に後出的な要素が窺われる。

B系列は、周防の大内氏館跡³⁾では16世紀中葉を境として減少、消滅化し、C系列の坏、小皿が主体となる。又、高知県中部の田村遺跡でも、16世紀中葉より消滅化し、後半には全く見られなくなる。ロクロ生産に転換し坏の器形の変化と共に新たな生産体制が考えられている。豊後地方では、15世紀後半～16世紀前半に岩屋寺遺跡の主体をなし、16世紀後半でも安岐城跡において坏、皿が微量存在する。更に杵築小学校校内遺跡⁴⁾でも見られ、出土層位より18世紀代まで存続するものと考えられる。地域によりその消長過程に著しい差が認められる。

C系列は、豊後地方では坏は、岩屋寺遺跡、田村遺跡などに先行する形態が確認できる。小皿は安岐城においてのみ見られる。このような坏、小皿のセットは安岐城跡において初めて確認されたものである。坏2類⁶⁾は坏1類の先行する形態とした田村遺跡のロクロ成形の坏に系譜の上で形態変化が推察できよう。また、17世紀～18世紀代をみると、杵築小学校校内遺跡は安岐城跡とは時期的に隔絶するが、その坏5類、皿3類はC系列の推移を考える上で注目すべきセットである。

以上のように安岐城跡の土師質土器の器種構成と器形の特徴は、豊後地方の土師質土器の系譜と展開をみる上で極めて重要な様相を示すものと云えよう。

註1)『伐株山城跡』1984年大分県玖珠町教委

2)『臼杵石仏群地域遺跡発掘調査報告書』1982年 臼杵市教委、『守岡遺跡』54年大分市教委

3)『大内氏館跡』I～V

1977～1983年 山口市教委

4)『杵築小学校校内遺跡』

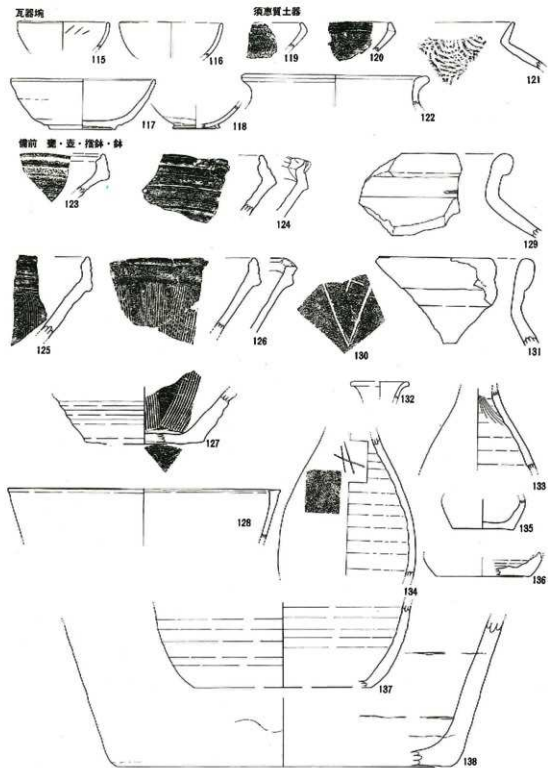
1987年 杵築市教委

5)この他に、大分市稲田遺跡(『稲田遺跡I』大分県教委1988年)、惣田遺跡(『惣田遺跡—三重地区遺跡群発掘調査概報—』三重町教委1983)においても確認されている。

6)佐伯市榎牟礼城跡の古市地区出土遺物に安岐城跡坏2類に先行する形態の坏、小皿のセットが見られる。この点については、県文化課高橋信武氏の御教示を頂いた。

2. 金属製品 (第27図 図版24)

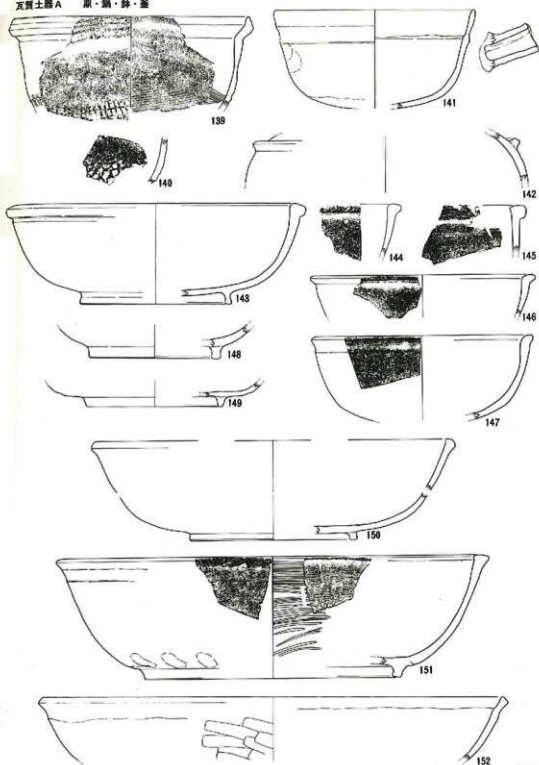
金属製品として23点が図示できた。277・278は鉄小札で本丸1区SD1からの出土である。形態は共にほぼ長方形を呈すが、277は一端が丸味を帯びやや幅広である。孔は277において



第21図 安岐城跡出土遺物実測図(7)

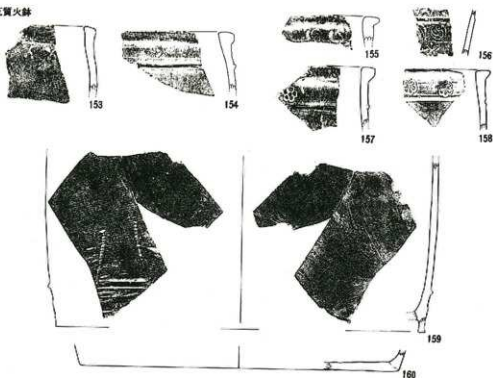
瓦器坑 須惠質土器 備前甕 壺 樽鉢 鉢

瓦質土器A 甗・鍋・鉢・釜

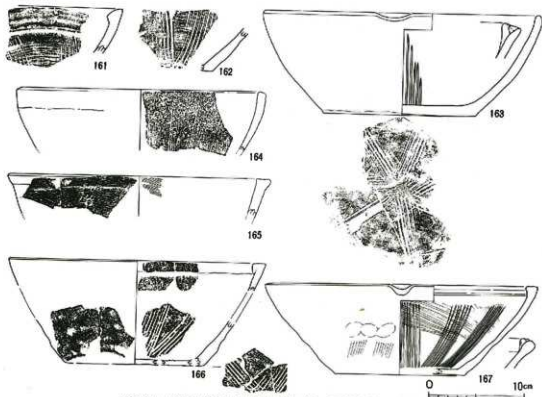


第22図 安岐城跡出土遺物実測図⑧ 瓦質土器A甗 鍋 鉢 釜

瓦質火鉢

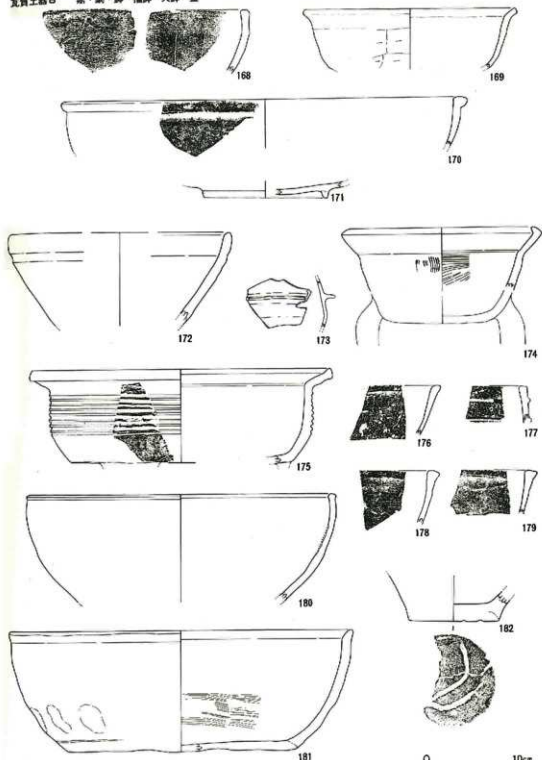


瓦質撥鉢



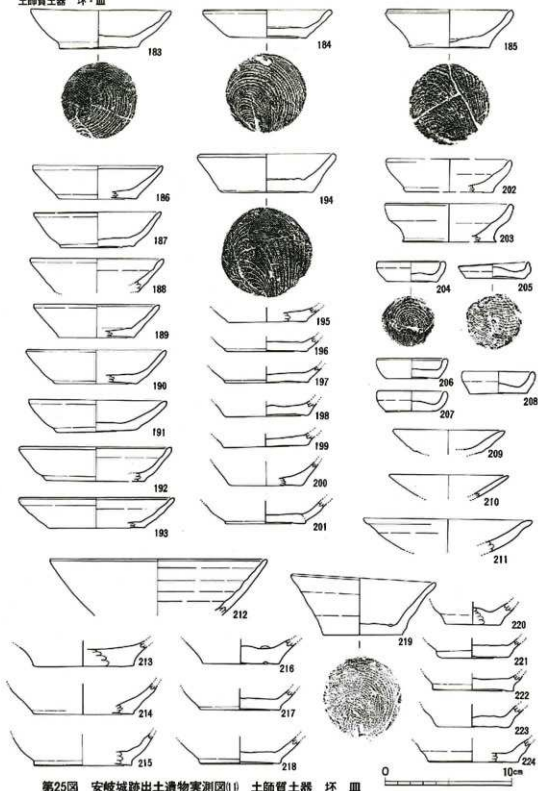
第23図 安岐城跡出土遺物実測図(9) 瓦質火鉢 撥鉢

瓦質土器白 黒・銅・鉢・襖鉢・火鉢・釜

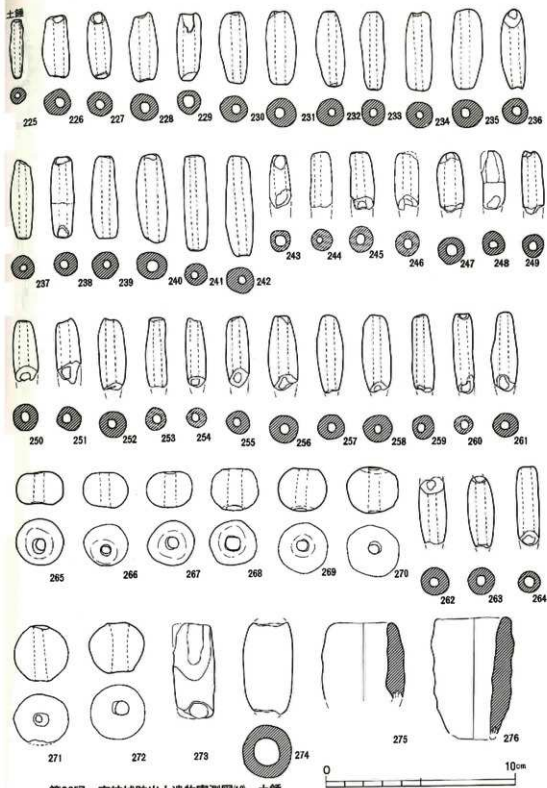


第24図 安岐城跡出土遺物実測図(10)
瓦質土器白 黒 銅 鉢 襖鉢 火鉢 釜

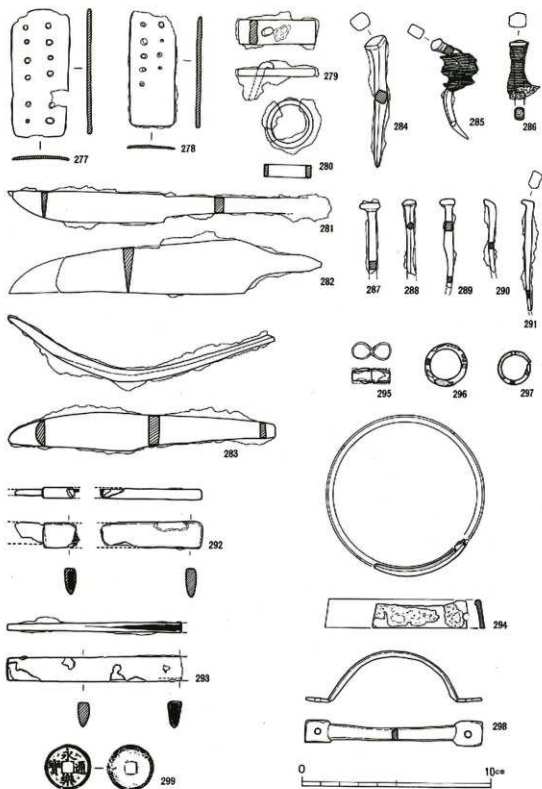
土師質土器 坏・皿



第25図 安岐城跡出土遺物実測図(1) 土師質土器 坏・皿



第26图 安岐城跡出土遺物実測図(12) 土鍾



第27图 安岐城跡出土遺物実測図⑬ 金属製品

表7 瓦質・土師質・須恵質土器観察表

須恵質土器

図版番号	図 様	寸法 (cm) 口径 高さ 底径	説 明	胎 土	色 調	出土地点	備 考
119	鉢	— — —	縁部で	緑泥	内外黄白色	本丸1区SD1	
120	鉢	— — —	縁部で	緑泥	緑褐色	本丸1区第1次遺跡	
121	盃	— — —	内面は心文タタキ 外面不図	黄・黄褐色、石灰 灰を含む	外面・内面・底面とも黄白色	本丸2区第1次遺跡	
122	甕	— — —	内面・口縁部内外黄褐色で 外面緑褐色で	緑泥	黄褐色	本丸2区SA2	

五峰陶

図版番号	図 様	寸法 (cm) 口径 高さ 底径	説 明	胎 土	色 調	出土地点	備 考
115	瓦甕鉢 (9.8)	— — —	内面割で 口縁外縁部で下すねあり 外面は緑褐色で口縁上平縁部は黄褐色でタタキ	黄砂を含む 緑泥	内面黄白色 外面黄白色～黄褐色	本丸1区SD1	
116	瓦甕鉢 (11.8)	— — —	内面平点部で 口縁外縁部で 外面平点部 横方向のへり取り縁部でしめり(縁部利用)	黄砂を含む 緑泥	内面黄白色 外面黄褐色	SB4	
117	瓦甕鉢 (15.4)	5.4 6.8	内面割で 平点部と口縁部で横方向のへり取り縁部 口縁部は黄褐色で口縁上平縁部は黄褐色とあり	白色砂粒 灰を含む 黄	内外黄褐色 外面黄褐色	本丸2区SD1	
118	瓦甕鉢	— — (4.9)	内面平点部で 外面横方向のへり取り一辺部で	黄砂を含む 緑泥	内面黄褐色 外面黄褐色	本丸1区SD1	

瓦質土器 A

図版番号	図 様	寸法 (cm) 口径 高さ 底径	説 明	胎 土	色 調	出土地点	備 考
129	甕	(23.0) — —	内面割で 口縁部は黄褐色で下すねあり 外面は黄褐色で口縁上平縁部は黄褐色でタタキ	石灰灰が混入 や黄砂	外面黄褐色 内面黄褐色	本丸2区第1次遺跡	外面は付着
140	甕	— — —	外面上縁タタキ縁部で下すねありタタキ 内面は黄褐色の割 (口の広部)	黄	外面一帯黄褐色～黄褐色 内面黄褐色	本丸1区SD1	内面は黄褐色
141	甕 口縁部	(21.2)(10.6)	内面・外面割で	赤色砂粒を含む 緑泥	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区SD1 本丸1区第1次遺跡	内面は黄褐色 外面は黄褐色
142	甕	— — —	外面割で 内面割で及びタタキ	石灰灰を含む 緑泥	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸2区第1次遺跡	
143	瓦 鉢	12.0 10.5 (10.5)	口縁部外面割で縁部で 内面割で 外面割で及びタタキ	黄砂、石灰灰、赤色 砂粒を含む	外面黄褐色黄褐色の 黄褐色 内面黄褐色	SB2 本丸2区第1次遺跡	
144	瓦 鉢	— — —	口縁部縁部で 外面割で縁部で 外面割で縁部で	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸3区SD1	
145	瓦 鉢	— — —	内面・外面割で 内面一帯縁部の割で	黄	内外黄褐色～黄褐色 内面黄褐色	本丸4区第1次	
146	瓦 鉢 (24)	— — —	内面・外面割で 外面へり取り縁部で	黄	内面黄褐色 外面黄褐色	本丸2区SD1	
147	瓦 鉢	23.6 — —	内面割で 口縁部は黄褐色で下すねあり 外面は黄褐色で口縁上平縁部は黄褐色でタタキ	黄砂を含む 石灰灰 を若干含む 緑泥	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区第1次遺跡 本丸1区第1次遺跡	
148	瓦 鉢	— — (14.0)	内面割で縁部で及びタタキ 外面割で及びタタキ	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸3区SD1	
149	瓦 鉢	— — (14.4)	内面割で 外面へり取り縁部で	黄砂を含む 緑泥	外面黄褐色 内面黄褐色	本丸4区第1次	
150	瓦 鉢 (36.8)(10.5)(17.8)	— — —	口縁部縁部で 外面割で縁部で 外面割で及びタタキ	石灰灰を含む 黄	外面黄褐色 内面黄褐色	SB1	
151	瓦 鉢 (48)	12.9 27.2 (27.2)	内面割で縁部で及びタタキ 外面割で及びタタキ	石灰、白色砂粒を含む 緑泥	内外黄褐色 内面黄褐色	SB2 本丸2区第1 次遺跡 SA2区第1	
152	大 鉢 (60)	— — —	内面割で 外面口縁部縁部で 外面へり取り縁部で	黄	外面黄褐色 内面黄褐色	SB1	外面は付着
153	大 鉢	— — —	内面とも縁部で及びタタキ	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸3区第1次	SB1タタキ文
154	大 鉢	— — —	内面縁部で 内面縁部で	緑泥	外面黄褐色 内面黄褐色	SD6	縁部タタキ文
155	大 鉢	— — —	縁部で	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区第1次遺跡	SB1タタキ文
156	大 鉢	— — —	外面・内面割で	黄	外面黄褐色 内面黄褐色	SB23	SB1タタキ文
157	大 鉢	— — —	外面縁部で 内面口縁部縁部で 内面縁部で	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	SD6	縁部タタキ文
158	大 鉢	— — —	外面・内面割で	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	SA1区第1	電燈タタキ文
159	大 鉢	— — (39.2)	内面タタキ・外面の縁部上縁部の割で 外面上縁 タタキの割で 外面へり取り縁部で	緑泥	外面黄褐色 内面黄褐色～黄褐色	SD6	
160	大 鉢	— — (34)	内面縁部で 外面縁部で 外面縁部で 外面縁部で	黄	内外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区SD1	

図号 図記号	時期	位置 (cm)		器 名	胎 土	色 澤	出 土 場 所	備 考	
		口 径	底 径						
161	銅 鉢	—	—	外糸線で 内面横方向 4×5 目	石灰を含有 赤褐色 粒を若干含む 麻葉	外面暗褐色 内面明褐色 口縁附近灰黄	本丸 1 区Ⅱ 2 次墳頂部出土	内面磨目 1 単位 5 本	
162	銅 鉢	—	—	外面粗粒研瓦製で 内糸 4 目	石灰・内筋 土 赤褐色 粒を含む 麻葉	緑灰色	本丸 2 区 S D 1	内面磨目 1 単位 8 本	
163	銅 鉢	20	33.9	16.8	外糸 1 部横方向のみで 外糸下縦線粗粒の混入として横方向のみで 縦筋外糸には粒が散在	石灰・内筋 土 赤褐色 粒を含む 麻葉	黄褐色	本丸 1 区 S D 1 本丸 1 区Ⅱ 3 次墳基部	内面磨目 1 単位 5 本 8 本〜3 本以上
164	銅 鉢	(26.6)	—	—	口縁を粗粒で 外面粗粒 5 角 1 列の横筋 糸として粗粒が散在 内糸粗粒が散在	黄褐色	本丸 1 区Ⅱ 1 次墳頂部	内面磨目 1 単位 8 本〜3 本以上	
165	銅 鉢	28	—	—	内面と粗粒を状の横筋 下部は粗粒で 外面粗粒のみ	黄褐色	本丸 3 区Ⅱ 出土		
166	銅 鉢	(27.2)	(11)	(14.8)	口縁粗粒製で 縦筋粗粒は内筋 外・内とも粗粒が散在	外面灰色〜白色 内面灰色	本丸 3 区Ⅱ X 1	内面磨目 1 単位 6 本	
167	銅 鉢	29	9.6	13.8	外面粗粒 下部糸 4 目 縦筋粗粒 下部糸 4 目 内面粗粒 下部糸 4 目 口縁粗粒 下部糸 4 目 口縁粗粒 下部糸 4 目	石灰を含有	内面暗褐色	本丸 11	

瓦爾士格魯夫

図号	部 材	位置 (cm)		備 考	形 上	色 調	出 土 地 点	備 考
		口 径	深 度					
168	部 材	—	—	1. 罐外面に縦線で 外面へ面へ割り	密	内外面黄褐色色	本丸2区第1次塚地層	
169	鉢	(22.6)	—	口縁内面青白・胴内面黄褐色で 胴部外を白・外面下段灰白色付着	磁砂粒混入 小石混	灰白色・灰白色	本丸1区第1次塚地層	
170	流 鉢	(43.0)	—	外面に縦線で	細密	黄褐色～赤褐色	本丸地区表土	
171	流 鉢	—	(13.1)	流型内面腹で平作仕上げ 流型外面割り	密	黄褐色・黄褐色	S D 7	
172	鉢	—	—	内面・外面とも割底造し・ 面で	内面・口縁石赤褐色砂 粒を含む 細密	外面・内面・外面黄褐色	本丸1区S D 1	
173	流	—	—	口部利用による面で	内面石赤褐色を含む 細密	外面赤褐色 内面黄褐色	本丸3区S D 1	
174	流	(21.4)	—	口部外腹で・外面腹で 外面腹面を白・面へ割底 口部外腹面付着 有無不明の面腹で	磁砂粒混入 密	灰白色	本丸3区S D 1	
175	丸鉢?	(31.6)	—	外面腹方向のへう割き 外面腹で	内面・内面石赤褐色砂 粒を多く含む 細密	内面赤褐色 外面・外面石赤褐色	S X 4	
176	鉢	—	—	口内面腹でで平作に 外面腹面は方田のへう割り	細密	黄褐色	本丸1区第1次塚地層	断面8.5cmの区
177	鉢	—	—	外面腹で 外面上部腹で 外面腹へう割り	細密	外面黄褐色 内面黄褐色	本丸1区S D 1	
178	鉢	—	—	外面腹面で	密	黄褐色	本丸2区S D 1	
179	丸 鉢	—	—	内面・外面腹で	密	黄褐色	本丸1区第1次塚地層	
180	鉢	(22)	—	内面上部腹で 内外面割底しい 外面上部腹で	青	外面黄褐色・内面 黄褐色・外面赤褐色	本丸1区S D 1 本丸1区第1次塚地層	
181	鉢	36.6	12.7	外面腹で割底上下に断面直内 内面研削 割底の後で 断面外面割底が見える	内面石赤褐色砂 粒を含む 細密	外面黄褐色 内面赤褐色	本丸4区表土	
182	不 明	—	9.8	断面内腹で 内面腹面一部腹面でも割底で 断面内腹面のみ腹で	細密	外面赤褐色 内面黄褐色	S X 1	断面部?

土彈簧环、圓

1990年号	规格	直径 (cm)		用途	树种	颜色	出土地点	备注
		口径	底径					
183	小 径 (11.3)	2.8—3.2	0.2	内庭 内庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	金色霞丹多量、白色 砂粒少量含む	内庭灯燭色 外庭霞色 1.5倍の霞色	S 5 2	灯石板あり
184	小 径 10.5	2.1—2.3	0.2	内庭 外庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	金色霞丹多量含む	内庭灯燭灯燭色 其分の霞色霞色	S 8 15 横出	
185	小 径 (10.2)	3	0.4	内庭 内庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	1.5倍の霞色多量、2.0 の白色砂粒少量、赤土 少量含む	霞霞色	本丸1区段1区段利用 本丸1区段 S 1	
186	小 径 (10.0)	(2.6)	(6.9)	内庭 内庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	金色霞丹多量、白色 砂粒少量含む	内庭灯燭灯燭色 1.5倍の霞色霞色	本丸2区段 S 1	
187	小 径 (10.2)	2.8	(5.9)	内庭 内庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	金色霞丹多量、径 1.0 の白色砂粒少量含む	灯燭色 其分の霞色霞色	本丸1区 S 1	
188	小 径 (10.6)	—	—	内庭 内庭庭利用用櫛敷で	霞霞色多量、1.0倍の 霞色霞色、1.5倍の霞 色霞色含む	内庭霞霞色 外庭霞霞色	本丸2区 S 1	
189	小 径 (10.2)	2.6	(5.2)	内庭 内庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	金色霞丹多量、白色 砂粒少量含む	灯燭色	本丸1区 S 1	
190	小 径 (11.2)	(2.6)	(6.6)	内庭 内庭庭利用用櫛敷で 庭敷の切り盛	金色霞丹多量、白色 砂粒少量含む	霞霞色	S 5 2	

図例番号	図例	位置 (m)			調査	土質	色調	出土地点	備考
		13	14	15					
191	小 皿	11	23~27	64	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	黄褐色色 部分的に灰褐色	本丸1区SD1	
192	小 皿	(11.2)	(27)	(7.3)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色多量、白色粒 子少量	外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区第1次掘削	
193	小 皿	(12.3)	(24)	(2.7)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色多量、白色粒 子少量	外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区SD1	
194	小 皿	11~13.5	23~31.5	7.2	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、1mmの 白色粒子少量、1mmの 褐色粘土	褐色の強い黄褐色	本丸1区第1次掘削	白土痕あり
195	小 皿	—	—	(5.3)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	黄褐色	本丸1区SD1	
196	小 皿	—	—	6.4	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色	本丸1区SD1	
197	小 皿	—	—	(6.7)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色	本丸1区第1次掘削	
198	小 皿	—	—	(6.5)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色	本丸1区SD1	
199	小 皿	—	—	(6.7)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色	本丸2区SD1	
200	小 皿	—	—	(5.7)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色	本丸1区SD1	
201	小 皿	—	—	6.4	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、1mmの 白色粒子少量、褐色 粘土層	外黄褐色 内面黄褐色	本丸1区SD1	
202	小 皿	(8.8)	(2.5)	(7.2)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色、灰色黄褐色を 含む黄褐色	黄褐色	SX2	
203	小 皿	(10.2)	(3.0)	(7.4)	内外面は利用状態で 回転未切り底	白色粘土層 黄褐色多量	内外面とも黄褐色	本丸1区SD1	
204	特小皿	5.5	1.6	4.8	内外面は利用状態で 回転未切り底	黄褐色多量、白色粒 子少量	内外面黄褐色 内面 褐色、黄褐色	本丸1区第1次掘削	
205	特小皿	5.8	1.5~1.3	4.7	内外面は利用状態で 回転未切り底	黄褐色、石灰を 含む黄褐色	内外面黄褐色	SX3	ひずみ大きい
206	特小皿	5.7	1.6	4.2	内外面は利用状態で 回転未切り底	黄褐色、石灰、内面 を多く含む 黄褐色	内外面黄褐色 内面 褐色、黄褐色	本丸1区第1次掘削	
207	特小皿	5.4	1.7	4.0	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色、粘土層	黄褐色	本丸1区SD1	
208	特小皿	5.5	1.8	4.5	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	黄褐色	本丸1区第1次掘削	
209	小 皿	(8.8)	—	—	内外面は利用状態で 回転未切り底	黄褐色	黄褐色	本丸1区第1次掘削	手掘り土
210	小 皿	(9.4)	—	—	内外面は利用状態で 回転未切り底	黄褐色	黄褐色	本丸1区第1次掘削	手掘り土
211	小 皿	(13.3)	—	—	内外面は利用状態で 回転未切り底	黄褐色	黄褐色	本丸2区第1次掘削	手掘り土
212	杯	(17.4)	—	—	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色	SX2	
213	杯	—	—	(8.0)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	SX23	内面黄褐色多量
214	杯	—	—	(8.0)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区第1次掘削	
215	杯	—	—	(7.5)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色	本丸2区SD1	
216	杯	—	—	(8.0)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区SD1	
217	杯	—	—	8.5	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区SD1	
218	杯	—	—	(6.4)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色 粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区SD1	
219	杯	11.7	4.2~4.8	6.3	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区第1次掘削	内面黄褐色多量
220	杯	—	—	4.3	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区SD1	
221	杯	—	—	5.8	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区SD1	
222	杯	—	—	6.4	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸1区SD1	
223	杯	—	—	(5.8)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	SX2	
224	杯	—	—	(7.2)	内外面は利用状態で 回転未切り底	灰色黄褐色多量、白色粒 子少量、褐色粘土層	内外面黄褐色 内面 黄褐色	本丸2区SD1	

表 8 土鍾観察表

番号	形状	外径 (mm)		内径 (mm)	重量 (g)	断面の観察	出土の地点	備考	番号	形状	外径 (mm)		内径 (mm)	重量 (g)	断面の観察	出土の地点	備考	
		最大	最小								最大	最小						
225	管状	3.0	0.7	0.3	0.3	21	黄褐色		S 8 2 柱穴	252	管状	3.6	1.4	0.5	0.6	灰褐色～灰褐色	A-5 SD 1 南側出土	
226	管状	3.2	1.4	0.5	0.4	5.6	黄褐色～灰褐色		A-5 SD 1 南側出土	253	管状	3.6	1.1	0.4	0.6	灰褐色～灰褐色	*	
227	管状	3.4	1.2	0.5	0.5	5.3	灰褐色		*	254	管状	3.6	1.0	0.4	0.4	灰褐色	*	
228	管状	3.5	1.4	0.5	0.6	6.8	黄褐色～灰褐色		*	255	管状	3.7	1.2	0.4	0.4	黄褐色	*	
229	管状	3.5	1.2	0.6	0.6	2.9	黄褐色 (土質質)		SD 5	256	管状	3.8	1.5	0.5	0.5	黄褐色～黄褐色	*	
230	管状	3.7	1.4	0.5	0.4	7.1	灰褐色		A-5 SD 1 南側出土	257	管状	4.0	1.4	0.4	0.6	黄褐色～灰褐色	*	
231	管状	3.8	1.5	0.5	0.5	8.3	灰褐色		*	258	管状	4.0	1.5	0.4	0.3	黄褐色	*	
232	管状	3.9	1.4	0.4	0.3	7.7	灰褐色		*	259	管状	4.0	1.1	0.4	0.4	灰褐色	*	
233	管状	4.0	1.2	0.4	0.4	5.8	黄褐色 (土質質)		*	260	管状	4.1	1.0	0.5	0.4	灰褐色 (黄質)	本丸 1 区 SD 1	
234	管状	4.0	1.5	0.4	0.3	8.6	灰褐色 (黄質)		本丸 3 区 表土 かなり磨耗している	261	管状	4.3	1.5	0.5	0.5	灰褐色～灰褐色	A-5 SD 1 南側出土	
235	管状	4.1	1.6	0.5	0.4	9.4	灰褐色 (黄質)		A-5 SD 1 南側出土	262	管状	4.5	1.4	0.4	0.6	黄褐色～灰褐色	A-5 SD 1 南側出土	
236	管状	4.1	1.3	0.4	0.4	6.3	灰褐色		*	263	管状	4.7	1.4	0.5	0.5	黄褐色～灰褐色	*	
237	管状	4.1	1.2	0.4	0.4	5.2	灰褐色～灰褐色		*	264	管状	4.1	1.2	0.5	0.5	黄褐色	*	
238	管状	4.3	1.2	0.4	0.3	5.2	灰褐色		*	265	管状	4.7	1.5	0.7	0.5	灰褐色 (黄質)	本丸 3 区 柱穴	
239	管状	4.3	1.4	0.4	0.4	8.9	黄褐色～灰褐色		*	266	管状	4.8	1.5	0.6	0.4	7.7	黄褐色 (土質質)	5×1
240	管状	4.6	1.6	0.6	0.6	9.6	灰褐色		*	267	管状	4.8	1.5	0.7	0.6	7.9	灰褐色 (黄質)	本丸 3 区 柱穴
241	管状	5.0	1.2	0.3	0.3	7.0	黄褐色		*	268	管状	5.1	2.5	0.9	0.7	10.2	黄褐色～灰褐色 (土質質)	*
242	管状	5.3	1.4	0.4	0.4	8.0	黄褐色 (土質質)		本丸 3 区 表土 かなり磨耗している	269	管状	5.2	2.5	0.7	0.5	13.9	黄褐色 (土質質)	本丸 1 区 SD 1
243	管状	(2.8)	1.1	0.5	0.5	1.8	黄褐色～黄褐色 (土質質)		S 8 1 柱穴 かなり磨耗している	270	管状	5.5	2.7	0.7	0.6	13.7	黄褐色 (土質質)	本丸 3 区 柱穴
244	管状	(2.6)	1.1	0.3	0.3	4.1	黄褐色 (土質質)		本丸 3 区 表土	271	管状	5.9	3.0	0.8	0.5	19.6	黄褐色 (黄質)	本丸 3 区 柱穴
245	管状	(2.9)	1.2	0.4	0.4	5.0	黄褐色～灰褐色		A-5 SD 1 南側出土	272	管状	6.5	2.8	0.9	0.7	18.2	黄褐色 (黄質)	本丸 3 区 表土
246	管状	(3.0)	1.2	0.4	0.4	6.4	黄褐色		*	273	管状	6.5	2.1	1.0	0.9	14.9	黄褐色 (黄質)	SD 5
247	管状	(3.1)	1.3	0.6	0.5	4.7	灰褐色		*	274	管状	6.6	2.5	1.4	1.3	26.2	黄褐色～灰褐色 (黄質)	本丸 2 区 SD 1
248	管状	(3.1)	1.1	0.4	0.4	3.0	黄褐色～灰褐色		*	275	管状	(4.0)	(3.3)	(3.0)	(2.0)	19.4	黄褐色	本丸 1 区 SD 1
249	管状	(3.2)	1.1	0.5	0.4	3.9	白灰褐色		*	276	管状	(6.3)	(4.2)	(2.6)	(2.6)	38.9	*	本丸 1 区 表土 かなり磨耗している
250	管状	(3.2)	1.3	0.5	0.4	5.5	灰褐色		*									
251	管状	(3.3)	1.3	0.5	0.4	3.8	黄褐色 (土質質)		本丸 1 区 SD 1									

表 9 出土金属製品一覧表

図面番号	種類	素材	出土の地点	備 考	図面番号	種類	素材	出土の地点	備 考
277	小 札	鉄	本丸 1 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	289	釘	鉄	S 8 21	断面は四角形をなす。
278	小 札	鉄	本丸 1 区 SD 1	孔は 5 箇所で 4 箇所の孔が横断である。	290	釘	鉄	S 8 11	断面は四角形をなす。
279	鉄 製 品	鉄	本丸 1 区 SD 1	新製のものと思われる。	291	釘	鉄	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形に近い形で長方形をなす。
280	鉄 製 品	鉄	SD 4	断面は長方形をなすリング。	292	小 刀 柄	鉄	本丸 2 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。
281	刀 子	鉄	本丸 1 区 SD 1	断面は長方形をなす。	293	小 刀 及 刀 柄	鉄	S 8 16	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。
282	刀 子	鉄	本丸 2 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	294	鉄 製 品	鉄	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。
283	銅 製 品	鉄	本丸 1 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	295	銅 製 品	銅	SA 7 柱穴	断面は長方形をなす。
284	釘	鉄	本丸 2 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	296	銅 製 品	銅	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形をなす。
285	釘	鉄	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	297	銅 製 品	銅	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形をなす。
286	釘	鉄	S 8 23	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	298	銅 製 品	銅	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。
287	釘	鉄	本丸 2 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。	299	銅 製 品	銅	本丸 1 区 SD 2 区	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。
288	釘	鉄	本丸 2 区 SD 1	断面は長方形をなす。孔は 2 箇所に穿れている。					

表10 出土金属製品出土地点一覧表

品名	鉄					鉄・銅		銅					合 計						
	小 刀	鉄 釘	刀 子	鋸 歯	釘	不 明	鉄 さ い 明	小 刀	鋸 歯	銅 釘	銅 板	銅 管		銅 線	銅 網	銅 板	銅 管	銅 線	銅 網
SB1南側出土	1																		1
SB4 柱 穴					1														1
SB 21					1														1
SB 23					2														2
SK 11			1		2														3
SK 16								1											1
本丸1区柱穴					1														1
SA7 柱 穴																1			1
本丸1区SD1	2		1	2	7	1													13
本丸2区SD1			1	2				1											4
本丸3区SD1			1																1
SD 2						1													1
SD 4		1																	1
本丸1区第1次 掘削地					2		1												3
SA2 トレンチ 掘削地出土					1														1
本丸1区南側 掘削地出土					1														1
本丸1区南側1号門											2								2
本丸1区南側二 段南側出土									1			1							2
本丸1区南側出土																	1		1
本丸3区表土			1																1
本丸地区表土			1																1
北地区 SX1					1														1
北地区 SK5					2														2
合 計	2	2	6	2	23	2	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	46

7個縦2列に穿されており、278も同様と考えられるが5個2列までしか確認できなかった。277は現在長6.2cm、幅2.5cm、278は長さ6.7cm、幅2.7cm～3.1cmである。279は紙留をもつ鉄片でSD1から出土した。

280は断面長方形の鉄環でSD4出土。281・282はSD1出土の刀子である。282は大型品である。283はSD1出土の鉄製の鋸で刀身は片面が平坦で他方は丸く厚みをもつ。284～291は全て断面環形の釘である。292・293は小刀の残欠である。292は柄部、293は銅製の鞘に納まった状態である。銅製品では、294～299を図示した。294は、緑金具と思われる銅環、295は小型の銅環が2連つながった形態を呈す。296・297は断面円形の環である。298は、引手金具で両端に釘孔をもつ。299は「永楽通寶」である。(小林)

3. 瓦類

本遺跡からは、整理箱にして約160箱に及ぶ多量の瓦が出土している。その大半は、本丸Ⅰ区櫓跡周辺及びSB23からの出土である。

出土瓦は、^{あふみ}鎧瓦・^{のぶ}宇瓦・^お男瓦・^お女瓦・^{うらふせ}烏宴・^{こもろ}小菊瓦・^お鬼瓦・^お懸斗瓦等に分類できる。しかし第11表で示したように、そのほとんどが小破片であり、復元できる個体は極く少量である。個体数別では、女瓦が最も多く87%を占める。次いで男瓦の約10%、以下少量ずつではあるが宇瓦・鎧瓦の順となっている。その他道具瓦類は、出土個数がそれぞれ1～2点と極めて少量のため、型式分類等の比較対象個体とはなりえなかった。以下順をおってそれぞれの瓦について、記述していくことにする。

^{あふみ}鎧瓦 (第28・29図、第12・13表、図版25)

出土した鎧瓦は21個体であり、全て破片である。このうち瓦当文様の判別できるものは15個体である。瓦当文様から2型式に分類される。また瓦当径を計測出来る個体は1点もなく、更に男瓦部の残存状況に於いては、瓦当部近辺しか残っていないという有様で、全容を窺う事は出来なかった。

I類

^{あふみ}鎧瓦Ⅰ類は、SB23・本丸Ⅰ区櫓上部最終整地層から出土している。出土点数は、5点を数える。全て小破片である。

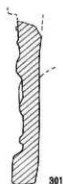
瓦当文様は、左巻きの三ツ巴文とやや小さめの連珠文との組み合わせである。内区と外区を隔てる圏線は、省略されている。巴文の頭部は、Ⅱ類と比較すると若干小さく、その先端は丸い。それぞれの先端部は接していない。中心空間は、若干広めである。尾は、頭部先端からならだかに移行しており、徐々に細くなり後方に引く。長さは約1/4回転程度となっている。それぞれの巴の尾は離れていて、巴文による圏線は形成していない。珠文径は約0.7cm、高さは約0.3cmを測る。珠文数は、復元による推定であるが、19前後であろう。外区外縁(周縁)幅は、2.7cm前後でⅡ類と大差ないが、高さは若干低い。瓦当径は、復元による数値、更には外区縁幅の個々の違いにより正確な値は出ないが、16cm前後であろう。外区縁幅の瓦当径に占める割合は32%前後である。Ⅱ類と比較すると若干小型の鎧瓦である。

色調は、301・302とも暗灰色で、胎土に若干砂粒を含んでいるが、きめ細かく良質であり、焼成も堅緻である。301の瓦当裏面には丸瓦部との接合強化の為の縦方向の荒い櫛目がみられる。接合部内面の補充粘土は少量で、瓦当裏面の粘土を指で撫でつけている。瓦当文様は、明瞭である。303・304は外面黒色、内面は茶褐色であり、いわゆる蠟瓦である。胎土は砂粒や径2～3mmの小石粒をかなり含み、やや軟質である。瓦当裏面には櫛目度はみられないが、その分補充粘土の使用量が増しており、横方向の指ナデ痕がみられる。瓦当文様はおおむね明瞭であり、瓦当面にハナレ砂の使用がみられる。

Ⅱ類

^{あふみ}鎧瓦Ⅱ類はSB23・SA2表土・本丸Ⅰ区櫓跡周辺など、調査地区内の広範囲から出土してい

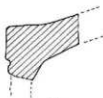
鍮瓦Ⅰ類



301



302

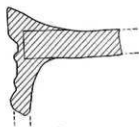


303



304

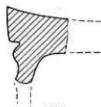
鍮瓦Ⅱ類



305



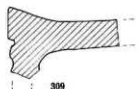
306



307



308



309



310



第28圖 安岐城跡出土遺物実測図(14) 鍮瓦Ⅰ・Ⅱ類

るが、殆どが上面付近出土である。

出土点数は10点を数える。全て小破片である。瓦当文様は、Ⅰ類と同様に全て左巻き三ツ巴文と連珠文との組み合わせである。内区と外区を隔てる圏線は省略されている。巴文の頭部はⅠ類と比較すると大きく、全体に丸い。それぞれの先端部は接していない。その中心空間は、Ⅰ類と比較すると若干狭い。頭部からやや急激に細くなる尾が後方に引き、それぞれの尾は結合していない。長さは約1/4回転程度であり、巴文の上部は、平坦に整形している。珠文径は1.3cm前後、高さ約0.5cmを測る。珠文数は復元による推定であるが、13個前後であろう。この珠文は、Ⅰ類と比較するとかなり大きく、巴文頭部と比較すると若干小さい。

外区外縁（周縁）幅は2.6cm前後で、Ⅰ類と大差ない。高さは1cm前後を測る。瓦当径は復元による数値、更には、外区外縁幅の個々の違いにより正確な値は出ないが、概ね17cm前後であろう。この数値から外区外縁幅の瓦当径に占める割合は、30%前後である。

305・308～310の色調は暗灰色で、胎土に若干の砂粒を含んでいるが、良質であり、焼成も良好である。305・308・309の瓦当裏面には、丸瓦部との接合部に補充粘土をあて、簡単に指で撫でつけた痕跡が明瞭に残っている。307の色調は黒色で、胎土にかなり多量の砂粒を含み、やや軟質である。瓦当裏面の丸瓦接合部は丁寧なナデ調整を行っている。

鍔瓦は以上の2種類21個体であるが、Ⅰ類は中世安岐城に暮かれた瓦当であろう。

Ⅱ類は近世の瓦当と考えられる。このⅡ類の殆どがSB23・本丸Ⅱ区SA2表土層や整地層等の安岐城跡に伴わない遺構からの出土品である。色調からも銀化傾向の進んだものがかなりみうけられる。これらのことより、このⅡ類の瓦当は安岐城廃城後の鍔瓦と考えられる。



Ⅰ類



Ⅱ類



第29図 安岐城跡出土鍔瓦復元図

の34の4
宇瓦 (第30～34図、第12・14表、図版26～27)

出土した宇瓦は55個体であり、その大半は接合不可能な破片であった。このうち瓦当文様の判別出来る個体は46であった。瓦当文様の違いによりⅠ～Ⅲ類まで大きく3種類(亜類も含めると5種類)に分類される。宇瓦も鍍瓦同様、女瓦部の残存状況が悪くその全容を知りえることは出来なかった。

以下Ⅰa類から順をおって記述していく。

Ⅰa類

宇瓦Ⅰa類は、SB23・本丸Ⅱ区SA2表土を中心にして全体で7点出土しており全て破片である。

瓦当文様は、素文縁の均正唐草文であり、中心飾に3葉の木葉文を配する。瓦当幅は6cm前後であり、内区は細い界線を持つが、下方中央部分は省略されている。又内区の両端下方に、それぞれ径0.8cm前後の珠文を1個ずつ配している。それらの珠文を避けるように界線が湾曲しながら、珠文の下方と接している。中心飾の左右には、先端の巻いた蔓草を各3個配する。更に中心飾の上部と下部に、それぞれ1組ずつの副葉が施されている。蔓草はそれぞれ独立している。瓦胎・瓦当文様とも浅いが、文様自体は明瞭である。

313の色調は、黄褐色で、胎土に砂粒や小石粒をかなり含む。313以外の瓦当は、色調が暗黒灰色で、胎土に若干の砂粒を含むが、きめ細かく良質であり、焼成も堅緻である。

珠文と界線の接し具合からみても、Ⅰa類は全て同范である。

瓦当成形は瓦当上面に女瓦凸面を貼り付けている。櫛目痕は確認できなかった。

Ⅰb類

宇瓦Ⅰb類は、本丸Ⅰ区櫓周辺より出土している。出土点数は、13点を数えⅠ類3種の中では出土量が一番多く宇瓦全体の30%を占める。

瓦当文様は、Ⅰa類と同様、素文縁の均正唐草文で、中心飾に3葉の木葉文を配する。Ⅰa類と比較すると、まず界線が省略されている。瓦当幅・内区幅とも若干広めであり、それぞれ6.5cm・4.8cmを測る。蔓草は、左右に3葉ずつ反転している。これはⅠa類と同じであるが若干太めであり、木葉文上下の副葉は、省略されている。更に左右の珠文が1.0cm前後と大きくなっている点などがあげられる。唐草文の特徴としては、右の第1・2の蔓草の茎の部分と、左の第2蔓草の先端部と茎の部分が接するようニッ所に范傷がみられる。この范傷からみてⅠb類は全て同范である。

318・321は、色調が暗青灰色で、胎土に微砂粒を含むが、きめ細かく良質である。焼成も堅緻である。瓦当上弦はヘラ削り調整を行っている。瓦当の成形は、瓦当上面に横方向の櫛目を入れ女瓦凸面に貼り付けている。女瓦凸面の櫛目痕の有無は不明である。接合部の調整には、補充粘土の使用はなく、横ナデだけで仕上げている。残りの宇瓦Ⅰb類は、色調が全て明黄褐色で、胎土に砂粒・小石粒を若干含むが良好であり、焼成も良好である。

瓦当成形は、前者と同じ貼り付けである。

字瓦Ⅰa類



311



312



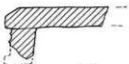
313



314



315



316



317

第30図 安岐城跡出土遺物実測図(15) 字瓦Ⅰa類

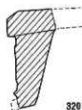




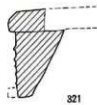
318



319



320



321



322



323

0 10cm

第31圖 安岐城跡出土遺物実測図(16) 宇瓦Ⅰb類

宇瓦Ⅰc類



324



325



326



327

宇瓦Ⅱ類



328



329

第32図 安岐城跡出土遺物実測図(17) 宇瓦Ⅰc・Ⅱ類



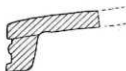
字瓦Ⅲ類



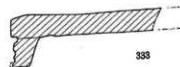
330



331



332



333



334



335



第33圖 安岐城跡出土遺物実測図(18) 字瓦Ⅲ類

I c 類

宇瓦 I c 類は、SB23・本丸Ⅱ区 SA2 表土を中心にして、I a 類とほぼ同様の出土例を示している。出土点数は 8 個体を数える。

瓦当文様は、I a 類・I b 類と同様、素文縁の均正唐草文で左右に反転する 3 葉の蔓草をもち、中心飾に 3 葉の木葉文を配する。しかし I a 類と比較すると、I b 類同様界線が省略されている。更に木葉文の左右 2 葉の開きが、前者はほぼ真横だったのに対し、I c 類は斜め上方へと開いている。更に右の珠文が消滅し、左珠文 1 個となっている。径は 0.7cm を測る。瓦当幅・内区幅とも I 類の中では一番小さく、それぞれ 4.8cm・3.6cm 前後である。

瓦当厚も他の I 類と比較すると、かなり薄くなる傾向にある。

出土宇瓦の色調は全て暗黒褐色で、胎土に若干の砂粒を含むが、焼成ともに良好である。

瓦当成形は前者同様貼り付

けである。接合部の調整は、補充粘土を使用することなく、指による横ナデで仕上げている。瓦当文様より、I c 類は全て同范である。

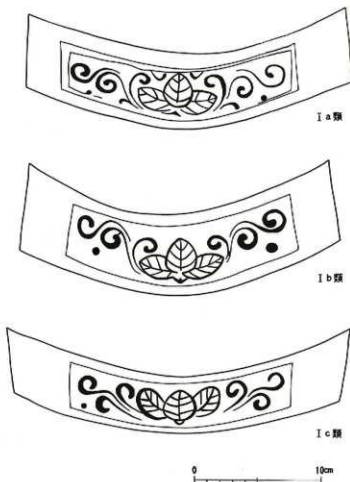
Ⅱ類

宇瓦Ⅱ類は、本丸Ⅰ区櫓上瓦敷・同櫓表土よりそれぞれ 1 点ずつ、計 2 点の出土である。

両瓦当とも小破片で、全容を窺うことはできない。

瓦当文様は、2 個体とも中心飾等は不明であるが、左端部に蕨手文状唐草文様がみられる。この蕨手文の下方に径 0.4cm の珠文を配している。又、細い界線を持つ。瓦当は小型である。

両瓦当とも色調は暗青灰色で、胎土に若干の砂粒を含むが極めて良質で、焼成も堅緻である。瓦当の成形は、瓦当上面に横方向の 3 筋の櫛目を



第34図 安岐城跡出土宇瓦復元図

入れ、女瓦凸面に貼り付けている。

Ⅲ類

宇瓦Ⅲ類は、SB23・本丸Ⅱ区SA2表土等、本丸1区槽跡を除く近世遺構面からまとまって出土している。総個体数は16で、文様の判別できる宇瓦全体の35%を占めている。

瓦当文様は、素文縁の均正唐草文であるが、Ⅰ～Ⅱ類と比較すると非常に退化した文様であり、明確な時期差が窺える。文様は、3弁からなる花文状の中心飾を持ち、唐草文が2回反転する。全体に瓦当が小さくなっている。瓦当幅3.9cm前後、内区幅2.1cm前後である。内区が小さくなったことにより脇区が広くなり、4.5～6.5cm前後と全体の3/4程度となっている。この脇区は鍍瓦が覆い隠すため文様は不用だという考えのためであろう。

色調は、黒褐色で胎土・焼成とも良好である。瓦当面にハナレ砂の使用痕が認められる。

瓦当成形は、瓦当上面に横方向の櫛目を入れ、女瓦凸面に貼り付けている。接合部の調整は、補充粘土を使用することなく、指によるナデ整形をしている。

男瓦^{おがわ} (第35図、第15表、図版28)

安岐城跡から出土した男瓦は非常に多く、全体の10%を占める。その胎土が小破片のため、全長の測れるものを抽出した。その結果、計測出来る個体数は非常に少なく、その胎土がSB23からの出土であった。各男瓦は、凹面に粘土板から切り離す際の横筋がみられ、製作技法・形態的にはほぼ同一である。

色調は、暗黄褐色ないしは黒褐色で、銀化現象を増している個体がみうけられる。形態的にみると、これらは、後世の搬入であろう。

胴長26～27cm前後、玉縁長4cm前後、厚み2cm前後と、殆ど同一数値を示している。

このことにより抽出計測した男瓦は、同時期とみられる。

女瓦^{めがわ} (第36図、第16表、図版28)

本調査区で出土した瓦類の中では一番出土量が多く、全体の80%以上を占める。個数別では、本丸Ⅰ区槽上瓦数など槽周辺部が非常に多かったが、男瓦同様殆どが小破片で、全長を知り得る個体は極く少量であり、全長を知り得た個体はSB23・SK13に集中した。

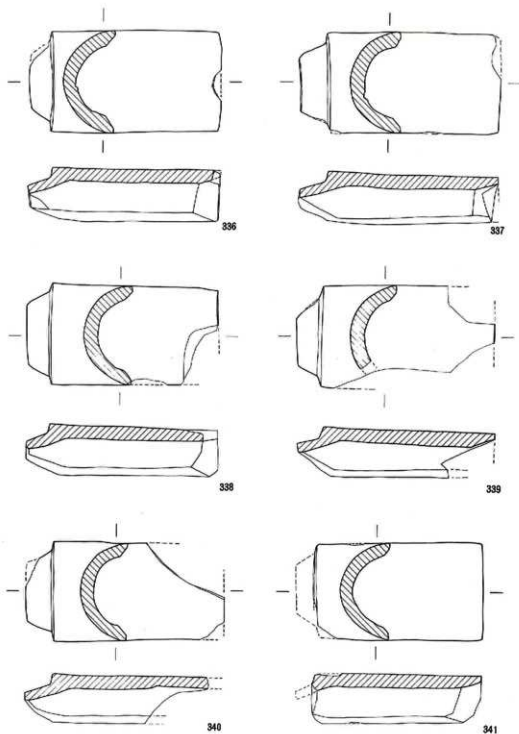
製作技法は、一枚造りで側縁面が、直方向にへう切りされている。その後、側縁面に面取りが施されている。形態的には、長さ29～30cm、厚み1.6cm前後と殆ど同一数値を示している。これらのことにより、形態分類は不可能である。

色調は、暗黄褐色ないしは黒褐色で、胎土に砂粒を含み、一部風化が激しく焼成を含めて良好とはいえない。

懸斗瓦^{おしとがわ} (第36図、図版29)

懸斗瓦においては、瓦類が小破片であり、懸斗瓦として利用されたものか、平瓦として葺かれたものか、明確に判別できない物がかなり存在した。このうち346は、分割線が明確に遺存している。明確に懸斗瓦といえるのは、この1点と分割された残り半分の2点だけである。出土地は、本丸Ⅰ区槽上瓦数である。

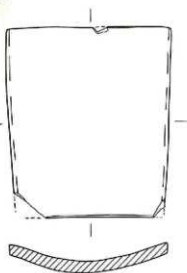
男瓦



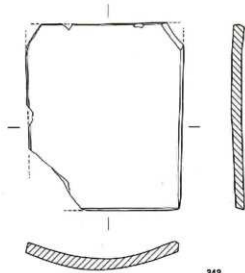
第35图 安岐城跡出土遺物実測図(19) 男瓦



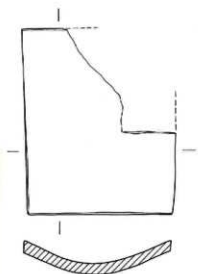
女瓦



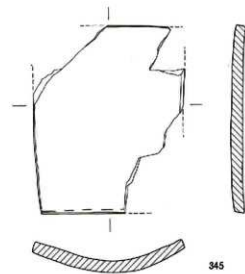
342



343

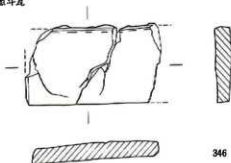


344



345

歇斗瓦



346

0 20cm

第36图 安坡城跡出土遺物実測図20 女瓦 歇斗瓦

色調は、暗黄褐色でかなり風化を受けていて、胎土・焼成とも良好とはいいがたい。
分割線・凸面の角度よりみて、女瓦の再利用とは考えにくい。慰斗瓦として製作されたものと思われる。

鳥食
鳥食 (第37図、第13表、図版25)

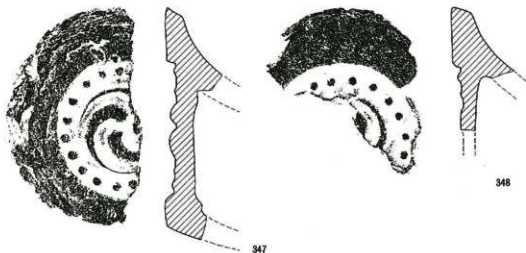
鳥食は2点出土している。いずれも本丸Ⅰ区槽周辺出土であり、瓦当部の一部を残している。
伏間 (男瓦部) は、殆ど欠損していて、全容を窺うことはできない。

瓦当文様は、鍍瓦Ⅰ類と同様である。ただ外区外縁 (周縁) が鍍瓦より広くとっている。

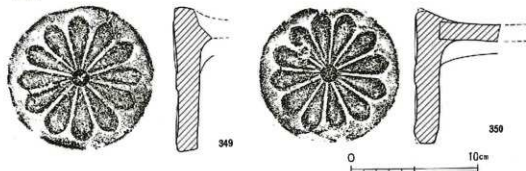
この鳥食は、鍍瓦の瓦当をそのまま利用し、瓦当に伏間部を接合している。その後外縁に補充粘土をあて、外縁を広くとり、その粘土で接合部を補強し、外面を整形する技法を用いている。瓦当裏面は、やはり補充粘土を用いて、指による荒いナデを行っている。

両瓦当の色調は暗黄灰色で、胎土に若干の砂粒を含むも焼成ともに良好である。

鳥食



小菊瓦



第37図 安岐城跡出土遺物実測図21 鳥食 小菊瓦

小菊瓦 (第37図、第13表、図版29)

小菊瓦は、SB23・SK13よりそれぞれ1点ずつ出土している。径11～11.5cmを測る。

瓦当文様は、いずれも菊花文12弁で単弁である。両瓦当とも一ヶ所、菊花文の先端に陥傷を持ち同陥である。男瓦との接合部には、補充粘土をあてナデ整形している。男瓦部も小形であり、小菊瓦専用に製作されたものであろう。全体にナデ調整されている。

色調は、349が黒灰色、350が赤褐色であるが、胎土は両瓦当とも若干の砂粒を含むが良好である。焼成も概ね良好である。

その他の瓦類 (第38図、図版29)

351～353は、女瓦凸面にへう書き文様を持つ。花文風のへう書きで、幅0.2～0.4mm、深さ0.1～0.2mmの断面半円形の様相を示す。

354～359は、男瓦・女瓦の先端部に残る瓦当部との接合痕である。354～356は、男瓦先端部の接合痕で、凹面に補充粘土をあて指による横ナデを行った痕跡が残る。356は、凹面にも櫛目痕が残る。357～359は、女瓦凸面の接合痕である。6～7条の横方向の櫛目を入れ、宇瓦瓦当上部と接合している。この女瓦の補充粘土の使用痕跡は不明である。

女瓦刻文



男瓦接合痕



女瓦接合痕



第38図 安岐城跡出土瓦拓影

表11 安岐城跡出土瓦一覽表

遺 蹟 名	男 瓦					女 瓦					数瓦	字瓦	瓦表	瓦瓦	小瓦	合 計
	a	b	c	d	小計	a	b	c	d	小計						
SB 23 うら込め内	4	24		44	72	2	140	5	395	542						614
SB 23	4	57	1	146	208	1	144	8	817	970	7	19			1	1,205
SK 6				1	1		7		22	29						30
SK 12							1		3	4						4
SK 13	2			2	4	3	5	1	21	30					1	35
SK 14									1	1						1
SK 15							1			1						1
SD 8		5		10	15		7		101	108		1				124
本丸1区橋南側堀土内	8	4		50	62		62	2	271	335	2	2				401
本丸1区橋南側堀土 石積直下		1			1		3		2	5						6
本丸1区橋土境上				4	4		5		20	25						29
本丸1区橋上瓦敷	2	63	3	211	279		372		2,571	2,943	2	7				3,231
本丸1区橋上部段状整地層		3		10	13		159	9	793	961	6	8	1	1		990
本丸1区橋北西隅石垣 上部堀土中									1	1						1
本丸1区橋表土	1	19	2	42	64		58		186	244		3	1			312
SA 1 表土		1		2	3				2	2						5
SA 2 表土		44	4	82	130		101	10	330	441	3	15				589
SA 2 石積列内	1	6		16	23		14	1	55	70	1					94
SA 2 東邊石中									1	1						1
本丸1区 SD 1									3	3						3
本丸地区表土				1	1				3	3						4
北 地 区							4		5	9						9
	14	231	14	621	880	6	1,083	36	5,603	6,728	21	55	2	1	2	7,699

※ a……辺を破す瓦 b……隅を破す瓦 c……大破片 d……小破片

表12 鎧瓦・字瓦型式別出土量一覽表

出 土 地	瓦		字			瓦		合 計	率
	I	II	I a	I b	I c	I	II		
S B 23	2	4	3		4		8	21	34.5
S D 8					1			1	1.6
本丸Ⅰ区 SA 2 表土		2	3		3		5	13	21.3
本丸Ⅰ区表土				2			2	4	6.6
本丸Ⅰ区橋南側堀土内		1		1			1	3	4.9
本丸Ⅰ区橋上部段状整地層	3	1		6				10	16.4
本丸Ⅰ区橋上瓦敷		2	1	4		1		8	12.1
本丸Ⅰ区橋表土						1		1	1.6
合 計	5	10	7	13	8	2	16	61	
率 (字瓦)			15.2	28.3	17.4	4.3	34.8		100%

※ 瓦の文様不明の瓦は数値に入れていない

表13 出土瓦計測表1 (鎧瓦・鳥表・小菊瓦)

単位 (cm)

図版番号	分類	瓦当径	内 区		外 区 内 縁				外区外縁		瓦当厚	出 土 地
			径	巴	幅	寸		幅	高さ			
						数	径			高さ		
301	I	—	8.3	左	1.9	—	0.7	0.2	2.6	0.8	2.0	本丸I区横上部最終整地層
302	I	—	—	左	1.9	—	0.7	0.2	2.7	0.7	1.8	SB 23
303	I	—	—	左	1.9	—	0.7	0.2	—	—	—	本丸I区横上部最終整地層
304	I	—	—	左	—	—	0.7	0.2	2.7	0.3	2.3	本丸I区横上部最終整地層
305	I	—	—	左	2.3	—	1.3	0.5	2.6	0.9	2.8	本丸I区SA 2表土
306	I	—	—	左	2.3	—	1.4	0.5	2.3	0.5	2.1	SB 23
307	I	—	—	左	2.2	—	1.3	0.5	2.7	1.0	2.6	SB 23
308	I	—	—	左	—	—	1.2	0.4	—	—	—	本丸I区SA 2表土
309	I	—	—	左	2.3	—	1.3	0.5	2.6	0.9	2.3	SB 23
310	I	—	—	左	—	—	1.1	0.4	—	—	—	本丸I区横上瓦敷
347	鳥表	17.3	8.4	左	1.8	—	0.7	0.2	2.6~4.4	0.7	1.6	本丸I区横表土
348	表	—	—	左	1.9	—	0.7	0.3	↑~4.7	0.7	1.7	本丸I区横上部最終整地層

単位 (cm)

図版番号	分類	直径	内 区		中 房		厚 み	備 考	出 土 地
			径	高さ	径	高さ			
349	小雲瓦	11.5	1.7	0.2	12	4.0	1.7	同型	SB 23
350	瓦	10.9	1.7	0.2	12	4.0	2.0		SE 13

表14 出土瓦計測表2 (宇瓦)

単位 (cm)

図版番号	分類	上弧幅	弧 径	下弧幅	瓦当幅	内区幅	外区幅 (周縁)		弧 区		瓦当厚	出 土 地
							上	下	左	右		
311	Ia	—	—	—	6.0	4.1	1.1	0.8	2.9	—	0.6	本丸Ⅰ区SA 2表土
312	Ia	—	—	—	—	—	—	1.0	—	4.6	0.4	SB 23
313	Ia	—	—	—	6.1	4.4	1.0	0.7	—	3.2	0.6	本丸Ⅰ区横上瓦敷
314	Ia	—	—	—	5.7	4.1	0.8	0.8	—	—	0.5	本丸Ⅰ区SA 2表土
315	Ia	—	—	—	—	—	—	0.9	—	3.4	0.5	本丸Ⅰ区SA 2表土
316	Ia	—	—	—	—	—	0.9	—	3.2	—	0.5	SB 23
317	Ia	—	—	—	—	—	—	1.0	—	—	0.4	SB 23
318	Ib	25.1	3.8	27.0	6.4	4.8	0.9	0.7	3.6	3.6	0.7	本丸Ⅰ区横上瓦敷
319	Ib	—	—	—	6.2	4.8	0.7	0.7	—	4.9	0.6	本丸Ⅰ区SA 2表土
320	Ib	—	—	—	6.6	4.9	1.0	0.7	—	—	0.5	本丸Ⅰ区横表土
321	Ib	—	—	—	6.5	4.7	0.8	1.0	3.1	—	0.6	本丸Ⅰ区横南側御土内
322	Ib	—	—	—	6.3	4.9	0.6	0.8	2.9	—	0.5	本丸Ⅰ区横上部最終整地層
323	Ib	—	—	—	—	—	—	0.7	—	—	0.5	本丸Ⅰ区横上部最終整地層
324	Ic	—	—	—	4.8	3.6	0.6	0.6	—	—	0.5	SD 8
325	Ic	—	—	—	4.8	3.7	0.6	0.5	4.6	—	0.4	SB 23
326	Ic	—	—	—	4.7	3.6	0.6	0.5	—	4.5	0.4	SB 23
327	Ic	—	—	—	5.0	3.6	0.8	0.6	—	3.0	0.4	本丸Ⅰ区SA 2表土
328	I	—	—	—	—	—	—	0.9	3.5	—	0.4	本丸Ⅰ区横表土
329	I	—	—	—	—	—	—	0.9	—	—	0.4	本丸Ⅰ区横上瓦敷
330	I	—	—	—	3.9	2.2	1.2	0.5	5.8	—	0.5	SB 23
331	I	—	—	—	3.8	2.2	1.0	0.6	5.8	—	0.5	SB 23
332	I	—	—	—	3.9	2.2	1.1	0.6	5.3	—	0.4	SB 23
333	I	—	—	—	3.9	2.1	1.3	0.5	—	4.5	0.5	本丸Ⅰ区SA 2表土
334	I	—	—	—	3.7	2.1	0.9	0.7	—	—	0.5	SB 23
335	I	—	—	—	3.8	2.1	1.0	0.7	—	5.4	0.5	SB 23

瓦類について

安岐城跡出土の瓦類は、膨大な量にのぼるがその殆どが小破片である。男瓦・女瓦が主であり、鍔・宇・道具瓦等の出土量は少ない。

出土地点は、殆どが第3期及びそれ以後の遺構に伴うものであり、それも本丸Ⅰ区櫓周辺に集中している。このことにより櫓は、瓦葺きの建物であったと考えられる。

この瓦葺き建物に葺かれた瓦当は、鍔瓦Ⅰ類と宇瓦Ⅰ類と考えられる。鍔瓦Ⅰ類は、珠文小さく、巴文も頭部から徐々に細くなっている。これに対し鍔瓦Ⅱ類は、珠文大きく、数は少なくなり、巴文頭部は円形になる。そこから細い尾が延びる傾向にある。更に、鍔瓦Ⅱ類には銀化現象がみられる瓦当も存在する。一般的にⅡ類の瓦当形態は、江戸時代初期の様相を示している。

宇瓦については、Ⅰa～Ⅰc類は、界線・中心飾・唐草文の形式変化を比較的たやすく追うことができる。Ⅰa～Ⅰc類を比較すると徐々に瓦当文様が退化し、内区幅・長とも短くなる。その分脇区が広くなり、瓦当の簡略化が進む。瓦当幅・瓦当厚とも小さくなる傾向もみられる。Ⅱ類は、出土地が本丸櫓周辺であるが、出土個体数が少なく、また瓦当文様の蔵手文からみて、Ⅰ類に先行する瓦当と考えられる。このことより、櫓上の建物の瓦当とはやや考えにくい。

Ⅲ類は、その殆どが第3期以後の遺構から出土していること、瓦当文様や外区外縁（周縁）の様相からみて、江戸時代初期の時期の瓦当と考えられる。これらのことより、中世安岐城に葺かれた瓦当は、鍔瓦Ⅰ類、宇瓦Ⅰ類の組み合わせと考える。時期的には、16世紀後半～末の時期があたえられるであろう。

表15 出土瓦計測表3（男瓦）

図版番号	単位 (cm)						出土地
	高さ	胴長	玉縁長	頭幅	尻幅	厚み	
336	8.1	26.4	3.8	15.6	15.8	1.9	SB 23
337	8.0	26.3	4.7	16.0	15.6	2.2	SB 23
338	7.8	26.2	3.9	—	15.9	2.2	SB 23
339	7.4	26.7	4.3	—	15.7	2.1	SB 23
340	7.3	27.0	4.2	—	15.7	2.0	本丸Ⅰ区櫓表土
341	7.7	26.2	—	15.3	—	1.9	SK 13

表16 出土瓦計測表4（女瓦）

図版番号	単位 (cm)						出土地
	長さ	頭幅	尻幅	谷深	厚み		
342	29.7	—	26.0	2.8	1.7		SK 13
343	29.3	—	—	2.8	1.5		SK 13
344	29.2	23.1	—	3.2	1.6		SB 23
345	29.4	—	—	3.2	1.7		SB 23

鍔瓦Ⅱ類と宇瓦Ⅲ類は、安岐城廃城後の整地層上に建てられた屋根に葺かれた瓦当だと思われる。期的には、17世紀前半の時代が考えられる。(友岡)

参考文献

『かわら日本史』	駒井綱之助	1972
『日本の瓦屋根』	坪井利弘	1976
『臼杵石仏群地域遺跡』	臼杵市教育委員会	1982
『中・近世瓦の研究』	元興寺文化財研究所	1982
『元興寺の古瓦』	元興寺文化財研究所	1983
『山城の古瓦』	京都府立山城郷土資料館	1983
『大阪城三の丸跡Ⅱ』	大手門女子学園	1983
『摂津 高槻城』	高槻市教育委員会	1984
『明石城跡Ⅱ』	兵庫県文化教会	1986
『岡城跡・伊丹郷町Ⅰ』	大手前女子学園岡城跡調査委員会	1987

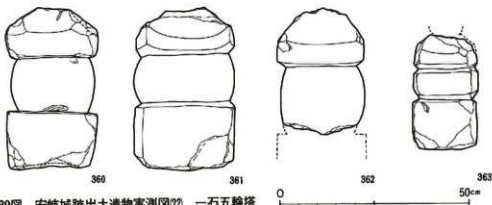
4. 石塔類、石製品

安岐城跡の調査区内からは、五輪塔等の石塔や石臼、手水鉢等の石製品が多数出土している。以下、代表的なものをとりあげて報告していく。

一石五輪塔 (第39図、図版30)

一石五輪塔は合計5点出土しており、全て角閃安山岩を石材として使用している。何れも破損が激しいが、空・風輪(宝珠)部が欠損している点は全てに共通している。360・362は、水輪(塔身)がやや長胴を呈し、火輪(笠)の軒の反りが小さいものである。これに対し、361は水輪が扁平であり、火輪の軒の反りは全体的に緩やかな反りを示している。また水輪の断面形が円形より隅丸方形に近い点でも異なっている。363は一石五輪塔の中でも隅切五輪塔と呼ばれるもので、直方体の石柱より一石五輪塔を作る際に、水輪となる部分の上・下端部に切り込みを入れるだけで、地・火輪と区別し、その水輪の断面形は円形ではなく方形を呈す。この隅切

一石五輪塔

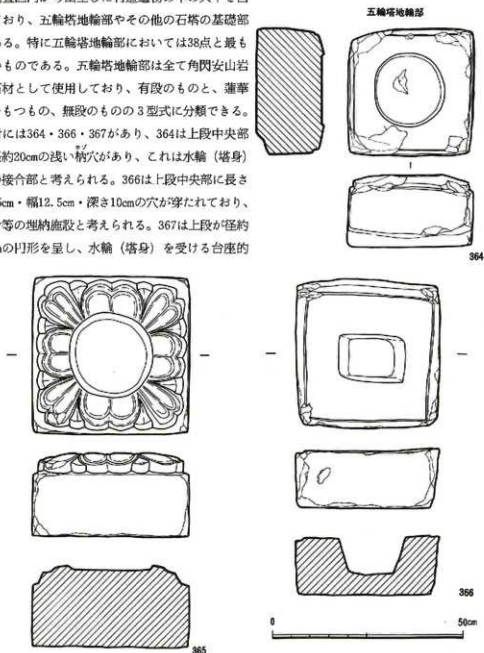


第39図 安岐城跡出土遺物実測図22 一石五輪塔

五輪塔という製作技法は一石五輪塔の中でも特に小型のものによく見られるものである。これらの一石五輪塔において空・風輪部が欠損していることは前述のとおりである。空・風輪部は、その基部が細く構造的にも最も欠損し易い部分ではあるが、出土した一石五輪塔においては火輪上部まで損傷しており、意図的に打ち欠かれたことも考えられる。

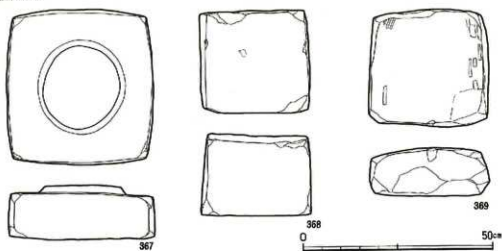
基礎部 (第40・41・42図、図版30・31)

調査区内から出土した石造遺物中の大半を占めており、五輪塔地輪部やその他の石塔の基礎部がある。特に五輪塔地輪部においては38点と最も多いものである。五輪塔地輪部は全て角閃安山岩を石材として使用しており、有段のものと、蓮華座をもつもの、無段のもの3型式に分類できる。前者には364・366・367があり、364は上段中央部に径約20cmの浅い^{ネズミ}柄穴があり、これは水輪(塔身)との接合部と考えられる。366は上段中央部に長さ17.5cm・幅12.5cm・深さ10cmの穴が穿たれており、遺骨等の埋納施設と考えられる。367は上段が径約20cmの円形を呈し、水輪(塔身)を受ける台座の



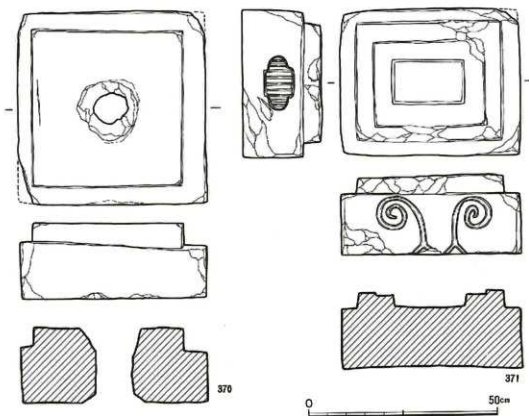
第40図 安岐城跡出土遺物実測図28 五輪塔地輪部

五輪塔地輪部



第41図 安岐城跡出土遺物実測図24 五輪塔地輪部

石塔基礎部



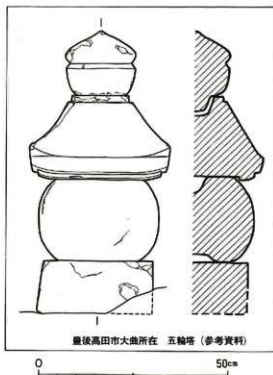
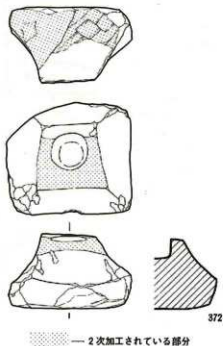
第42図 安岐城跡出土遺物実測図25 石塔基礎部

機能を有するものと考えられる。これら有段の地輪部においては上段部が比較的薄く作られている点で共通している。中者には365があり、蓮弁は複弁8葉で間弁を持つ。この蓮弁はほぼ平面的に表現されており開散式蓮弁の様相を呈している。これは五輪塔の中でも蓮弁装飾を施されたものであり、国東半島とその周辺に多数分布するものである。後者には368・369があり、出土した五輪塔地輪部の大半を占める。これらの中でも368のように高さの高いものは稀である。369は表面の調整が粗く、幅1cm程度の工具痕が多く残っている。370・371は五輪塔以外の石塔の基礎部である。370は有段で平面正方形を呈す。中央部に穴が穿たれており、これはさらにこの下部に一段以上の基壇を有していた可能性が強く、この穴は塔下部の埋納施設へつながるものと考えられる。371は有段であり平面長方形を呈す。下段の長軸側の1面には蕨手文がほぼ左右対称に2個沈刻され、短軸側の両面には格狭間状のものが沈刻されており、この中には縦蓮子が表現されている。これらの装飾は3面にのみ施されており、蕨手文の施されている面が正面と考えることができ、正面観を意図して作られた石塔と考えられる。また上段に施された納穴は長方形を呈し、方柱形の塔身を想定することができる。

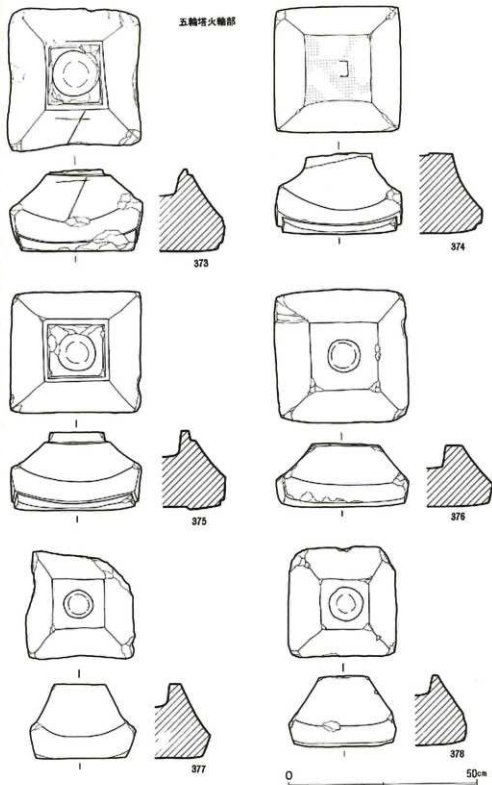
笠部（第43・44・45図、図版31・32）

笠部は合計12点出土しており、国東塔の笠部1点を除き、他は全て五輪塔火輪（笠）部である。石材は全て角閃安山岩を石材として使用している。五輪塔火輪には、下部の垂木状の造り出しと上部の露盤をもつものと、もたないものの2型式に分類することができる。前者には

五輪塔火輪部



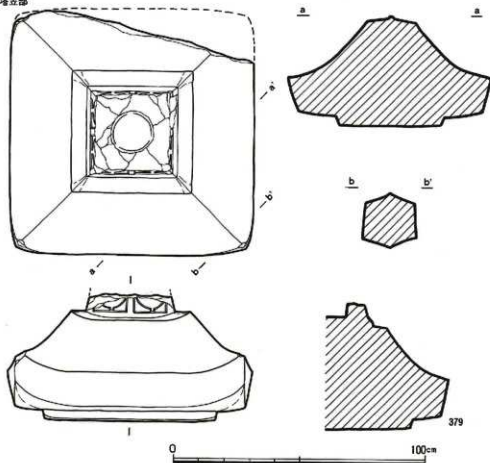
第43図 安岐城跡出土遺物実測図26 五輪塔火輪部



第44図 安岐城跡出土遺物実測図27 五輪塔火輪部

373・374・375がある。373・375は薄い露盤を持ち、軒の反りは全体的に緩やかな弧を描き、軒下の反りは軒上のそれに対してやや緩やかな反りを示すものである。上面には風・空輪（宝珠）を受けるための径約10cm・深さ7.5cm程度の納穴が穿たれている。また373は屋根の1面に沈線が2条交差して刻まれている。374は上部を2次加工されているために露盤の存在は不明であるが納穴の底の部分まで削られていることから考えるとかなり背の高い笠であったと考えられる。後者には372・376・377・378がある。372は上部と屋根の一部に2次加工が施されている。上部の2次加工は磨られている状況を呈し、屋根の一部には磨りと幅5cm程度のノミ状工具による削りの2種類の2次加工がされている。笠の形態としては、上部に円形の納穴が穿たれ、軒の反りは直線部分を有さず緩やかな反りを示すものである。376は、笠上部に円形の納穴が穿たれ、緩やかな反りを示す軒を持つ等372と共通する特徴を多く有するが、372に比べ高さがなくやや扁平な様相を示している。378は2次加工が施されていない点を除き、372と共通する特徴を示すものである。377は他と異なり軒口が厚く、軒の反りも急である。又軒下は笠下部とラインを共有するために中央部は直線と両端でのみ反りを示す。これらの笠は、屋根の反りが小さ

国東塔笠部



第45図 安岐城跡出土遺物実測図(20) 国東塔笠部

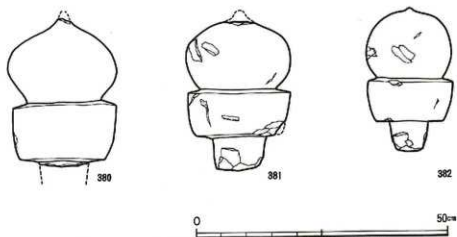
い点で共通している。付図は文明11年(1479)銘を持つ五輪塔であるが、安岐城跡から出土した各種五輪塔残欠と類似する特徴や法量を示すのである。これを基に復元すると出土した五輪塔残欠は総高75cm程度の中型五輪塔としてはほぼ標準的な大きさのものと考えることができる。

379は、調査区の東土塁南端の内期と接する部分の疎群より出土した。幅約1mとかなり大型のものであり、格狭間が刻まれた露盤を有す点等とも併せ考えると、国東塔の笠部と考えられる。この笠は軒が直線部分を多く有し、両端で急に反りを示す。屋根は軒に近付くにしたがって反りが急になっており、笠の下部には垂木状の造り出しを持つ。この垂木は軒先よりやや遠い部分で止まっているために反りをほとんど示さない。笠上部は緩やかな弧を描いており、通常が直線的であるのとは異なった特徴を示す。露盤は上部を打ち欠かれているが、4面に格狭間が沈刻されている。また裏面と上部の露盤と接する部分に緩やかな稜が対角線状に施されている点も特異である。露盤上面には相輪を受けるための径15cm程の枿穴が穿たれている。この笠の法量より国東塔を復元した場合、総高約4mとかなり大型の国東塔であったものと考えることができる。

宝珠部(第46図、図版32)

遺跡より出土した宝珠は合計9点存在しており、五輪塔風・空輪と考えられる。この宝珠には石材として角閃安山岩と溶結凝灰岩の二種類が使用されている。380は角閃安山岩を石材として使用しており、この角閃安山岩製の宝珠は2点のみである。表面の調整は雑であり歪みがある。枿は基部で欠損している。空輪部は桃型を呈し、頂部の突起は先端が欠損しているが顕著ではない。381・382は溶結凝灰岩を石材として使用している。共に風・空輪部の境等が明瞭に表現されており、表面の調整も丁寧である。空輪はやや丸みを帯びた桃型を呈し上部に小さな突起を有する。下部には火輪(笠)と組み合わせるための枿を有している。安岐城跡出土の石造遺物の中で、溶結凝灰岩を石材として使用しているのはこの宝珠部のみである。

五輪塔風・空輪部



第46図 安岐城跡出土遺物実測図(29) 五輪塔風・空輪部

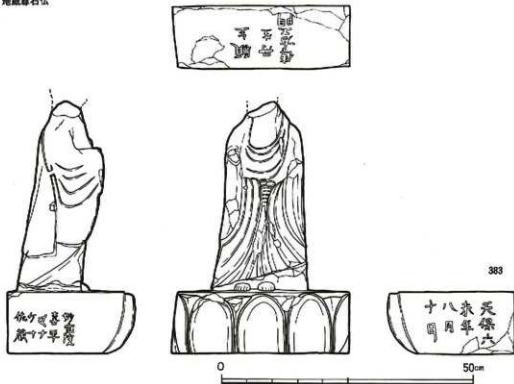
地藏尊石仏 (第47図、図版32)

383は、角閃安山岩を石材として使用している。頭部や両手を欠損しているために持物や印相の判定は困難である。この石仏は台座と主尊たる地藏菩薩が1石で作られており、この下にさらに一段以上の基壇を有していたものと考えられる。台座は正面に単弁5葉の間弁をもつ蓮弁を配し、両端の2葉は半分しか表現されておらず、背面や側面には蓮弁は刻まれていない。地藏尊本体においても背面の着衣の表現が表面程細かくなく、これらよりこの石仏が正面観を重視して作られたことを伺わせるものである。また、地藏尊本体は方柱を基に彫刻されたものであるが下半身付近は断面形がほぼ方形を呈し、方柱に着衣等を表現するといった手法による。この383の台座の背面と両側面には紀年銘を含む金石文が刻まれており、この石仏が天保六年(1835)に造立されたことがわかる。金石文の内容は以下のとおりである。

佐 藏	□ □	マ ナ	喜 平	妙 宝 院	(左側面)	傳 右 エ 門	丹 生	願 主	(背面)	十 日	八 月	未 年	天 保 六	(右側面)
--------	--------	--------	--------	-------------	-------	------------------	--------	--------	------	--------	--------	--------	-------------	-------

この金石文によると、丹生の傳右エ門という人物が願主となりこの石仏を天保六年に造立した

地藏尊石仏



第47図 安岐城跡出土遺物実測図30 地藏尊石仏

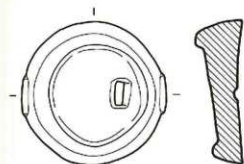
ものであり、左側面に記されている数名の人物はこの石仏を造立するにあたっての出資者か、講衆であることが考えられる。また地藏尊を祀っている点等より、この石仏は供養塔として造立されたものと考えられる。

石臼 (第48図、図版33)

石臼は合計18点出土しており、角閃安山岩を石材として使用している。これら出土した石臼は大半が径40cm程度のものであるが小型の茶臼も1点存在している。また全て上臼であり下臼の出土はみられない。384は茶臼の上臼であり、径22cm、高さ15cmを測る。上面は周縁が1段高くなっており、中央部には供給口が貫通している。側面には挽手穴が2ヶ所



384



385



386

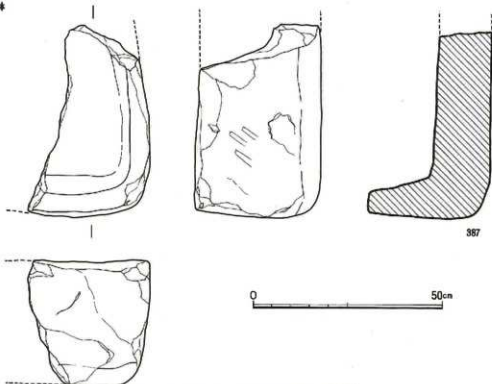


第48図 安岐城跡出土遺物実測図31 石臼

対称な位置に設けられており、この挽手穴の周辺には方形の装飾が認められる。裏面は平坦で、供給口を中心に6本の主溝を放射状に刻んだ六分画の目のパターンを示す。この主溝から4～6本の副溝が右上りに刻まれている。385・386は粉挽臼の上臼と考えられる。385は径37cm、最大高11.3cm、最小高8cmを測り、やや傾斜している。上面は周縁が1段高くなっており、中央より外寄りに長方形の供給口が貫通している。裏面は凹んでおり、中央部に下臼の心棒受けの小穴が穿たれており、六分画パターンの目が刻まれている。また側面には、心棒受けの小穴と供給口を通る軸線上の2ヶ所に長方形の挽手穴が設けられており、この挽手穴の周囲は1段高くなっている。供給口に近いほうの挽手穴は、裏面とつながっている形で掘り込まれており、手かけ穴の機能も有していた可能性も伺わせるものである。386は、径36.5cm、高さ12cmを測り全体の $\frac{1}{2}$ を欠損している。上面は周縁がやや高くなり、中央よりやや外寄りに円形の供給口が貫通している。裏面は凹んでおり、385と同様に中央部に心棒受けの小穴が穿たれ、六分画パターンの目が刻まれている。裏面の供給口より幅2cm程度の浅い溝が左回りに刻まれている点は385と異なる。側面には、心棒受けの小穴と供給口を通る軸線上の2ヶ所に挽手穴が穿たれているが、385とは異なり供給口に近いほうの挽手穴は裏面とはつながっていない。これら384・385・386は裏面の刻目のパターンより左回しの石臼であると考えられるが、他の石臼についても同様の特徴を示す。

手水鉢 (第49図、図版33)

手水鉢



第49図 安岐城跡出土遺物実測図32 手水鉢

387は現在長50cm、現存幅32cm、高さ33cmを割り、角閃安山岩を石材として使用している。破損が激しく、全体の約4以下が残存しているものと考えられる。平面形はやや胴張りの方形を呈するものと考えられ、深さ16cmの平面形に沿った胴張り方形の掘り込みがされている。側面や裏面、掘り込みの内側等の表面調整は粗雑であり、部分的に幅1.5cm程度の工具痕もみられる。

石塔類・石製品について

以上が安岐城跡より出土した石造遺物の概要である。これらの石造遺物の時期については、五輪塔地輪部においては蓮弁装飾がみられたり有段のものが存在する。同笠部においては軒が比較的薄く、反りも緩やかであり、屋根の反りも緩やかである。また露盤や垂木状の造り出しを有す例も存在している。宝珠部においては頂点の突起が小さい等、各部位において中世の特徴を多く示すものである。付図で示した五輪塔は15世紀代の紀年銘をもつものであるが、安岐城跡出土の石塔は、これと類似する形態を示すものが多い。特に五輪塔残欠においては、時期の判断材料となり得る部位も多く出土しており、これらより14世紀後半から16世紀代までの幅を考えることができる。また園東塔の笠部についても軒に直線部分を多く有し、両端付近に急に反る点等比較的古い特徴を示しており、14世紀中頃の建造と考えることができる。天保6年(1835) 銘を有す地藏尊石仏については、この時期は安岐城は廃絶しており、安岐城の廃絶後当地に造立されたものと考えられる。

以上のように安岐城跡からは多量の石塔の残欠が出土しているが、五輪塔の場合の水輪部にあたる塔身部は一点もみられず、これらより五輪塔等の石塔を組み合わせることは不可能である。これにより、これらの石塔類残欠は解体された後必要な部分のみ当地に持ち込まれたものと考えられる。これらの出土が土塁の周辺に集中している点より、この土塁に施された石垣や石組みの石材として転用されていたものと考えられる。安岐城の石垣や石組みには川原石等が多量に使用されているがコーナーの部分等の表面が平坦な石材が必要な部分に使用されていたと考えられ、2次加工の痕跡を有す例はこの組み合わせの際に行われたものと考えられる。このような石垣や石組みに石塔類が転用されるのは、奈良県の大和郡山城等にもみられる。安岐城の石垣や石組みにおいては、大規模な石材の切り出しが行われた様子はみられず、短期間にこの石垣や石組みを構築したか、動員された石工が少数であったか等何らかの理由により既に平面加工された石塔の部品を多量に転用したのと考えられる。また安岐城跡からは多くの石臼が出土している。かねてより中世城跡からの石臼の大量出土は問題とされているが、城内の武士の食糧のためにも相当数の石臼は必要であると考えられる。それに加えて銃砲等に使用する火薬を製作するためにも使用された可能性も考えられているが、石臼に火薬等の付着も認められなかったため、その正確な用途を確定するまでは至らなかった。(桑原)

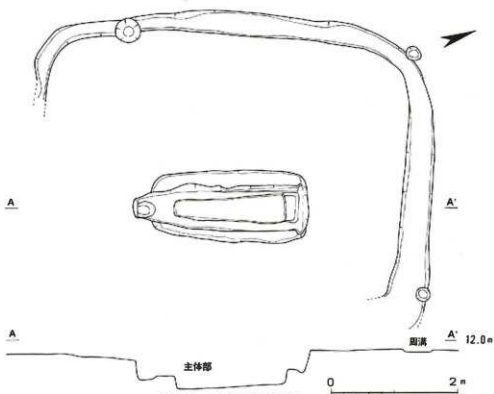
Ⅳ 方形周溝墓・下原古墳の調査

1. 方形周溝墓 (第50・51図 図版13)

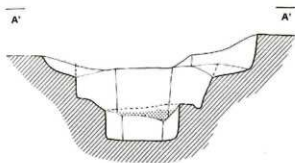
後世の削平により著しく損われており、周溝は北・西辺を残すのみであった。規模は西辺外径6m、内径5.6m、北辺外径4.3m、内径3.8mであった。平面形は隅丸の長方形を呈していた。長軸方位は北21度50分東であった。主体部は東辺寄に構築されており、主軸は周溝の長軸方位とほぼ同一方向であった。主体部は土壇であり、2基が重複して検出された。当初構築された土壇は2段掘りで長軸方向2.55m、幅0.95mの長方形を呈していた。新段階の土壇は、北木口が前段階の土壇とほぼ重なっていた。南辺部ではこれを切って外へ細く延びていた。この土壇は前段階の土壇と同一の長軸方向をもち、規模は長さ2.7mと長く、幅は狭いものであった。北木口と西側板部の1部に小溝が掘り込まれており部分的に木口板・側板を配する構造が考えられる。2基の土壇は、形態と構築方法の観察より、新段階の土壇が前段階土壇の下段を埋めたのちに上段の構造を踏襲しつつ拡大したものと確認でき、極めて近接した時期の構築と考えられる。主体部の重複する土壇の有り方は、追葬という点も一応想起されるが、ここでは主体部構築時の改造と理解しておきたい。出土遺物は全く検出されていない。

2. 下原古墳 (第52～54図 表17 図版14・15・34)

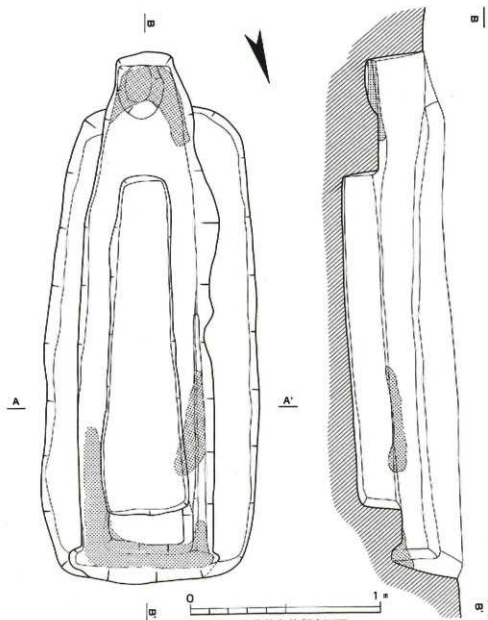
安岐城の3期に構築された隅溝の下部に確認されたものであり、第2期以前に削平されたと



第50図 方形周溝墓実測図



基準標高値：12.0m

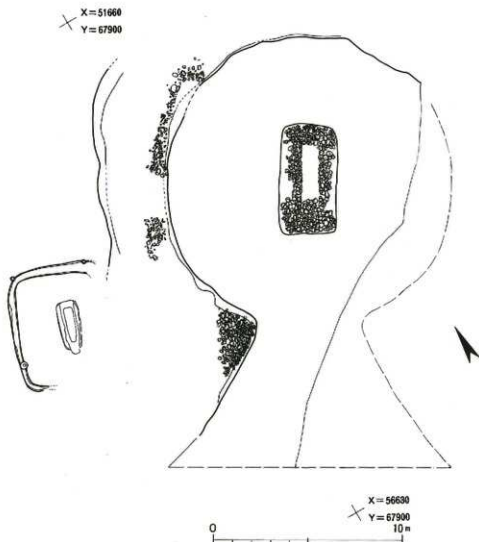


第51図 方形周溝墓主体部実測図

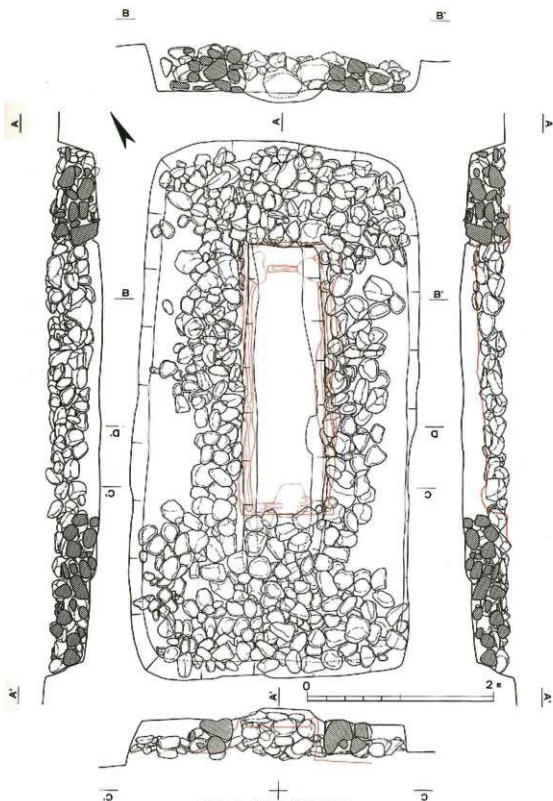
考えられる。従って、墳丘と周溝の大半を欠いており、後円部墳裾、西くびれ部と前方部の一部及び石室の下半分を残す状態であった。

古墳は墳丘の形状より前方後円墳と考えられる。墳丘の構築方法には削平によって不明であるが、周溝内の小礫の堆積より葎石の存在が考えられる。又、盛土は地山に石室が構築されていることにより低位に留まったものと想定される。墳丘の規模は後円部墳径15mであり、前方部前面を欠失するため全長は不明ながら25m未満の小規模なものと思われる。主軸方位は北31度東を指向しており、海に向かって墳形の全景を呈する形をとっている。

周溝は後世の削平と溝によって一部分を残すのみであるが後円部西側に確認できる周溝は幅が残存する後円部上端より約5m底面幅3.5mであった。(小林)



第52図 古墳及び方形周溝墓平面図



第53図 古墳主体部実測図

石室は竪穴式石室で後円部の中央に古墳の復元方位と同一方位を指向して構築されていた。石室確認時の状況は地山に下半部が残存するものであった。石室の掘形は5.72m×3.0mの長方形プランを有し、深さは確認面より0.62mであった。底面の状態は主体部の位置において約10cm程緩い傾斜で掘り込まれていたが周辺は平坦面をなしていた。

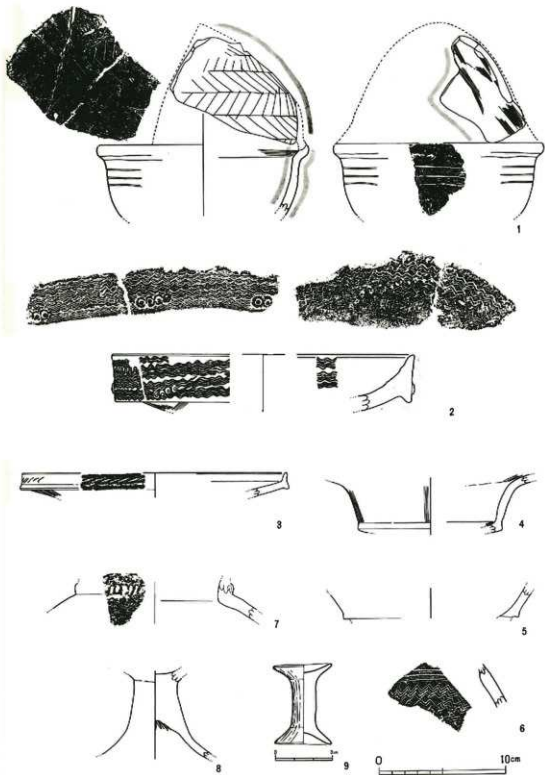
石室の構築には円礫が使用されていた。円礫は長径10～45cm、短径5～25cmの大きさを持ち、抜かれた部分もあるが当初は掘形全体に充填されていたと思われる。構築方法には一定の規則性が窺われ、石室内部に面する前列の2～3列には20×30cm以上の河原石が丁寧に積み上げられていた。その外側はやや粗雑な構築となっていた。石室は規模が2.9m×1.05mで長細い形状を呈していた。

主体部は、木口板と側板の痕跡より木棺と確認出来た。木棺の規模は内径で2.4m×0.75mであった。木棺の形態はその痕跡より木口板を側板で挟んだ「口」形を呈するものと思われる。木棺の下部については石室の掘形掘削時にあらかじめ掘られており、その後根石基底面の高さまでロームブロック混入黒褐色土を補填し、整えたものと観察できた。

出土遺物としては、主体部覆土中より手鋳形土器、器台、二重口縁壺、壺、ミニチュア土器が検出された。この他に壺、甕類の細片が多く出土したが実測可能なものは図示した9点である。1の手鋳形土器は鉢部、蔽部共に破片であり、図示した器形は復元によるものである。鉢部は丸味を帯びる体部で丸底を呈すものと思われる。体部は上端に3条の沈線をもつ。口縁部はやや外反し蔽部との境で受部状をなしている。蔽部は外面に横方向の有軸絞杉文が施されている。鉢部、蔽部共に内外面に丹塗が施されている。二重口縁壺は4・5・7の5点を図示できた。2は二重口縁壺の可能性もあるが器台としたものである。口縁部外面には、楷書波状文が施され、4個1単位とする円形浮文が貼付されている。口縁部は拡張部が直立気味に立ち上がるが内湾して頸部へと移行する形態を呈す。内外面に丹塗の痕跡が認められる。3・6は壺の破片である。3は口縁部外面に櫛状工具による刺突文を有し丹塗が認められる。6は肩部付近の破片で外面に櫛描きの平行線・波状文が施されている。8は高杯の脚部破片である。9は高さ3.4cmの器台形を呈示するミニチュア土器である。(小林)

表17 下原古墳出土遺物観察表

図面 番号	器 種	径長 (cm)		備 考	胎 土	色 調	出土地点	備 考
		口径	底径					
1	手鋳形 土 器	(16.8)	—	赤褐色の陶質で、口縁部は外反し、内面は外反し、外側へは調整されている。	石英・白色粒子を含む 凝縮	内面外面暗黄褐色	古墳内溝内	赤褐色の陶質で、口縁部は外反し、内面は外反し、外側へは調整されている。
2	二重口 縁壺	(20.7)	—	内面側で、外側へは調整されている。	大量の石英粒を含む やや粗	内面外面・暗褐色 一部わずかに赤褐色に染まる	主体部覆土内	口縁部外面に波状文・4条位の 口縁部外面に波状文・4条位の 口縁部外面に波状文・4条位の
3	壺	(21.0)	—	内面側で、外側へは調整されている。	金堂用数量、石英粒 含む	暗黄褐色	主体部覆土中	口縁部外面に波状文による 刺突文
4	二重口 縁壺	—	—	内面へは調整後一部調整 外側へは調整一部調整	大量の石英粒を含む	暗黄褐色	古墳内溝内	
5	二重口 縁壺	—	—	内面側で、外側へは調整されている。	大量の石英粒を含む やや粗	暗黄褐色	古墳内溝内	
6	壺	—	—	内面側で、外側へは調整されている。	大量の石英粒を含む やや粗	暗黄褐色	古墳内溝内	櫛描き平行線及び櫛描波 状文
7	二重口 縁壺	—	—	内面側で、外側へは調整されている。	多量 やや粗	内・外面暗黄褐色	古墳内溝内	櫛描波状文・目三角突文 高みは櫛状工具
8	高 杯	—	—	内面側で、外側へは調整されている。	大量の石英粒・白色粒 子を含む	内・外面暗褐色	主体部覆土中	柱状脚部
9	器台?	—	—	外側側で、及び調整されている。	大量の石英粒を含む やや粗	内・外面暗褐色	古墳内溝内	



第54図 下原古墳出土遺物実測図

V ま と め

1. 居館・城郭について—考古学的所見から—

a 安岐城跡についての従来の見解

今まで安岐城跡について、どのような見解があるのでしょうか。大正12年、大分県『史蹟名勝天然記念物調査報告』によると、「今から700年余り前、田原泰廣（大友能直の12子）の築城後、田原氏累代の居城となった。その後田原親貫のとき、大友氏に對し挙兵するが落城し田原氏は滅亡する。文禄2年大友義統除國後は、豊臣秀吉の家臣熊谷直陳が入封し、熊谷氏の居城となるが、関ヶ原の戦いで西軍につき、城は黒田如水の率いる軍により落城した。」¹⁾とある。泰廣築城については「軍記略」²⁾・「豊後国志」³⁾・「豊陽志」⁴⁾にみえることから、このような見解となったのであろう。昭和42年に刊行された『安岐町史』では①6代田原親貞が応永2年(1395)に上洛するにあたって、所領についての置文があり、「安岐の大方殿や……預け置く」とあることから、この頃親貞とその母が住む京泊(港)の館があった。②大友11代親著が応永12年(1405)木付親直に對し、安岐郷を田原鶴松丸(親幸の幼名)に返却せよとあることから、安岐郷の返却後(15世紀前半頃)7代親幸が築城した。③そして、親幸の築いた城は本丸の部分に京泊の館を拡大し築いた。④二の丸・三の丸については永禄3年(1594)熊谷直陳が安岐城主となった時に増築した、と述べている。以上は文献資料から導き出された見解である。これ以後の安岐城跡について、表現こそ違うがここでみた内容に要約できる。

すなわち、応永2年頃にはすでにあった居館は15世紀前半頃に拡大され、防衛機能をもつ城となったが、それは本丸部分のみであった。そして、文禄3年熊谷氏入封後二の丸・三の丸を増築した、と言うことになる。

b 出土遺物からみた遺構の年代

遺構・遺物の章で述べたように、遺構は大きく3期に分かれる。まず3期であるが、出土した遺物は少量であるが瀬戸・美濃系の天目碗・備前擂鉢等の特徴から16世紀末～17世紀初頭とすることはまちがいないところである。問題は第1・2期である。第1期遺構から出土した輸入陶磁器は、15世紀後半～17世紀初頭までのものを含んでいる。量的にみれば16世紀後半を中心とするものが圧倒的に多く、次に15世紀後半～16世紀中頃、そして16世紀末～17世紀初頭が1点(青花皿No57)出土している。16世紀末～17世紀初頭の青花皿については、流れ込みと考えたいが第Ⅰ次整地層下のSD1より出土していることから無視できず、3期の廃絶時期が17世紀初頭であることから、これは16世紀末に出現すると考えればよく、第1期の下限を知る資料となる。次に15世紀後半～16世紀中頃の蓮子碗を中心とする青花、綾花青磁皿などの一群である。しかし、土師質土器杯・皿などは16世紀後半を中心とするものばかりであり、これら輸入陶磁器とセットをなす遺物はみあたらない。これは単にこの時期の土師質土器が出土していないと考えられるがやはり釈然としない。また2期についても1期と同じ遺物群で構成されており、現時点での編年では明確に細分できない程度の近隣の年代が考えられる。

以上、考古学的年代からみると、今回の調査で検出された居館は、従来の見解でみた応永（14～15世紀）頃に京泊の館を拡大して築いたとする考え方は成立せず、またこの地における京泊の館そのものの存在についても否定的である。ただ、SD1から13世紀後半の瓦器碗が1点出土しており、鎌倉時代後半ころの遺構の存在やその性格について気になるところである。

さて、出土遺物の考古学的手法では、15世紀後半～16世紀末の約100年間の間でおおきく2期の遺構変遷があったとすることも可能な状況であるので、次に文献資料や歴史的背景のなかで、第1・2期の居館成立の年代をもう少し詰められないか探してみたい。

まず第1案として考えられることは、田原氏は、国東飯塚城を本家とし、屋山の吉弘氏、武蔵田原氏を分家として多くの支城と在地領主をも取り込み国東半島最大の国人であり、また大友同族衆としての強大な勢力を背景にして半島の各浦に拠点をもつ浦部衆をも率いていたと考えられている。この田原氏は15世紀頃から、しだいに反大友の動きをたびたびみせるようになり、周防大内氏との関係を深めていった。文亀元年（1501）大友親治らに大内義興追討の論旨が与えられると、大内側では田原親述を挙兵させ、これを海上から支援するため守江（杵築市）沖まで侵入している⁶⁾。このような背景のなかで、国東半島の田原支配領の防備体制強化のため、南の要的位置にある安岐浦に居館を築き港湾を整備した。それは考古学的年代の上限である15世紀後半ごろである。第2案としては、大友二階崩れの変（天文19年・1550）後、大友義鎮（宗麟）の治世になり、周防に亡命中の田原親宏の帰国が赦され、安岐・国東郷の政所職を与えられたことにより、安岐郷の開発拠点として居館を築いた。第1期居館の成立については以上の2案が考えられるが、第1案については検出された居館があまり防禦を意識した構えとは考えられず、また考古学的にも輸入陶磁器のみが遊離するかたちになることから、第2案すなわち、15世紀後半～16世紀中頃までの幅をもつ輸入陶磁器については、むしろ16世紀中頃の時期をとり、新たに出現する後半の時期のものとわずかに重複すると位置づけ、16世紀中頃を第1期居館の成立としたい。第2期居館については、天正6年（1578）に大友氏が日向高城において島津軍に敗れ、大友支配がゆらぎ始めたころの16世紀第四半期前半を想定したい。それは、田原親宏から親貴に移り、大友氏に対し反旗する直前であり、土塁・溝（薬研堀りに近いV字溝）などの防備強化をねらって改作された居館として第2期を位置づけたい。約9ヶ月におよぶ大友軍と田原軍との戦いのなかで、大友軍が攻めた安岐城はこの第2期居館であった。

さて、このような歴史的背景のなかで居館の成立が想定されるが、検出された居館の性格について若干ふれておく。最近、田原一族である吉弘氏の詰城屋山城跡が調査された⁷⁾。報告によると室町期の特徴である集落の中心に根子屋の居館を置き、その近くの山上に戦時の詰城がセットになることが想定されており、安岐浦に成立した居館も根子屋の性格をもち、詰城としての山城をもっていたと考えられる。その詰城の位置については、安岐町馬場の東方寺山頂を想定する考えもあるが今後の課題である。

c 黒田如水の攻めた安岐城

田原氏段階の居館は、田原氏滅亡後は、大友氏の管轄下に置かれ、大友氏領国の防備体系の

なかに組み込まれていた。しかし、文禄2年(1593)に、大友義統が文禄の役での失態で豊後から除国されると、この地は豊臣秀吉の家臣熊谷(直陳)氏に与えられる。熊谷氏入封(文禄3年・1594)後を第3期の遺構とすることは、先にみたとおりである。しかし、この城は従来の見解でみたような二の丸・三の丸の増築といった程度のもではなく、旧遺構を全面的に改変し、新たな設計プランのもとで築かれた平城として位置づけられる。『黒田家譜』によれば「この城の形、南北に長くして、東は海なり。東北は石壁高く、屏風を立てるがごとし。西の方は山近し。城と西の山との間は平地にて、堀りをほり南の方を大手とす。土橋あり。又乾(北西)の方にも土橋あり、平城なれども要害堅固の所なり。」とあり、安岐城が最も防備を整えた最終段階の状況を知る唯一の資料である。

それでは、熊谷氏の築いた城とはどのような構造であったのであろうか。述べるにあたり、大正13年に報告された安岐城跡縮図と62年後に新たに測量した安岐城跡復原想定図(遺構の消滅した部分等は、明治22年の地籍図・大正13年安岐城縮図を参考にした。)との比較をまじえながらおこなっていく。

縄張りとは、川口に近い断崖を背にした下原台地の東端部に主郭を設け、西方向に向って堀と土塁を巡らす3つの郭により主郭部を防禦する構造となっており、いわゆる主郭部を片隅に寄せ奥深く防禦する梯郭式の平城である。また主郭部の北側には船の出入りできる船入を設け、さらに北面を堀と土塁で巡らす海城的機能もかねそなえている。平坦な台地を堀で切断し、自然地形をたくみに利用した城の総面積は約130,000m²の規模である。

主郭部は、約方1町の規模をもち、今回の調査により、新たに主郭部をさらに細かく区画する堀が検出された。現存する堀や土塁跡から復原すると4つの小郭からなるものと考えられる。調査はこのうち東側の2郭の一部分の状況を知ることができた。南東小郭は奥郭を遮蔽する芭風の柱穴列が数多く検出されたが、建物跡はなく広場の空間を形成するものであった。北東小郭は、主郭部と想定される北西小郭と並列する郭であることから、建物跡の状況が目立ったが、調査区が東端部であったためか2棟の掘立柱建物跡と隅櫓台及び、礎石建物跡の検出のみであった。

隅櫓跡は、調査した北東部と、南西隅に現在確認できるが、大正13年の図では、北西・南東方向にも記されている。SB20が基壇上に建てられた礎石建物であり、この位置がききに触れた南東方向の隅櫓跡と考えれば矛盾はない。とすれば北西部には、その痕跡を留めていないが、主郭を囲む土塁の四隅には、隅櫓台があったものと考えられる。また主郭を囲む西土塁中央部に方形の高まりがある。現在は神社があるが、この高まりが気になるところである。神社建立の際に基壇を高くしたとも考えられるが、字名が天守とあることなどから、これを天守台跡とみることも可能である。主郭を囲む堀は、いわゆる内堀と考えられ、幅約12~15m程である。また「石壁高く、屏風を立てるがごとし」と記された土塁は、実際は土塁基部に石積みを持ち、表面に栗石を葺いたものであり、西面土塁は高さ約5m、上幅7~10m、下幅12~15mの規模である。

主郭西方の施設については、北側の山林部分に比較的良好な遺構の残存がみられ、西～南側は宅地化が進み、遺構の痕跡を追うことは難しいが、土塁と堀で区画される3つの郭が復原できる。主郭から西へ第二郭・第三郭・第四郭と仮称しておく。第二郭は、字小丸・内堀を言う。北面において、堀と土塁の一部が残存し、主郭を囲む堀（内堀）と接する東隅に両袖樹形の遺構があり、ここを北の出入口と想定できる。第三郭は最も広く、字長若寺・門口町・ホキを含む。北西部に2条の堀と土塁、西面北隅に隅櫓台跡がある。この北隅櫓台と対置すると思われる遺構はすでにないが、大正13年段階では残存していたのであろう。第四郭は帯郭的であり、字西出口・南北を含む。西面から南門にかけて人工の堀をめぐるし、北はしだいに傾斜し、字北堀と称する自然谷に接する。この堀は城郭域を画する外堀でもある。

さて大正13年の縮図によると、城の大手門を第三郭西面中央に想定している。しかし、黒田家譜によれば、「堀をほり南の方を大手とす。上橋あり。又乾の方にも土橋あり。」とあることからみれば、さきに想定された大手は、又乾（北西）方向であり、大手とはならない。むしろ、字西出口とあるように、土橋をもつ西口と考えられる。従って大手口は堀（外堀）の南の方、すなわち現代南側から下原台地に登り、字ホキ・内堀そして本丸に向う道路の導線を主郭に向う道と想定し、その登り口附近を大手口として考えておきたい。また崩手（東口）は、字裏門と称す登り口あたりとすることができる。

以上のように、熊谷氏の築いた安岐城跡は、主郭を川口の急崖を背にして片隅に寄せ、それを四重の堀と土塁で囲み、奥深く防禦する後ろ堅固の梯郭式の縄張りを持ち、主郭内における隅櫓や天守台、第二郭北虎口の両袖樹形、第三郭隅櫓、土塁の要所々々の石垣状の石積みなどの特徴からみて、中世期にみる根子屋的居館や山城のあり様とは一線を画し、近世平城の特徴をもつ城と考えられる。しかし、いわゆる堀と一体化した石垣をもつ近世城の段階ではなく、県内における永祿～慶長期の平城の縄張りを知る好例と言えるであろう。

安岐城の土塁・堀の特徴をもつ城跡に、近世杵築城前段階の城と考えられる城郭遺構がある。杵築市北台に一部残る土塁と堀跡が昭和60年に調査された。土塁の上端面の幅は約2m、堀底から土塁頂部までの高さは約5.6m、堀底幅約9.5mの規模をもち、安岐城主郭部の土塁・堀と比較するとやや小規模であるが、基部に石積みをして、土塁表面に栗石を敷く状況は、安岐城と全く同じ技法であり注目される。年代は16世紀後半～17世紀初頭であり、豊臣家家臣前田玄以入封以後、築かれたと考えられる。これも熊谷氏同様、東国出身者の手によるものと考えられる。

現代みることのできる近世杵築城は、正保2年（1645）松平氏入封以後本格的に整備されたものと考えられるが、寛政年間（1786～1801）の『杵築城絵図』¹⁰⁾には実に興味深いことが描かれている。現代待屋敷などがある北台をみると、屋敷跡とそれを結ぶ道とが整合しない堀で囲まれた3つの方形区画が描かれている。それが近世の城絵図に地形の表現として描かれたものと考えられる。調査位置はこの絵図にみられる北東郭の北東隅であることがわかる。すなわち近世杵築城は、旧遺構上に新たに築城されたことになる。

このように大分県内における近世城は、大友氏除国後、入封した大名により築城を開始される例が多いのであるが、現代にみる城は、いわゆる堀と石垣を一体化させた縄張りの城郭であり、初期の状況を知る史・資料はほとんどない。安岐城は慶長5年(1600)落城後破却され、以後杵築藩領となったため、往時の姿をそのままとめており、また、戦時下における臨時的な城郭ではなく、新たに入封した大名の領国支配の拠点として、本格的に築いた城郭である。このことから、県内における近世初期頃の本来の姿をとどめる城郭遺構として、その歴史的価値は高いものと言えるであろう。(玉永)

註1)『史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯 大正12年

2)『国東半島史合本編』昭和10年より

3)『続編年大友史料』5

4)註3に同じ

5)『日本城郭大系』16 大分・宮崎・愛媛 新人物往来社 昭和55年などがある。

6)『大分県史』中世篇Ⅱ 昭和60年

7)『豊後国都甲荘』1 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 昭和63年

8)『安岐町史』安岐町 昭和42年

9)昭和60年杵築市教育委員調査、教育委員会の御教授による。

10)註5と同じ

なお、安岐城跡、復原想定図作製にあたり、大分市歴史資料館長・佐藤興治氏の御指導をいただいた。

2. 下原古墳について

古墳の調査では、墳丘の著しい削平にもかかわらず、一定の成果を上げることができた。確認された古墳の内容は、次のようになる。

(1)墳形は前方部の大半を欠失するが、くびれ部の存在より「前方後円形」を呈する。

(2)規模は円丘径15m、復元全長23m程と小型である。

(3)外表施設は周溝と葺石が想定される。

(4)石室構造は地山に掘り込まれた竪穴式石室である。

(5)主体部は組合せ式の木棺が想定される。

(6)構築時期は主体部覆土、周溝内出土の土器より庄内(新)頃に想定される。

(7)出土遺物は、手焙形土器、器台、高坏、二重口縁蓋、ミニチュア土器があり、外来的器種と器形が認められる。

(8)鏡、玉類、武器などの副葬品がない。

(9)下原古墳は(1)、(3)、(4)のように所謂「定型化した古墳」¹⁾としての内容を多く有している一方、(2)や石室を地山に掘り込んでいる点、副葬品が殆どないなど定型化以前の古墳の様相もみられる。現在、大分県では豊前の宇佐市赤塚古墳、川部高森方形周溝墓群が下原古墳と近似する時期の所産とされているがやや後出の様相をもつと考えられている。宇佐市では赤塚古墳出

現以降連続する古墳の展開がみられる。しかし現在県内の他地域において安岐町下原古墳以外ではこの種の墳丘墓はみられない。周辺地域での該期墳丘墓をみると、佐賀県では鳥栖市赤坂古墳²⁾が前方部8m、全長24mの前方後方形である。主体部は不明である。唐津市双水柴山古墳³⁾2号墳では、2段築成、全長41m以上、割竹形木棺を主体部にもつ。ここでは首長墓としての厚葬化に伴う施設の充実が計られているが、定型化した前方後円墳は金立鏡子塚にみられるような布留2以降となっている。

福岡県では福岡市那珂八幡古墳⁴⁾が後円径48m～50mを有する撚形の前方部をもつ前方後円墳として知られている。墳丘は段築成であり、主体部は竪穴式石室ではなく割竹形木棺をもち、副葬品に三角縁五神四獣鏡が副葬されていた。九州では、最も早い時期に「定型化」が進んだ段階の所産と云える。一方、福岡県北部の小郡市津古生掛は全長33m、後円部径24mの前方後円状を呈す。内部主体は、組合せ木棺の直葬、出土遺物に方格規矩鳥文鏡をもつ。石室をもたないが「定型化」の進んだ例と云える。

再び下原古墳をみると、(1)、(3)、(4)のように「定型化」の条件を満たしている部分もあるが、一方、(2)、(8)や石室を地山に掘り込んでいた点は典型的な前方後円墳ではあまりみられない。主体部は、竪穴式石室を有しており、この時期に九州では殆どみられない。

従って、下原古墳は「定型化した古墳」としての属性を多くもち、現在九州で知られている竪穴式石室の採用例としては最も古い時期に属するものと思われる。

下原古墳は至近の位置にほぼ同時期と思われる方形周溝墓が存在するが、周辺に同時期の墓制は知られておらず非常に孤立した有り方を示している。しかも前代において、更に系譜的に後続する墓制も殆ど確認されていない。この点は宇佐地方の連続的古墳造営の有り方と対照的である。

出土遺物については、ほとんど外来的器種である。手焙形土器は九州において佐賀、福岡県内に散見できるものの、時期的には布留（新）に下る例は少ないものと思われる。器形の特徴は佐賀県小城郡三日月町出土のものに近似し、時期的にも近接する。⁶⁾（小林）

註1)『前方後円墳の時代』近藤義郎 岩波書店1983年

2)『赤坂古墳』(『文化財調査報告書』32)1987年 鳥栖市教委

3)『双水柴山遺跡』1987年 唐津市教委

4)『那珂八幡古墳』(『福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集』)1986年

5)『津古生掛遺跡』I 小郡市教委 1987年

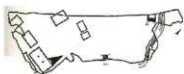
6) 佐賀県立博物館蒲原宏行氏に御教示頂いた。

写 真 图 版

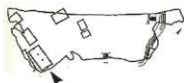
本丸地区全景 (1・2期)



本丸地区Ⅰ・Ⅱ区遺構群 (1・2期)



本丸地区Ⅲ区遺構群 (1・2期)





本丸地区Ⅱ・Ⅲ区通稱群 (1・2期)



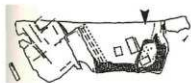
本丸地区Ⅲ区建物群近景 (1期)



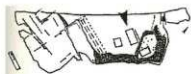
本丸地区SX4 全景



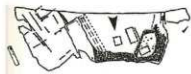
本丸地区Ⅰ区(3期)隅櫓建物群



本丸地区Ⅰ区(3期)SB19, SA22近景



本丸地区Ⅰ区(3期)SB18近景

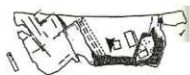




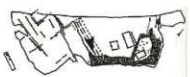
本丸地区Ⅰ区隅櫓土層断面



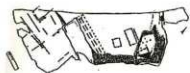
本丸地区Ⅱ区SA2土層断面
第Ⅰ，Ⅱ次整地層



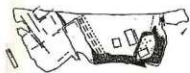
本丸地区Ⅱ区SA2南端部土層断面



本丸地区Ⅰ区SA2全景



本丸地区Ⅰ区SA2基部石列

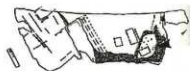


本丸地区Ⅰ区隅槽、下半部石積状況

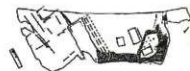




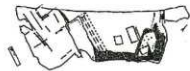
本丸地区Ⅰ区隔槽SB22と瓦敷き



本丸地区Ⅰ区隔槽SB22全景



本丸地区Ⅰ区隔槽SB21



本丸地区Ⅱ区第2号炉跡



本丸地区Ⅱ・Ⅲ区SD7 (左)
SD8 (右) 全景



本丸地区Ⅱ・Ⅲ区SD7断面

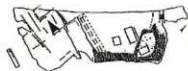




本丸地区Ⅲ区SD 6 東西方向土層断面



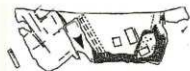
本丸地区Ⅲ区SD 6 全景



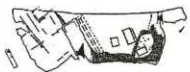
本丸地区Ⅲ区SD 6 側面



本丸地区Ⅲ区SB23



本丸地区Ⅲ区SB23北西隅



本丸地区Ⅲ区SB23石列





北地区SD1 全景



北地区SD1 西端部



北地区SD2, SX1



北地区SD1 東端部



北地区石積東半部



北地区石積西半部





北地区 SA 1 断割状态



北地区 SA 1 土层断面



北地区 SA 1 土层断面



本丸地区方形周溝墓全景



本丸地区方形周溝墓主体部



本丸地区方形周溝墓主体部土层断面





本丸地区下原古墳くびれ部，主体部



本丸地区下原古墳周溝及び崩落墓石



本丸地区下原古墳周溝

本丸地区下原古墳主体部全景

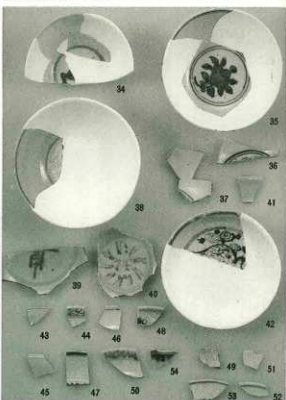
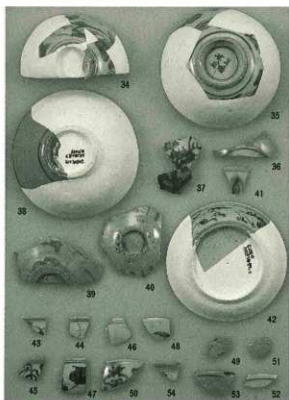
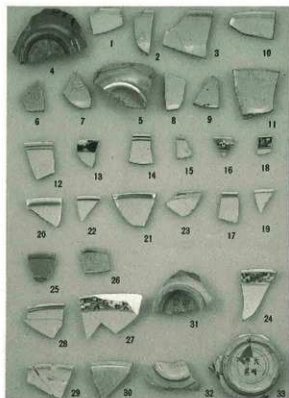


本丸地区下原古墳主体部構築状態

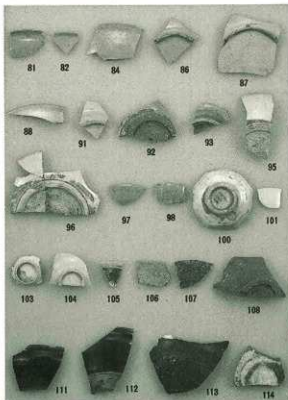
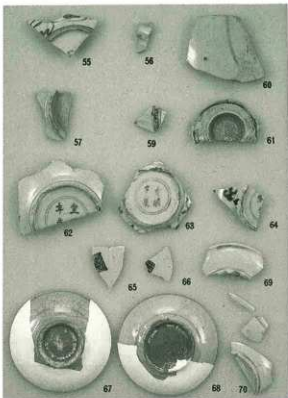
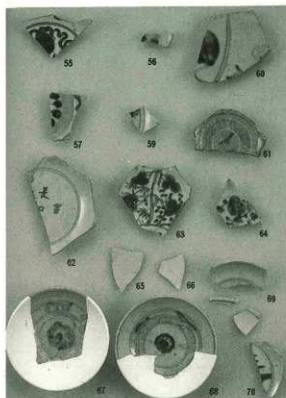


本丸地区下原古墳主体部掘形



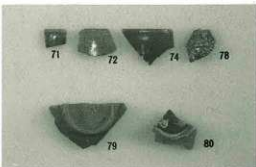
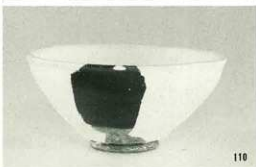


安岐城跡出土磁器類

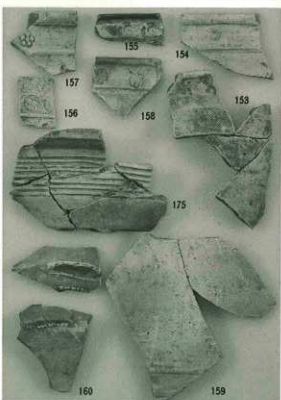
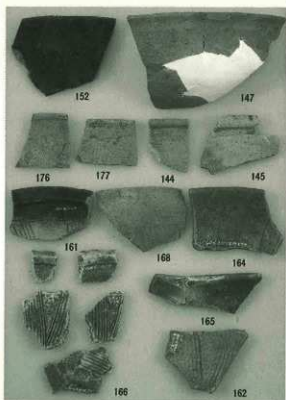
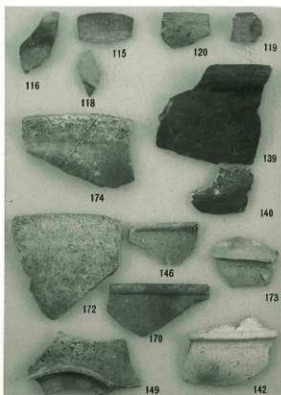
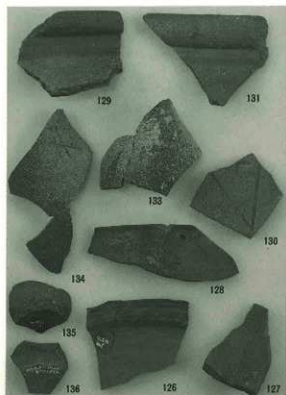


安岐城跡出土陶磁器類





安岐城跡出土陶磁器類



安岐城跡出土陶器 土器類(1)



117



141



143



151



163



167



181



183

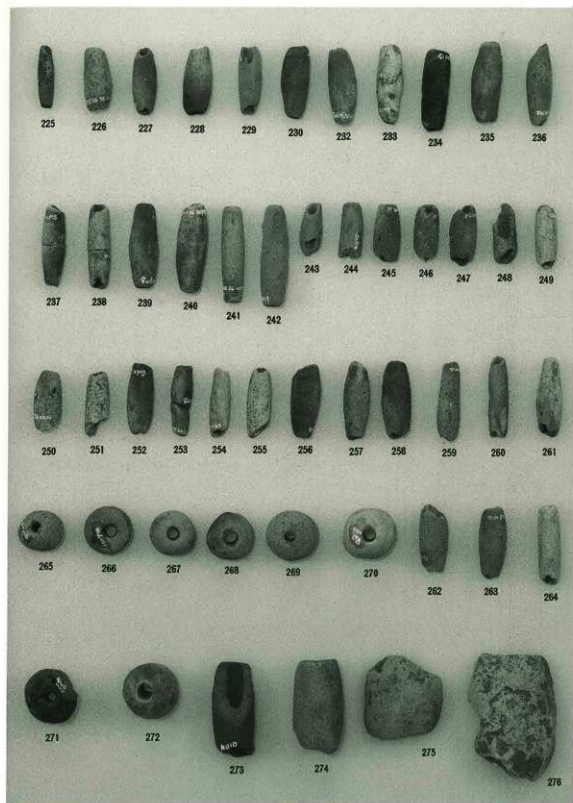


184

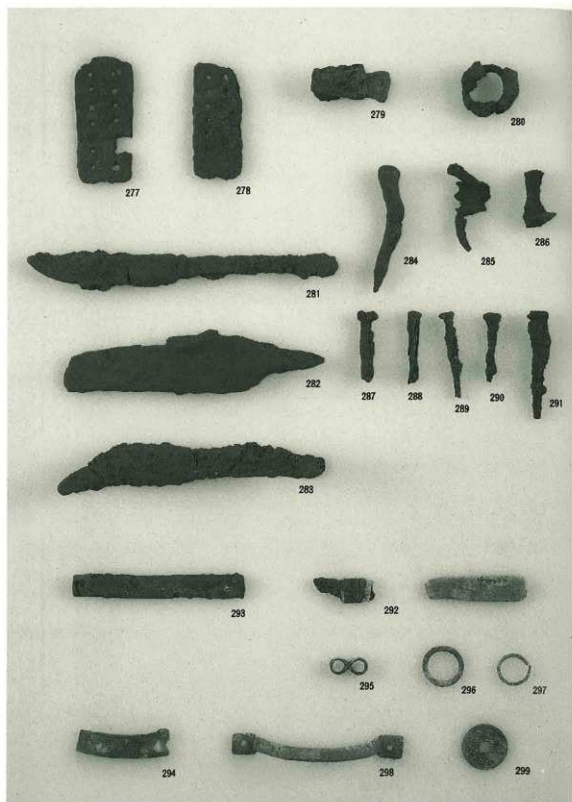


185





安岐城跡出土土鏝



安岐城跡出土金属器類



安岐城跡出土瓦(1)



安岐城跡出土瓦(2)



安岐城跡出土瓦(3)



336



337

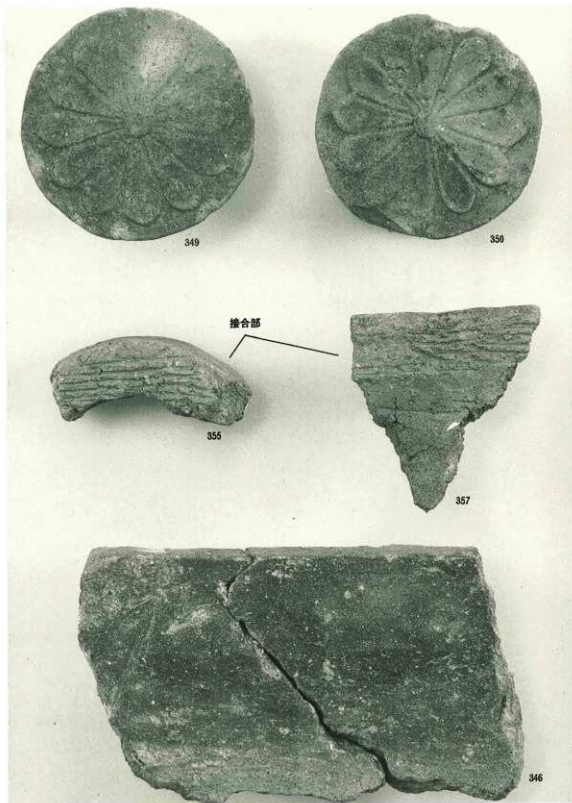


342



343

安岐城跡出土瓦(4)



安岐城跡出土瓦(5)



360



361



362



363



364



365

安岐城跡出土石塔類(1)



368



369



370



371



372



373

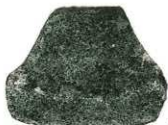
安岐城跡出土石塔類(2)



374



376



377



378



380



382



381



383

安坡城跡出土石塔類3), 石仏



384



385



387

安岐城跡出土石製品



下原古墳出土土器

一四五 黒田記略

一、大友既に降参しければ、如水は九月十六日、安岐の城を攻んために押寄らる。城主の一族熊谷外記といふ者、留守居として籠居ける。如水烈しく攻給ひければ、九月十九日敵悉く降参し、城を明て如水に渡す。城中の財寶諸道具少も残らず與へらる。其上亂妨狼藉すべからざる由、堅く士卒に下知し給ひければ、城中の者共安堵しける。降人の内、其佩如水へ屬し仕ふる者多し。如水是に本領のごとく知行を與へ、妻子をば先安岐に置、陣用意して如水の供をせよと下知し給ふ。或は思ひ／＼他方へ行く者は、其心に任ぜらる。

一、同廿三日、同國富來の城へ押寄給ふ。先城中へ使を立、降参し、城を明渡すべき山云遣されける。され共垣見和泉守が留守居共同心せず、城中より速鐵砲を放かけて防ぎける。さらば此城を攻落すべしと

に覺悟いたすべく候。其に陳未明候間、若照明相働時分は、自是可申談候間、可御心安候。東よりの御左右無之候哉、承度候。恐惶謹言。

追て御見せなされ候狀得其意候。則退進仕候。猶重て可得御意候。

九月二十三日

加主計清正書判

如水様參御館

一四四 黒田記略

一、大友義統は、九月十日、豊後速見郡頭無と云浦に下着し、暫其所に住せらる。大友は古より豊後の國主にて、其上父の宗麟の時、豊前筑後肥後日向の内まで彼旗下に屬せしかば、今に至ても舊恩をしたひ、好みをわすれざる者多し。昔の家人共多く浪人し、或土民に成たる者も有しが、今度義統下向の由を聞傳へ、かしこ此處より馳集りて、既に大軍に及べり。土民百姓共は、兵糧をさげ、馳走しける。大友は先長岡越中守家人の籠りし木付の城を攻落し、本城にすべしとて、宗像掃部を大將とし、其勢五六千人ばかり遣して、二の丸まで攻よせ、城中既に難儀に及びける。木付の城番松井佐渡守、有吉四郎右衛門より、如水へ飛脚を以心得のためとて告来る。如水聞て敵の貴来る由告越たる迄にて、加勢を乞ざる事勇士の志也。木付の城を攻落させては甲斐なしとて、家臣井上九郎右衛門、久野次左衛門、野村市右衛門、後藤左門、時枝平太夫、母里與三兵衛、曾我部五右衛門、池田九郎兵衛、黒田安太夫等、其勢三千餘人赤根嶺より引分て、木付の後攻に被遣。如水は翌十一日の晩赤根嶺を立

給ふ。若富來の城より敵跡をしたひ來らばおさへよとて、母里太兵衛一備を其手あてに被定置。先富來の城をば打捨て、木付の方へ押行給ふ。

一、十二日熊谷内藏介が居城安岐の城の向に着陣し給ふ。此城は富來より六里南に有。此城にも手をかけず只遠見張番油斷なくさせて、其所に一宿し給ふ。如水のいはく、富來の城の敵はしづまりてみえしが、此城の者共はやはり立たる形勢也。明朝此陣を打立時節、定めて敵跡をしたふて、城より付来るべし。此方よりも引伏を置べしとて、栗山四郎右衛門を將として、五十騎ばかり、敵のしたひ来るべき山間の道の邊の藪陰に隠し置て、如水は明十三日の早天に先勢を木付の方に押させ、旗本を引取給ふ所に、案のこつく城中より熊谷次郎介を將として、二百人ばかりしたひ來ける處に、彼藪陰の伏兵おこり、弓鐵砲を放かけ、五十騎ばかりの者共一度に進み、散々に戦ひければ、敵忽に敗北す。此時如水の家臣井上内士の士まで、分捕高名せし者多し。身方勝に乘て追討にしけるを、如水はるかに見て、急ぎ引取べしと下知し給へば、四郎右衛門承て、小川の有けるを限に追捨引取ける。城中より又兵を三百人ばかり出し、敗軍せしをも押留め備を立たり。栗山引返して追崩し、本陣に追付、首共實檢に入ければ、如水感悦し給ふ。此時疎取首數四十八、就中熊谷次郎介をば、岡田三四郎討之、時の將の首なればとて、賞賚なる感狀を賜はる。

べし。然るに何を頼み何をまつともなきに、小勢にて城を守り居て、多く人を亡さん不便なり。所詮我が身一人切腹し、敵へ理を申遣し、残る人々をたすけんしにしかじと申ける。時に是をきく士ども此義に感じ、外記を殺し、残る士命生ては恥也。其儀ならば、我々も共に討死せんとぞ申ける。平野勘左衛門といふ者進み出て申けるは、外記殿の仰も残る諸士の志も、各義にあたり候。此上は拙者敵陣に出て此旨を申、如水のはからひを聞て、其時宜に御したがひ候べしと云て、大手の塙の上にあがり、只今城中より敵陣へ申べき事有て、平野勘左衛門と申者罷出候。暫く矢留有て給り候へと、高聲に呼はりければ、身方の陣中矢留して使の來るを待居たり。勘左衛門城中より只一人歩み出、如水の本陣に來て、外記が申所、諸士の中分かくの如くに候。此上は如水の御指圖を以て、いかやうにも仕るべきために、城中より使者として指越たる由を申ければ、如水聞て、外記が申所、並殘る諸士の申様、何も神妙の至なり。我此城を圍む事、全く人を殺さんためにはあらず、只歸服せざる者を平けて、内府へ屬せしめんがためなれば、只今悉降参するに於ては、外記を始め城中の者一人も殺すべからず。其上我につかへたく思ふ者は、即本領を遣して、只今より召仕ふべし。又他家へ泰公の望ある者は、心にまかせ他家へ行べし。勿論城中の財寶雜具等、心靜に持はこびて、少も残らず、めん／＼に取べし。其方急ぎ歸て此旨を城中に申聞べしと仰ける。勘左衛門歸り此由を告げれば、城中の男女悦びあへる事限なし。即九月十九日敷ことごとく降参し、城をあげ如水に渡す。城中の財寶諸道具、少しも残らずあたへらる。其上亂暴狼藉すべからざる由、かたく士卒に下知し給ひければ、城中の者安堵しける。

降人の内其ま、如水に屬しつかふる者多し。如水是に本領のごとく知行を與へ、妻子をば先に安岐に置き、陣用意して如水の供せよと下知し給ふ。或は思い／＼に他方へゆく者も有。就中熊谷外記は主人へも申さずして、如水につかへんも本意にあらずや思ひけん、如水に暇で上方へ上りしが、其後筑前に下りける。如水是を舍弟養心に付らる。如水はやがて安岐の城に入給ひ、數日逗留し、其地の仕置等かたく示し、城番には手塚孫太夫、貝原市兵衛を残しおかれる。かくて城主熊谷内藏允は、澁州大垣の城にて九月十六日戦死す。

一四三 加藤清正書狀

○黒田
家譜

去十九日の御狀、今日二十三日卯刻至宇土、令拜見候。仍熊谷城十七日より御取巻之由尤に存候。はや内より懇望申之由、落居程有間敷候。爰元も其地より直に相働、一昨日宇土へ押寄、外傳押越町悉放火、はだか城に仕置候。内之體は丈夫なるふりを仕候。一段と人すくなに相見え候。町人百姓城まはりの人質を丈夫に取籠置候。今之分にて候はゞ、急度落居程有間敷と存候。併より口一切無御座候に付、城中雖小勢候。可仕やう無之體に候。但ふけの方へもむめぐさおほく候間、仕寄三方より五口申付候。其しより口より押寄、ふけの内之相構を押破打果し候はゞ、彌落城程有間敷かと存候。兵糧も無之由申候。其外薩國氣遣なる儀も無之候間、可御心安候。次柳川面働之儀こえ申候。縦鍋島が加勢候共働申においては、不吉やう

頓て自是可申遣事。

一大坂の様子如被仰越候御書中、此方も八日に大坂出船之者昨日參候に付て、其様子が有増今朝申候事。

一竹豆州妻子よび被越候由、仕合無比類存候。就夫大津の様子被仰越令満足候事。

一吉川筑中殿難説之由、此時分は定て本説に可被成候事。

一早内右衛門人數を相立申由、一段之被仰付様に、此方よりも左様に仕候て可然山申遣候。定て跡に可被成候。明後日十八日、以面上可申遣候。恐惶謹言。

九月十六日

如水様 貴報

加主計清正書判

一四二

○黒田家譜

○大友既に降参しければ、如水は九月十六日、同國安岐の城を責んために押寄らる。城主熊谷内藏允が一族、熊谷外記と云者、留守として籠り居ける。此城の形南北に長くして、東は海なり。東北は石壁高く、屏風を立たるがごとし。西の方は山近し。城と西の山との間は平地にて、堀をはり南の方を大手とす。土橋あり。又乾の方に土橋あり。平城なれども要害堅固の所なり。如水は城の西小高き所に陣をとり、翌十七日には城を圍ませらる。竹木をきらせ、十七日の夜に入城の近邊迄仕寄を付、十八日には井欄をあげ、所々に木戸をかまへ、城内を窺見て、敵より夜討をすべき隙もなきやうにせらる。扱又龜の甲を作り、二所の土橋より行て、櫓の下の石垣を崩

さんと用意し、其外攻支度整しくせらる。如水の本陣には鐘を鳴し貝を吹、又朝鮮にて銅鑼をた、かせ聞給ふに、是ほど音高きものなし。太鼓よりまさりて、是をもうたせらる。本陣より関をあぐれば、諸軍も関を合せ、仕寄よりは鐵砲を打せければ、ときの聲鐵砲の音夥し。城の堀をも漸打破り、龜の甲にて掘入、石垣も頓て崩る、ばかり也。此時中村甚介高名し、如水より感書をたまはり、褒美と高名したる城中の者共、城攻のはげしき勢におそれ、外には後攻の身方を待べき心あてもなければ、此城やがて攻落さるべし。邊間もあらば、いづちへも落ゆかんと思ふ者も多き折節、如水の家人に馬杉喜右衛門というふ者あり、初は一柳伊豆守につかへたりが、伊豆守先年伊豆の山中の城にて戦死の後、如水へ來り仕へける。又熊谷外記も初は伊豆守家に居て、馬杉と親しく交りければ、馬杉より外記が方へ文を遣して、熊谷以下降参すべし。左あらば、惡命を助くべき由を申遣しける。熊谷外記城中にて諸士を呼集め、此議いかすべきと相談す。其内に上方の軍、いまだ勝負を決する事をきかず、主人の下知を待ずして、城を渡し降参する事不義なり。上方の下知なき内に、敵手痛く攻よせば、城を枕にして討死せしといふ者あり。或は曰く、尤それこそ本義なれども、後詰の身方を待べき類もなし。如水といふ名將に圍まれて、主人もなき軍して、恐うたれ大死せんよりは、只馬杉が方より告來る旨にまかせ、降参然るべしといふ者多かりけり。其時外記申けるは、各申さる、諸の兩條、いづれも理なり。但上方の下知なくしておめく降参し、縛首をきられんも、無念の至なるべし。降参せずば此城二三日の内に攻落さる

に乘いらんとする體を見て、原彌左衛門、並其子吉藏二男與六郎、

其弟喜右衛門、郎徒共に六騎、一番に乘入、又本田半三郎も前後を

あらそひ、小川を駈渡りける。凡五十騎ばかりの兵共、一度にかゝるを見て、初追立られたる者共、最前の合戦に負て、腹痛心付たれば、一戦にも及ばず引退ける。城より後に出たる兵の内より残りたるかと覺えて、思ひ定たる勇士と見え、二十五人一足もひかず踏こたへて戦ひける。此時如水の家人、小林甚右衛門、彼二十五人ひかへたる所に、一番にかけ付、馬上よりよき武者一人突倒し、鎧をはねすて馬より飛でおり、刀をぬき歩みよる所に、常々、軍あらば引廻して給はれと、頼みける若武者一人、馬にはなれ徒立になり來りけるを、小林見て此首とれと言捨て、敵につき突立たる鎧を引ぬき、馬に打のり先に駈行ける。去程に身方の兵共、我もくゝとあらそひ戦へば、彼二十五人の兵大かた討れぬ。其外の者は蜘蛛の子を散すごとくにげ行ければ、身方の兵共、猶も追かけ高名せんと駈行けるを、栗山乗過し馬を横たへ、軍法を破り、沙汰の限なりと制しければ、いづれも馬を棄とめ、勝負をあげんといきみけるを、栗山申けるは、只今勝どきをあげば、敵追すてたる事を知て、心安く退べし。無用なりと制しける。敵共の物具下々に拾はせ、軍にかては利得ある物と思へば、下々いさむものぞとて、心靜に本陣に退付、首共實檢にいければ、如水感じ給ふ。此時打取首數四十八、其内かぶと付二十、雜兵二十八なり。就中熊谷次郎助は、岡田三四郎計て、

時の大將の首なればとて、賞斷なる感書をたまはる。此時如水みづふ白旗をたまふといへり。又船曳刑部等も、高名したりしかば、豊前の内にて加

祿を與へらる。よし、感書賜りける。又小林甚右衛門が鎧つきたりし敵の事、小林はかくともいはざりしに、首をとりたる者、此首は小林鎧付て拙者に首をとらせ候。全く拙者手柄にてはなく候由、實檢の場にて申ける。如水聞て小林を感じ、祿を多く與へ給ふ。又首とりし者も、其眞實なる事を感じらる。小林は日本朝鮮の合戦に度々高名せし故、今日首とらずともと思ひ、我が鎧付し敵の首を人にとらせけるにや。實檢終て勝鬨を執行ひ、物初よしと悦で、其首を中津川に遺し、島田といふ所にぞかけさせられける。

一四一 加藤清正書狀

○墨田家譜

一昨日十四日の御狀、今日未刻に拜見申候。

義統取上候付て、いづれの所をも被捨置、御押詰御先衆手柄を被仕候由、御満足奉察候。於拙者珍重存候事。

一熊谷城より御引取所々人數を出申候に付、引伏に可被成御打之由、御調儀御手柄に候事。

一木付兩人之衆大手柄之由、貴老御出陣の故と存候。拙方も一昨日松井方よりの注進の趣にて驚、昨日阿蘇邊着陣、今日小園迄拙者參着候。先手之者共は、是より二里三里づ、豊州境に陣取候。

明後日は其許へ着陣可仕候。義統首に被成候はん御分別許要候。

紹忍掃部表裏は不_レ及_ニ是非_一、修理手前之儀沙汰之限に存候に付て、

昨日使者を遣申候。其跡へ夜前修理所より兩使被指越候。則追懸可申と存、書狀不請取候處に、同名右馬允少致遠慮候へと申に

付、先人質を遣候へと申遣候。紹忍掃部妻子之儀は未申遣候間、

一四〇

○黒田
家譜

○同十二日の未の上刻、安岐の城の向に着陣し給ふ。安岐の城は富來より三里南にあり、是は熊谷内藏允が居城なり。熊谷も治部少輔に屬し、大垣の城に在て、安岐の城には留守店の者共籠城す。如水此城にも手をかけず、只遠見張番油断なくさせて、其處に一宿し給ふ。晩景に城中より物見のためとおほしくて、鎧武者數人乗出し、身方の陣の近邊迄來りて度度馳廻りけるを、身方若武者共是を討んといさみける。如水かたく制して、身方の陣より一人も出合へからず。若軍法を破りて出て戦ふ者あらば、何者にても刑罰に行ふべしと下知せられる。如水のいはく、富來の城の敵はしずまりて見えしが、此城の者共ははやり立たる形氣なり、明朝此陣を打立時師、定て敵跡をしたふて城より付來るべし。此方よりも引伏を置べしとて、栗山四郎右衛門を將として、馬廻の士頭肥塚理右衛門、原彌左衛門、齋藤五左衛門、小林甚右衛門に命ぜらる。又岡田三四郎後黒田監物と本田半三郎、畑彌平次、山脇彌七郎などいふ兒、扈從をもつて行て取劍へとのたまひ、鐵砲足輕多く指添られ、又黒田三左衛門家人に、江見彦右衛門、柏屋茂兵衛、近藤加右衛門、關勘六などいふ者、豊前に在て此陣の供したりしが、是等をも相加へられ、都合五十騎ばかり也。如水四郎右衛門等に下知して、あの谷合の森蔭に伏兵を置べし。前は馬の駆場よき所なり。敵通る時早く伏兵を起して、打もらすなどぞ仰ける。其下知に従て、敵の城よりしたひ來るべき、山間の道の邊の森蔭に隠れて、敵の來るを待居たり。其上の山とい

ふ。伏兵を置く所如水は明十三日の早天に、先勢を木付の方にをさせ、旗本を引とり給ふ處に、案のごとく城中より熊谷次郎助を頭として、騎馬の兵五十人、雜兵共に凡二百人許、打出てしたひ來りけるが、此方より伏兵を置たる森蔭に不審に思ひ其根をよけて來りけるを、身方の伏勢共一度に起り、弓鐵砲を放ちかけ、敵身方たがひに矢軍をしけるが、栗山よき時分と思ひ、應を揚ければ、相闘を待かねたる勇士共、五十騎ばかり一度に進みける。中にも本田半三郎と名乗、一番にかけ出しける。是を見て原彌左衛門、齋藤五左衛門、中村甚助、山脇彌七郎、畑彌平治、岡田三四郎其外六七騎、最先に乘出し敵陣へかゝる。殘る勢つゞいてことごとくかゝり、散々に戦ひければ、敵忽に敗北す。此時肥塚理右衛門、齋藤五左衛門、本田半三郎、岡田三四郎、山脇彌七郎、長井八郎右衛門、中村甚助、並栗山手の者、栗山甚太郎、津田才藏、養父仁左衛門、黒田三左衛門内、江見彦右衛門なども、皆分捕をぞしたりける。畑彌平次も騎馬の敵を鎗付て手を負ける。身方勝に乘て追込にしけるを、如水はるかに見給ひ、いそぎ人數を引とるべしと下知せらる。栗山四郎右衛門承て、再拜を振て身方の兵を引取ける。城の十町ばかり此方に小川あり。其川を隈に追捨たり。城中よりは是を見て又兵を出し、敗軍せし者をも押留め、都合三百餘人小川の端に備を立たり。栗山下知しけるは、此ま、引取て敵もし付來らず、戦ひなくして相引に引たらば、彼が城中より出て備たりし勢に恐れて逃たりと、後日にいふべき事必定なり。いざや此小川を越て、あの敵共を一追をひ崩し、にげば其ま、にがすべし。長追すべからずといましめ、身方はや川

如何ニト宣ヘハ、老臣何モ一同ニ仰最ニ候加様ノ城ニ日數ヲ被送、義統御退治延セバ、義統多勢ニ成、御大事タルベシ、未勢ノ微ナル内ニ、義統ヲ御討有テ、其後小城共ヲ御資候事、最謀ノ圖ニ當リ候半トナリ。去ハ石垣原ヘ人數ヲ押セトテ、富來ノ城ヲ打捨、軍ニ備々ノ行列ヲ調ヘ、軍法ノ如ク鼓ノ音ニ應ジテ東ノ方ヘ發向アル。

安岐表伏兵戰之事

同十二日未ノ上刻、安岐ノ城ノ向ニ御陣ヲメサル。此安岐城ト申ハ、熊谷内藏允ガ居城也。熊谷モ大坂方ニテ、其頃莫大垣ノ城ニ有テ、安岐城ニハアラス。^(守カ)留守居ノ侍共、堅固ニ籠城シテケリ。如水公此城ニモ御カマイナク、遠見番ニノカ、リナド、側敵被ニ仰付、御陣ヲナサル。十二日ノ晩景ニ、城中ヨリ物見ノ武士アマタ乗出シ、味方ノ陣近ク迄乗寄々々、度々ハセマハルヲ、先手ノ若者共是ヲ討シトケル。如水公堅ク押テ、味方ノ陣ヨリ一人モ不_レ可出、若軍法ヲ破者アラバ、何者ニテモアレ。法ニ任テ新密有ベシト也。依_レ之、ハヤリノ兵共、目ノ前ニカケマハル敵ヲ見ナガラ、徒ニ日ヲ暮ケル。如水公被_レ仰ハ、富來城ニ籠者共ハ、殊ノ外シマリテミヘタルガ、此安岐ノ城ノ者共ハ、早リタル敵共ナリ。明朝我等此陣ヲ打立。折節、定テ跡ヲシタヒ、城中ヨリ可_レ付出、此方ヨリモ伏兵ヲ置、可_レ然トノ御説ニテ、城中ヨリ人數可_レ打出、道ノ邊、藪タ、ミニ伏兵ヲ殘シ置、栗山備後守ヲ大將ニ被_レ定、備後守ガ手勢ヲバ先ニ押セ、其身ハ馬廻歩行ノ者計ニテ跡ニ殘居ル。如水公、十三日ノ早朝ニ陣屋ヲ打立人數ヲ押出給フ。案ノ如ク、城中ヨリ敵ニ三百騎計門ヲ開

キ、マツシグラニ打出。城中ノ兵共此方ヨリ伏置タル藪タ、ミツ不審ニ思ヒ、其處ヲ臨ニナシテ馳通り、前ヘ廻リ懸ラントス。夜明テノ事ナレバ、伏兵ノ者共早城中ヨリ敵出タルヲ見付、敵モ伏兵ヲ見テ取テ返シ、是ニ渡合ントス。味方ノ兵共同時ニドツト立アガリ、鐵炮ヲ放チ矢ヲ射カケタリ。兩陣ノ中ニハ小川一ツ流れタリ。敵味方兩ノ川端ニ立テ互ニ矢軍ヲスル所ニ、味方ノ陣ヨリ本田三郎ト名乗り、一番ニ乗出シ、川水ニ馬ヲ打入タリ。是ヲ見テ、原彌右衛門尉、齋藤五左衛門尉、山脇權之助、畑彌衛次、岡田權左衛門尉其外六七騎川ヘ打入、敵方ヘカ、ルヲ見テ、味方ノ大勢ツヰイテ突カ、リケレバ、敵一支モ不_レ支敗軍ス。味方勝ニ乘テ追討ニス。餘リニ長追シツベク見ヘケレバ、如水公山ノ上ヨリ見給テ、鐘ヲ鳴シ急キ人數ヲ引上ト下知シ玉フ。是ヲ聞テ栗山備後守敵味方ノ間ニ馬ヲ乗入、^(采配カ)再拜ヲ振テ味方ノ人數ヲサツト引上テウチカヘル。其一戰ニ討取首四拾餘實檢シ玉ヒ、勝鬨ヲ取行、首途吉ト喜給ヒテ則其首共ヲ中津川ニ被_レ遣、高瀬川ノ西ノ川端ニゾ獄門ニ懸ケル。夫ヨリ立石ノ方ヘ押玉フニ、石垣原ヨリ三里此方、頭成ト云所ニテ、立石ノ方ヨリ早打二人出來ル。田代彦助御馬ノ廻ニ御供申タルガ、是ヲ見テ急ギ出向ヒ、如何ニト問ヘバ、先手ヘ被_レ遣タル横日ノ者ヨリノ使者ト申。其様子ハ井上九郎左衛門尉、今朝於_ニ石垣原義統ト一戰ヲトケ、義統ニ打勝候。則、義統ハ立石ノ要害ニ櫓籠リ、人數ヲ集居申之由申來ル。

親宏 号田原 童名千代壽丸 始号親實 次郎 常陸介
母三人同腹、号太有院、法名宗龜居士、天正七年己卯九月十六日卒、豊後國々東郡壽定林院 矣。

女子 嫁秋月種實孫左衛門尉修理大夫号齋林院
笑翁宗閣居士

女子 嫁田原石馬頭親實、豊後國鞍懸龍城之時病死

親宏嘗無男子、故養有於大友之末子、而号田原親實、親實不順於總領大友、於豊後國鞍懸及阿岐兩城、十一月防戰、其防戰勇實而到危、此又毛利輝元爲助勢、而使於機船數次、然遇風風不幸而於豊後國姫島、根船被却焉、又同秋月種實并進實之二男高嶺右近加於援救之騎兵、其秋月之士也、坂田勘解由左衛門、其高嶺之士也、伊藤外記、是等相共盡勇戰死矣、於此親實亦其感助成之士、而推慘焉、坂田、伊藤之武功不足勝計、我僕從或戰亡、終退轉、放矢通其危難、而號居于豊前國善光寺下村竹江村、于時大友聞於城、往人時枝者令討親實、殉死者七人、於茲田原氏之續流絕、田原氏沒落之後、大友義續之一男新九郎親家号田原、属于大友之麾下也。

女子 於于豊前城并谷、病死矣

親並 号如法寺 号田原式部少輔
入道耕芸 法名紹閑

永祿十一年於于豊前國田川郡香春一岳爲魁得勝利、且又被官之友久士計終戰死也、想領出原親安感武功而被與證文矣、天正八年八月豊後國撰峰起之時、長男親武相共能于較懸之城、早依攻急於鞍懸之間、而設於安感毛利輝元、筑前之秋月種實之後攻、專得勝利之條、親安感武功而使田五拾貫并證文被與之。

親武 号如法寺 号田原 号入江 童名龜松丸
式部丞 左近 法名參室出禪居士 四十八歲卒
慶長四己亥年四月十九日葬正法山妙心寺歸桃院、
城州伏見死

豊後國一撰峰起之時、輝依異體龍于鞍懸城、令防戰、或深、則室、其因依有之、過于松州輝元而計於機之運送、且又浮加勢、而略而得勝利、於此想領親安感一、再興之武略、而長光、馬一牽、原毛、黃金五枚、段子十卷、田一壓町記之、被與證文矣、豊前國門司合戰退口之時、同國地百町記之、被與證文矣、豊前國門司合戰退口之時、同國自京都都黑田原、至于中津郡國分寺、毛利之土卒并小早川内乃美兵部丞、野局來島警固之給人數等、依于附送之、而終日專爲防戰、或自身亦令、太刀計被數、處之統、故想領親甚感之被與證分矣、
天正八年八月豊後國一撰峰起之時、耕芸、親武相共龍于鞍懸城、得勝利、此以想領親實感之而被讓與於水松給田原之內拾町地、山香郷之内半三町地并被與證文矣、想領親實自殺而鞍懸城沒落之後、田原氏之續流依、無繼、而安松、木原阿氏之郎從持、來于田原氏代々之總官口宜并將軍家之證文、先相累代之系圖、太刀二振於豊前國足立山之下、矣、親武、田原氏之庶流、傳之以讓與于子孫焉。

一三八 豊後國志 古蹟 國東郡

鞍懸城 在來鶴部佐野村、田原氏爲據、野史曰、
天正中田原親實據之而叛、是也。

○豊後高田市大字佐野子城山

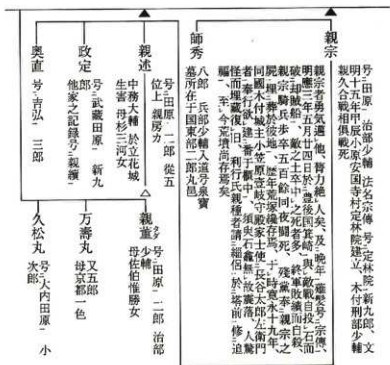
一三九

○黒田如水
石垣原軍記

富米ノ城主寛和泉守ハ、治部少輔ガ方人ニテ、其頃、美濃ノ大垣ノ城ニアリテ、富米ニハ不有食、留主店ノ者、城ヲ堅固ニ持タリ。
如水公侍大將衆ヲ召、面々ハ如何思フゾ、先此城ヲ巻ホグシ、立石ニ懸リ、義統ヲ令誅野テノ後、其外ノ小城共ヲバ可貴ト思フハ

一三七 田原氏系図

○速見人
江文書



程に、郷人豫め親貴に一味せし逆心の志を忘れぬ。邪なる分別出來

て、先の憤を遂ん爲に、郷中の者同意にて、安岐の切寄に付城を構

居たり。然るに宗麟公、木付新介に仰付られ、木付の諸勢を以て、

國東表をさし揃めらるゝ。宗麟公切々仰遣はさるゝは、逆徒と戰て、

雜兵少々討せては詮なき事なり。取籠めて日を送り、根づめにすべ

き山の御説なり。此御意に依て、口々を堅め、在陣に日を経る所に、

七月十八日に親家城中の勢を打出されしかば、諸勢共に押懸け、彼

逆徒等を若干討取る。され共多勢籠りたる要害なれば、左右なく落

城せず。鑓合をする事度々に及ぶ。如此様林一々注進ありしかば、

宗麟公仰せらるゝは、古人の言葉に、千鈞の之弩、爲三鴈

風不發機と云ふ事あり。卒爾の働に、雜兵損じ然るべからず。

心長く味方の兵討たせざるやうに、なぶり殺に致すべし。向後の覺

悟肝要なり。然しながら此度の粉骨の輩、面々聞召届けられ御感狀

あり。其辭曰、

於其表、長々在陣。殊近日者。至安岐切寄。諸勢依詰寄。日夜

軍勢之由承候。心懸之次第感候。就中從最前馳走之條。別面御

辛勞察存候。彌可被勵忠意候事。可爲祝着候。猶重而可申候。

恐々謹言。

七月廿日

田村作進殿

宗麟

其表居陣。殊安岐切寄國東者。以浦部之勢被差搦。八月十七日

諸勢押寄御。軍忠之段。令承知感候不淺候。若親家。任若氣之

勇氣。率爾之働。於有之者。田村作進合。可計儀定事肝要候。

猶追々之左右待人候。恐々謹言。

七月廿日

木付新介殿

宗麟

浦部面々にも、御感狀あり。事繁ければ暑し畢ぬ。去程に、宗麟公

重ての御説に付て、方々口々を取つめて、自然逆徒打出づる事あれ

ば、討捕などして月日を送る所に、親家仰せらるゝやうは、宗麟公

の命なればとて、彼等程の敵に向ひ、徒に日を経る事、他國の間へ

然るべからず。押寄せ退治すべき由を、強て仰せあるに依て、九月

上旬に諸勢詰寄せて、平攻にせられけるに、彼逆徒等も、元來不敵

の者共なれば、逆も通るべき命ならず。大守を敵として死なん事、

屍の上の面目なり。皆狂ひ死せんと罵しつて、面も振らず戦ひ、一

人も残らず亡びぬ。其後、親家安岐の郷の御仕置等是有て、諸軍勢

を歸されぬ。宗麟公御感淺からず。高名の面々に御感狀あり。

前十三於安岐切寄、高槽口防戰。依被碎手。自身被此之由。

粉骨之次第。忠儀無比類候。殊僕從孫三郎。負手之由。旁以

感候無極候。彌可預御馳走事肝要候。必取鎖可賀申候。恐々

謹言。

九月十五日

義統

田村作進殿

御感狀の人數多しと云へども、文章多分是に齊しき故に、銘々に記

さず。

るべき事、御尤に御座候。頃日親貫内の侍、津崎善兵衛入道を度々秋月方へ差越す。又、秋月方よりも上野四郎兵衛、江利内藏助と云ふ者を、親貫へ差越し、龍城の内談は有る由、委しく注進申さる。

宗麟公いよ／＼早速彼逆徒を誅伐なさるべきとの御説にて、玖珠、日田、大分、大野、直入、此五郡の諸勢を、浦部鞍掛の城へ差向はる。其頃宗麟公の御子息、左兵衛義統公御家督を請け給ひ、御代初の軍なれば、義統公も御出馬を遂げらる。扱、親貫養父親弘は、田原の惣領にて大身なり。城の携へも廣大にして、しかも能き武士多勢籠居て、秋月、龍造寺への内通も、首尾する事なし。秋月も國を出て後卷の儀も叶はず。龍造寺猶以て如此なり。去程に先陣三千餘の勢、いまだ二の手も續かざるに、二月廿四日の早天に押寄する。城中より親貫家老溝部宮内少輔、荳嶋美作守、松本一佐、森越中守下知して曰、二ノ手も旗本も寄ざる先に、一入付よとて城門を開かせ、梁を取て突てかゝる。寄来る先陣を一二町追立つ。二の手を以て押返す。親貫功者故に、下知して早速引取らんとす。爰に、浮武者吉弘加兵衛尉が勢人替り、鐘を合せ城中の武士、荳嶋美作守を吉弘討取る。此威に大手口に於て、究竟の武者五十餘人討捕りぬ。是、吉弘が勇力に依て勵す所なり。城中の先勢に、寄りの先陣追立られしを、義統公御腹立なされ、二ノ備七千餘を以て我攻に仰付られ、龍門より御旗本脇備を寄せられしかば、方々口々より押かかり、堀を渡り、屏を乗り、亂入て火花を散らし戦ふ。親貫、元來大剛の勇士なれば、大音聲を擧げ、郎等を諫て曰、天我を亡す。是則天命也、天をも怨みず、人をも咎めず。畢竟我心より起る因果

なり。さもあらばあれ、大守の多勢を引請て、切腹する事弓箭の面目なり。面々も遁るべきにあらず。最後の軍なれば、随分手柄を盡し、大剛の討死して、名を末代に留め、後世に傳を殘すべからずとぞ下知したりける。城中の武士も、田原の家譜代相傳の侍、殊に敵も味方も、皆頃頃面を知り心を知もあり。又、陪臣に到ては、或は縁邊、或は所縁同姓のよしみなりしかば、他人より猶恥かはしく思ひ、身命を惜まず働さぬ。其外の武士も遁るべきにあらず。爰こそ最後なれと、面も振らず戦ふといへども、宗麟公御父子の御惡しみの憤り、又、諸軍勢も惡みを同ふする勢ひに、城中の勇力もつき果て、殘なく討れぬ。親貫は本丸に引籠り切腹す。城内雜兵共に四千餘人の討死なり。親貫此度の勇力、君に對して勵まざば、其譽善く比類なかるべきに、非道より起るに依て、勇力は惡みに押され、其沙汰更になし。天正八年庚辰二月廿四日に如此也。去程に、軍の一口を聚めん大身の田原右馬頭親貫、斯く野心を企て、其身を亡はす事、是以て皆國家の衰微なり。末如何とぞ、諸人申あひぬ。

一三五 安岐郷人逆心之事

○大友興隆記

自滅到來は、遅れ難きにや。去、天正八年庚辰に、豊後國東の郡田原右馬頭親貫、大友左衛門督入道宗麟公逆心企ての隙、安岐の郷、或は無足人、或は土民百姓等を、親貫の下知に隨はしめんが爲に、過分の祿を宛行ひ、賺して一味せしめしか共、俄に多勢を以て押掛け、親貫を御退治なさるに依て、安岐の郷人、右に同心の志を空くして過ぬ。其頃は宗麟公の六男、親家安岐の郷を御所持なり。去

戰、於日州耳川、大友家敗軍一子死之、忠時在木付美濃入道宗虎手頗盡粉骨云、天正七己卯正月田原親實謀反於安岐、濟日々合戰、至八年辰二月、奈田大宮司左衛門佐銀基助、力田原家、是以木付銀秀入道宗虎於塩屋邑田尻討死、忠時退國盡粉骨收敗軍、使敵軍不進、乞義統公御出馬、二月末屋形御出馬於國東郡、三月中旬鞍掛城落去、田原家滅亡矣、義統公賜感狀云、去二月廿二日於塩屋田尻木付美濃入道宗虎討死敗軍之御共方以一身之走廻數百ノ味方相助候事、偏有_二其方武略_一、彌可_二抽忠勇_一、事肝要候、仍感狀如件、

天正八年庚辰二月廿八日 義統(花押影) 秋吉四良右衛門とのへ

其後安岐郡一揆蜂起、依之木付中務少輔銀直清田阿波守銀忠田村作之進銀長三人發向、忠時戮力木付氏頗有勲功、至七月十八日實際寺滅亡云々、
贈 友斐通居士

一三四 田原親實謀叛之事同軍

○大友
興隆記

天正七年己卯十二月下旬に、田原親弘の養子。右馬頭親實は、國東郡の城主なり。病氣の山言上す。是に依て、大友左衛門督入道宗麟御暇を出され、住所に於て養生すべきとの御意に任せ、同國浦部の居城に引籠り、明春年頭の登城もなく、療治の爲とて、日を重ね在城の間に、鞍掛と云ふ出城を拵へ、其丸に移り、兵糧玉藥を用意の

間へあり。其頃如何なる者か、親實心中を粗察したりけん。一首の歌を書て、鞍掛の城門の柱に、うち付て置く。

ちかつらが運は月毛の右馬のかみ、鞍掛として落ちてこそゆけ。去程に、此狂歌を見たる者も、唯うはの空なる難談に、思ひなしかる處に、猶病氣重きのよし言上して、白件庄丹生嶋の登城更になし。去程に親實は、筑前國秋月種實、肥前國龍造寺山城守隆信方まで、密かに心を合せ、城郭を擣へ籠籠る由、重て聞ゆ。親實此度謀叛の發端は、養父親弘の代より家中の者共、順路なき取扱有し故、親實家臣二つになりて、鬱憤を含む族多かりき。然るを宗麟公相方純熟致す可きとの御説、再三仰せ遣されしを、親實に至て家中の者共、疎略を存候へとの御意仰下さる、と心得、邪ヨコなる分別出来て、宗麟公に對し不義を行ふ。されば其頃は田原近江守入道稻忍、大守に邪宗を依奉進、禪學に趣き給ひしが、世の目に御覽じ違へらる、にや。神社佛閣をも敬はれず、御政道も前方に替り、五常の道も覆にして、相違なる事共少々有やうに、下々沙汰しける折節なれば、親實、宗麟公の御意を一々以て邪に聞なし、大友の家一姓の筋目に背く。又、去、明德の頃、田原の家は公方の家臣たりし威厳を心中に籠め、彼是に付て逆心起れる由聞へぬ。是誠に親實果報限り有て、家滅却すべき端なり。去程に、天正八年庚辰二月下旬に、宗麟公筑前表へ諸勢を差向はれ、御旗本は日田の郡まで、御發足なさるべき御用意最中に、斯の如きの逆心出来て、御進發を差止られ、急度親實を御誅伐なさるべきと思召ける處に、筑前國立花の城代戸次道雪使札を以て言上の子細は、親實不備を行ふに於ては、急度御退治有

一二九 宗柏外五名連署書狀(切)

○東国東
書
鴨文書

(見紙野村ノハ書)

(書鴨美濃守殿)

(包紙書也)

(端表切封)

(墨引)

淨
仙
連
書

安岐郷内太良丸名拾貫分之事、任三本領筋目、此節被請御裁許之
由、最珍重候、以此旨彌可被達馳走之事、專一候、恐、謹言、
天正九年
五月廿三日

淨
仙
宏
恒
統
兼
宏
錦
宗
柏

(花押)
(花押)
(花押)
(花押)
(花押)
(花押)
(花押)
(花押)
(花押)

書鴨美濃守殿

一三〇 田原親家書狀案寫

○東国東宮水
氏影寫文書

去春入郷以來、別而含順路馳走之衆、爲其價、安岐郷之内、溝
部後藤左エ門跡參真文同郷成安藤九郎跡五貫文之事、令扶助候、
倍守此旨、可勵勲功事肝要候、恐、謹言、
天正八年
六月五日

溝部右近允殿

(田原)
親家
書判

一三一 田原親家恩賞宛狀

○東国東
松原文書

爲海邊覺悟一兩切寄取付候間、別而馳走可爲祝者候、然者於當
郷中、三段地加扶助候、倍於粉骨之心懸者、彌可賀之候之趣、
書鴨美作守可申候、恐、謹言、
天正十七
六月廿八日

松原紀右衛門殿

一三二 田原親家書狀案寫

○東国東宮水
氏影寫文書

入郷以來、別而真心之覺悟、神妙二候、何レ爲其價、安岐郷之内、
龍王名三貫分、同郷之内手嶋大藏丞跡三貫分之事、加扶助候、彌
守此旨、可勵軍忠事、肝要候、恐、謹言、
天正十七
七月廿一日

溝部縫殿助殿

(田原)
親家
書判

一三三 秋吉氏系図

○遠見秋
吉文書

忠時

秋吉新四郎 改四郎右衛門尉

母木付上野之介親清女 贈本光智瑞大姉

天文十二秋與父忠續上洛、歸而與秋月合戰十七歲初陣
有功、島津龜造寺等豊筑肥之間所々合戰戰功不遺數二云、
弘治二從父赴防州、軍敗テ拂敵扶父漸而歸國矣、天正六
戊寅大友宗麟公與薩州島津義久一及矛楯、率九ヶ國兵ヲ合

二四 田原親家一跡安堵狀(紙切)

○東國東
郷司文書

今度一家錯乱之處、父監物允事、從最前無二之覚悟、于今無變化候、
寛神妙之至候、然者親一跡之事、至其方任運統之旨、領掌不可有相
違候、恐々謹言、

十二月八日

(田原)
親家(花押)

郷司松寄殿

二五 田原親家知行充行狀(紙切)

○東國東
郷司文書

(松寄封ウハ書)
萱嶋美濃守殿

親家

入郷以來、別而貞心之覺悟感入候、殊馬方之儀、中付候之處、一段
心懸令祝喜候、然者安岐郷内太郎九名拾貫分之事、預遣候、
以此旨、倍馬方之事、馳走可爲祝着候、恐々謹言、

(天正九年九)
卯月十二日

親家(花押)

萱嶋美濃守殿

二六 木田宏籌・萱嶋賴直連署打渡狀(紙切)

○東國東
郷司文書

(包紙ウハ書)
萱嶋美濃守殿

賴直

木田長門守

萱嶋美作守

(松寄封ウハ書)
郷司文書

當郷之内太郎九拾貫分之事、爲御本領之間、御拜領尤目出度存候、
彼在所不殘三反歩、打渡申候、爲御存知候、恐々謹言、

(天正九年)
卯月廿七日

賴直(花押)

宏籌(花押)

萱嶋美濃守殿

二七 田原親家知行宛行狀

○岩藤文書
連見軍日出町人牛大神

(松寄封ウハ書)
郷司文書

於雄渡車禮、任判形之旨、成安藤九郎跡、加扶助候、給分本郷有之、
全令領知、彌奉公肝要候、恐々謹言、

(天正九年)
五月三日

(田原)
親家(花押)

佐藤右京允殿

○大添ノ所在地本詳。

二八 田原親家知行宛行狀寫

○信水氏影寫文書
大分縣史料一〇

於雄渡車禮、任判形之旨、成安藤九郎跡、加扶助候、給分本郷有之、
全令領知、彌奉公肝要候、恐々謹言、

(天正九年)
五月三日

(田原)
親家書判

溝部右近允殿

(雅稱) 御宿所

(村網鑑錄) 宗殿

一一八 大友義統感狀

○大友家文書錄 大分縣史料二三

去月七、到該縣取懸候之刻、方角之衆申談、別面勸馳走之由候、感入候、何様取願、一段可賀之候、恐、謹言、

(天正八年) 十月十四日

義統 在判

田染惠立

一一九 大友義統書狀

○施子木文書 熊本縣史料中世一

(瑞光切封) (畢引)

急度衆筆候、數度如申候、田原右馬頭依惡逆、加誅伐之下知頃、鞍懸・安岐兩城令落去、於于今者、彼堺無殘所屬案裏、本望候、然者其表之儀、親爲被申談、一行之御調儀、可爲此節候之趣、

(親實) (合志) (親守・道勝) (親康・宗盛) 猶志賀安房入道・朽網三河入道、可申候、恐、謹言、

(天正八年) 十月十四日

義統 (花押)

鹿子木三河入道殿

一二〇 田原親家感狀 (紙切)

○安東文書 大分縣史料一〇

去春堺目亂入之側、寄合之者共、以順路之覺悟、致馳走之段、轉申依申儘存知候、殊感懇堅固之刻、折々懇忠之次第、聞及候、神妙候、追而可成其感之通、託摩佐渡入道可申候、恐、謹言、

(天正八年) 十月廿一日

(田原) 親家 (花押)

(マ、) 案藤宮内允殿

一二一 田原親家一跡安堵狀 (紙切)

○東國東 森文書

(瑞光切封) (畢引)

今度一家不慮之成立候之處、其方親子順路之以覺悟、別而馳走誠感悅之至候、然處備中進退慮外之仕合、不及言語候、乍勿論一跡之儀、任安清申旨、不可有相違候、全領掌肝要候、恐、謹言、

(天正八年) 十一月十四日

(田原) 親家 (花押)

森 六允殿

一二二 大友義統諸點役免許狀

○大友家文書錄 大分縣史料三三

於今度鞍懸表、在陣辛勞、殊千部口合戰之刻、分捕高名忠儀、無比類候、仍當院貞恒名之内、若宮免之事、萬難諸點役令免許候、彌可被勸馳走事、肝要候、恐、謹言、

(天正八年) 十一月廿六日

(大友) 義統 在判

厚彈正忠殿

一二三 大友義統感狀

○大友家文書錄 大分縣史料三三

□鞍懸表出陣之儀、申付候處、遂其節、于今長、□辛勞之儀候、殊前廿一、大津留民部少輔被申□字佐郡働之刻、別而軍勞之由、感入候、彌可觀□□肝要候、恐、謹言、

(天正八年) 十一月廿一日

(大友) 義統 在判

務丞殿

一一三 大友義統・同田肅連署感狀

○大友家
文書錄

○秋月種實假援兵於親賢路、聞浦部已陷、將還兵、宗像掃部助鎮續、
大津留河內守、書承義統命、防禦秋月、於是至金^(城方)、殺^(城方)
□□長、伊藤外記、坂田市祐、而秋月兵敗走、□□黨降、初
柴田筑前入道禮能教之、勸乞和、以□□田久三共同族登安岐、
而及于此、義統與國□□書於久三、且義統感田築思立鞍懸軍
勞、

□□^(札也)親父筑前入道依調略、其方□□城之儀、寔

親子同前之思貞□□無事申調候上者、可爲暫時之儀候、

永^(天正八年)不可有忘却候之条、何様追而可願^(大友)候、恐、謹言、
十月十日

柴田久三殿

義統 在判
大友義統
圓 齋 朱印

一一四 大友圓齋書狀(切)

○佐田文書
熊本県史料中世二

就按懸落去、早、示給候、祝著候、此方悅可有推察候、雖然親賢討
洩候事、不及是非候、落所等於有之者、別而可被勸忠儀事、肝要候、
每事爲可加下知、于今在村候、委細口上申候、恐、謹言、
(大友)
十月十一日

佐田彈正忠殿

圓 齋 (朱印)

一一五 大友義統書狀(切)

○佐田文書
熊本県史料中世二

前九鞍懸落去候、先以祝著候、雖然、親賢不討留候事、不及是非候、
定而落所可有之之條、彌可加下知覺悟不淺候、然者、田原近江入道
被申談、此節被勸馳走、親賢可討果才覺、願存候、委細猶、小田原
左近先申含候、恐、謹言、
(大友)
十月十一日

佐田彈正忠殿

義統 (花押)

一一六 大友義統感狀寫

○兄弟王親採集文書
增補訂正編年大友史料二五

上田權内所持、

去月十五、於來繩郡大利口、豐前目々惡黨懸合、一戰遂高名、父右

衛門戰死、忠儀無比類候、必取銀、一棧可買與候、
(大友)
十月十一日

上田松若殿

義統 書判

一一七 大友氏年老連署奉書

○大友家文書
大分県史料三二

數度如被仰出候、田原右馬頭依惡逆、誅伐之儀、堅被加、御下知候
之故、鞍懸、安岐兩城、令落去候之條、於于今者、彼堺無殘所、被
屬、御案渡、千秋萬歲候、然者其表之儀、無油斷、以御才覺一行之
調儀、可爲此節之由候、委細以實相坊家意法師、被達御入魂候之趣、
猶石寺可有演說候、不能一二候、恐、謹言、
(大友)
十月十四日

遺 輝

在判

止間(註)正忠殿

一〇八 田原親家書狀寫

○東國東
片山文書

今度當切寄衆中逆意之企、不_レ穩便_二之_一、一途之御下知、雖_レ深重候、改_二先非_一、懸望之間、被_レ成_二御赦免_一候、然者向後別而於_レ勵新忠者、一棧可_レ扶助_二事、不_レ可_レ有_二餘儀_一候、_レ謹言、

十月七日

(田原) 親家

片山内記兵衛殿

まいる

一〇九 田原親家書狀寫

○東國東
片山文書

今度當切寄衆中之儀、逆意雖_レ前代未聞之儀候、改_二先悲_一可_レ馳走_二之由、對_二若_一、懸望候間、失令_二分別_一候、彌碎_二手於_レ抽_二忠儀_一者、一棧可_レ加_二扶助_一候、倍守_二此旨_一、可_レ被_レ勵勸功_二事、干要候、恐_レ謹言、

十月七日

(田原) 親家

片山越後守殿

まいる

一一〇 田原親家書狀(紙切)

○東國東
田代文書

今度當切寄衆_二事、逆意_二不_レ隱便_一候之條、一途之御下知雖_レ深重候、改_二先非_一、懸望之間、失令_二分別_一候、彌於_レ抽_二忠儀_一者、一棧可_レ扶助_二候、恐_レ謹言、

十月七日

(田原) 親家(花押)

田代出雲守殿

一一一 田原親家安堵狀(紙切)

○東國東
森文書

(通書切封)

今度郷内衆事、逆意之企、不_レ隱便候、一途之御下知雖_レ深重候、悔先非_一、懸望候、被_レ成_二御有免候_一、因茲親家事、心底無別儀候、然上者、宗龜以來持留之地、聊不可_レ有相違候、以此旨可_レ抽新忠事干要候、恐_レ謹言、

十月七日

(田原) 親家(花押)

森伊賀入道殿

一二二 大友圓齋義書狀(紙切)

○佐田文書
熊本泉史料中世一

就安岐表一著示給候、被添心候之次第祝著候、雖然被懸于今依相支、田原親家以出張、可打崩之由申付候條、棲鉢爲可_レ開合、_レ謹言、爰元迄令越山候、堺目之儀、彌每事、堅固之御格護肝要候、殊今度、野仲未練之振舞、不及是非候條、先以銀差領中、一動之儀候、玖珠郡茂加下知候處、當郡衆_二前_一、同前有馳走、一兩所取崩、勝利之由候、每_レ馳走之趣感悦候、今程者、此方角江可_レ滞在之條、切_レ可_レ申談候、仍理一送給候、喜悅候、猶重_二可_レ申候_一、恐_レ謹言、

十月八日

(大友) 圓齋(朱印)

佐田彈正忠殿

於委細者、從義統可被加下知候條、不及詳候、恐、謹言、
月日及宛所被、
幸占氏氏也、

○差出書ヲ欠ク。本文ニヨリ圓費ト推定ス。

一〇三 大友義統感狀

○大友家
文書録

〔義統命親家、屢攻鞍懸、安岐塞皇、七日、鞍懸攻□□惠立
從之、十一日、乘夜古庄氏被官潛入鞍懸□伏尾放火、十三日、安岐
壘高槽口合戰田村統順自戰被創。〔有功〕僕從孫三郎亦負創。千部口
合戰。〔厚統笑。得首級、義統授感狀於田村統順。古庄氏、亦得圓
寶感書。其書月日等、
後年廢所失、

前十三、於安岐切寄高槽口防戰、依被碎手、自身被疵之由、粉骨
之次第、忠儀無比類候、殊儀從孫三郎負手之由、旁以感悅無極候、
彌可預御馳走事肝要候、必取鎧可賀申候、恐、謹言、
〔大友〕統 在判
九月十五日
〔大友〕統 在判
田村作進殿

一〇四 大友義統感狀

○大友家文書録
大分県史料三三

爲無足長、在陣、殊前十五、於高出表千部口、合戰之刻、別而粉骨
之由、感悅候、彌可勵忠貞事、肝要候、必追而可賀之候、恐、謹言、
〔大友〕統 在判
九月十八日
都甲三河入道殿

一〇五 大友義統感狀〔紙切〕

○字野文書
大分県史料一

〔端書切封〕
〔墨引〕

今度、最前以來軍勞之由候、就中此節、本庄中務少輔以同心辛勞之
段、令承知候、然者、前廿至鞍懸、通用之惡黨以夜待討果、分捕高
名、忠儀無此類候、必取鎧、一稜可賀之趣、猶鎮述可申候、恐、謹
言、
〔大友〕統 〔花押〕
九月廿二日
字野宮内丞殿

一〇六 大友義統書狀〔紙切〕

○字野文書
大分県史料一

〔端書切封〕
〔墨引〕

於鞍懸表、自最前遂在陣、軍勞之段、感入候、殊至前懸陣付之儀、
本庄中務少輔江申付候、乍辛勞、以同心可被遂其節事、肝要候、猶
鎮述可申候、恐、謹言、
〔大友〕統 〔花押〕
九月廿二日
字野宮内丞殿

一〇七 大友義統感狀〔紙切〕

○通見城
内文書

〔端書切封〕
〔墨引〕

以今度若林越後守類船、別而馳走粉骨之由、令承知感入候、必
以時分可賀之趣、委細猶鎮述可申候、恐、謹言、
〔大友〕統 〔花押〕
十月三日

不及申候、該懸之儀、近々絹邊江、可詰寄之由、加下知候間、落去不可有程候、懋老事茂、今程者、以滞在每事、義統可令熟談覺悟候條、節々預入魂、可得其意候、猶重々可申候、恐々謹言、
(天正八年)
九月三日

一 万田三河入道殿

九八 大友円齋書狀

○大友家文書録

度々如申候、當城以堅固之悟護、敵取懸候之御者、毎々被得勝利、被勵忠儀候事、其堺之覺感悅不斜候、然者及三箇年依龍城、萬端不如意之由承候、尤存候、義統折々雖加力候、數百人儀候之條、于今□城難事成之由、無餘儀存候、雖然今少之事候、□忠當忠令直尾候様、倍御馳走願入候、浦部表□□度可爲落去候、於其儀者、日田郡迄發足、不□□□候、將又檢料之事、先々少分差違之由候、□令入魂、猶以可申談之條、親類家中之□
(力)意才覺不及申候、當城立稱從□
(力)有疎意之趣、猶重疊可申□
(九月三日)

問注所刑部大輔殿

九九 鎮方書狀

○豊後高田河野常好文書

今度該懸可取願之由、各心懸之段、銘々遂言上候之處、至鎮方忝御書致頂戴候、然者、今夜之一行於相調者、其方拘尾藤名之事、爲被官給、可令扶持候、涯分可抽忠貞事、肝要候、恐々謹言

(天正八年) 九月五日

河野彈正忠殿

鎮方(花押)

一〇〇 田原親家書狀(紙切)

○東國東森文書

置大迄細書之趣、具加披見候、貞心之段、乍案中令祝着候、然者寄々被申談、此節可勵忠儀候、仍領地等之事、所柄望次第、都合五十貫分可扶助候、聊不可有偽候、殊溝藏・溝後藤左・深彈江書狀遣候、此外之衆江被申談、可願心底事專一候、從其元書狀到來次第、猶々可申違候、恐々謹言、
(天正八年) 九月七日

(田原) 家(花押)

森與三右衛門尉殿

一〇一 田原親家感狀(紙切)

○安東文書大分県史料一〇

(繪表切封) (墨引) 昨日六、豐前表忠徒等、爲該懸加勢、取出之候處、早々懸合、別而披竭粉骨、不移時刻被迫崩之通、軍忠無比類候、何様靜謐之觸、一棧可成其感候、恐々謹言、
(天正八年) 九月七日

(田原) 家(花押)

安東宮内丞殿

一〇二 大友圓齋感狀

○大友家文書録大分県史料三三

(天正八年) 九月十一夜、其方被官之者、鞍懸山伏之尾へ忍入、小屋少々焼崩由、粉骨之次第、感悅候、併進之尤心懸故候條、彌被申談、馳走肝要候、

〔堀切切封〕

九六

大友義統頭・手負注文一見狀

○大友家
文書錄

袖判
(大友義統)

今度從上表兵船十艘立下候之處、於安岐浦懸合防戰、依被碎手、即時退散之刻、向地迄付送、被盡軍旁、刺鎌與事、敵船一艘切取、自身分捕高名、忠儀無比類候、同親類被官銘、討捕頭、以看到承候之矣、加袖判候、然者先年防州合尾浦、殊於去年與州火振嶋茂、分捕被助粉骨候、及度、心懸之次第、誠感悅無極候、自他之竟不可過之候之矣、向後不可有忘却候、仍刀一腰左進之候、委細竹田津雅樂助申合候趣、猶志賀安房入道可申候、恐、謹言、

統(花押)

若林中務少輔殿

九五

志賀道輝(親副狀)(紙)

○東京若
林文書

〔包紙ウハ書〕

志賀安房入道

若林中務少輔殿

道輝

〔堀切切封〕

今度至安岐表、兵船雖立下候、無指行引上候砌、各向地迄付送、被盡軍旁、就中鎮興爲一分敵船一艘切取、數量計果類進上、誠高名粉骨之次第、御感深重候、此等之趣、御書并御腰物一腰被差遣候、旁御面目之至珍重候、委細至竹田津雅樂助、被仰合候、恐、謹言、

八月廿六日

道輝(花押)

若林中務少輔殿

天正八年八月廿日、從上表兵船立下、於安岐切寄表懸合防戰、依被碎手、退散之刻、向地室富江迄付送、諸警固船備津之砌、同廿二若林中務少輔敵船一艘切取、鎮興自身分捕高名、其外親類被官討捕頭着到、銘、加被見訖、

頭一 野田弥右衛門

若林中務少輔討之、

頭一 小田原丹後

若林因幡守討之、

頭一

若林九郎兵衛討之、

頭一

幸野勘介討之、

頭一

丸尾新五兵衛討之、

被疵衆

合澤市介討之、

首藤源介

三郎右衛門

五郎兵衛

太郎左衛門

已上、

九七

大友圓齋(義書狀)(紙)

○忠良文書
大分県史料八

義統陣所爲見舞、此一兩日以前、令越山候處、早示給候、祝着候、於其表長、在陣、御辛勞難察存候、今少之儀候條、別而堅固之才覺、

八九

田原親家感狀(紙切)

○東同東
萱嶋文書

(包紙所付ハ書)
「萱嶋新五兵衛討殿」

親家

(通義切付)
「墨引」

前十五切寄惡徒等、取出候之處、別而碎手則追議、誠以軍忠之次第、感入候、何様靜謐之刻、一様可賀之候、恐々謹言、

八月廿日

親家(花押)

萱嶋新五兵衛尉殿

九〇

大友義統感狀(紙切)

○大津留連文書
大分県史料二五

去十三、於鞍懸表絹懸口、防戰之刻被疵、粉骨之由感入候、彌馳走肝要候、恐々謹言、

(天正八年)
八月廿一日

(大友)
義統(花押)

大津留大膳亮殿

九一

田原親實恩賞宛行狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

就。今度不慮之成立、至鞍懸、令登城之段、彼一城事、親武以父子談合、城被執付置、此節一家再興之儀、偏連々堅慮之格護故候、殊至

整州差上候之處、長々令在國、加勢之誓固舟被申調、如此遂本意候事、拾云、恰云、忠意之趣、無比類候、仍爲加恩、永松給田原之内

拾町地、山各郷之内平三町地、令裁許畢、全領知肝要之狀、如件、

天正八年八月廿三日

(田原)
親實(在判)

田原左近大夫殿

九二

田原親實書狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

(如法寺)(如法寺)
當城之儀、耕雲、親武以才覺、最前被執付、剩額等如□取調置候故、今度家來雖錯亂候、聊無氣遣、令龍□候、無雙之忠儀、異他候、殊

藝州加勢之儀、到舞□景、今度可差上之由、申付候處、不單口能、可有□□□通大慶候、然者、二字之儀申組候、彌一家□末

共二、別而可被添御心事、賴存候、恐々謹言、

(天正八年)
八月廿一日

(田原)
親實(在判)

田原武部入道殿

左近大夫殿

田原武部入道殿

九三

田原親實恩賞宛行狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

就今度不慮之成立、至鞍懸、令登城、藝筑以加勢、遂本意候段、紹閑依連々堅慮之覺悟、彼一城被執付黃候故、此節一家再興之儀、無比類候、拾云、恰云、御辛勞之續、何様生中不可有忘却候、爲加恩、俛田五拾貫分事、令裁許候、全可有預知候、柳不可有相違之狀、如件、

天正八年八月廿三日

(田原)
親實(在判)

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

田原式部入道殿

八三 大友円齋感狀

○大友家
文書錄

於其表長、在陣、殊近日者至安岐切寄、指勢依詰寄、夜白軍勞之由承候、心懸之次第感悅候、就中從最前馳走之条、別而御辛勞察存候、彌可被勵忠意事、可爲祝著候、猶重、可申候、恐々謹言、

(天正八年)
七月廿日

(統類)
田村作進殿

(大友義隆)
國齋 朱印

八四 大友義統感狀

○大友家
文書錄

(天正八年)
八月五日、親貫黨兵出疊、襲親家陣、津崎兵庫助力戰○十三日、鞍懸・攻戰網懸口攻戰、大津留大膳亮被創、有功○義統、使厚彈正忠、

十面口夜討合戰、一萬、
(田村作進殿)
親家、

名統英○。十五日、親貫黨又出疊、津崎兵庫助擊之、從士被創、親家同回作感狀、義統、授書於厚氏。大津留氏、授大津留書、在此、

前十四、於安岐郡切寄、一戰之刻、依碎手被疵之山、粉骨之次第、感入候、彌可勵忠走事簡要候、必取鎮、一段可賀申候、恐々謹言、

(天正八年)
八月三日

(大友)
義統 在判

一万田左吉入道殿

八五 田原親家感狀(紙切)

○東国東
輝司文書

(彌義切封)
(墨引)

去五切寄惡黨取出候刻、最前懸合、別而勵事勞、剩以手火矢、敵一人被仕付之通、從津崎善兵衛尉所申越候、案中候、何様靜謐之刻、

一様可顯其志候、弥可抽忠儀事肝要候、恐々謹言、

(天正八年)
八月七日

郷司大膳亮殿

八六 田原親家感狀

○大友家
文書錄

去五、切寄惡黨取出候處、最前懸合、別而被竭粉骨之通、寔心懸之次第案中候、弥此節可被勵忠貞事、可爲祝著候、何様靜謐之刻、一様可顯其志候、恐々謹言、

(天正八年)
八月七日

津崎兵庫助殿

(田原)
親家 在判

八七 田原親家感狀寫

○東国東
津崎文書

去五切寄惡黨取出候刻、寄之衆被申談、最前懸合、別而被竭軍勞之趣、案中候、其表之儀近、可屬勝利之上者、何様銘、可成其感候之間、彌可被勵忠儀事肝要候、恐々謹言、

(天正八年)
八月七日

津崎善兵衛尉殿

親家(花押影)

八八 田原親家感狀

○大友家
文書錄

(力)
昨日十五、切寄惡黨取出候之處、最前懸合、別、
疵之趣、忠儀無比類候、何様靜、
(田原)
親家 在判

津崎兵庫(親家)
助殿

(天正八年)
六月一日

佐田彈正忠殿

(大友) 統 (花押)

七七 大友義統感狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

今度於鞍懸表合戰之刻、別而軍勢、就中以刀打、被勳粉骨之由候、感悅候、獨馳走、可爲喜悅候、必取鎮、一様可賀之候、恐々謹言、

(天正八年)
六月十三日

(大友) 義 統 在判

志津利治部少輔殿

七八 田原親家感狀(紙切)

○東国東
森文書

(補遺切封)
(墨引)

昨夜於里目、安岐惡黨取出候之處、早速懸付被賜粉骨之通、神妙之至候、必取鎮、一様可成其感候矣、弥可被勳勲功事肝要候、恐々謹言、

(天正八年)
六月十九日

(田原) 親 家 (花押)

岡部孫六殿

七九 田原紹忍親書狀(紙切)

○最後高田
河野常好文書

就該懸表行之儀、先日被抽粉骨之由、案中候、重々忍等之儀、於馳走者、一様可請御[]懸專一候、猶用口上候、恐々謹言、

(天正八年)
六月廿二日

(田原) 紹 忍 (花押)

河野彈正忠殿

八〇 大友義統感狀

○河野正文書
大分県文化財調査報告書三七

今度田原右馬頭、以逆心、鞍懸桶龍候處、其方事、從最前、古庄進

允以同心、度々勳軍勢之由、感入候、必取鎮、可賀之候、恐々謹言、

(天正八年)
六月廿四日

(大友) 義 統 (花押)

渡邊加賀守殿

八一 田原親家感狀(紙切)

○安東文書
大分県史料一〇

節々鞍懸惡黨等懸合、被勳軍勢候處、誠神妙之至候、靜謐之刻、何様可賀之候、仍塩硝十斤・玉百五十、遣之候、猶託摩佐渡入道可申候、恐々謹言、

(天正八年)
七月一日

(田原) 親 家 (花押)

安東宮内丞殿

有安帶刀允殿

丸山外記允殿

其外郷内一揆中

八二 田原親家書狀(紙切)

○田北嘉明文書
大分県史料一二

雄渡半禮龍城以來、別而御辛勞之續、雖非忘却候、于今一様不願志候事、本意之外候、必關地次第、拾五貫足可令合力候、恐々謹言、

(田原) 親 家 (花押)
七月十日

櫛來源内允殿

○年来詳ナルモ花押類型ニヨリ、ココニ収ム。

小野尾次郎三郎とのへ

七一 大友義統感狀(紙切)

○速見書
田文書

(通表切封)
(墨引)

今度田原右馬頭依^{ヨルヒル}逆心、その堀さくらん候處、無別候覺悟、こ
とに就^{ヨルヒル}鞍懸近方、夜白無^{ヨルヒル}油斷軍勢の由、感入候、必追而一段
可賀^{ヨルヒル}之もの也、かしく、
(天正八年)
卯月十日

よし統(花押)

長田鶴若とのへ

七二 大友義統書狀(紙切)

○西國東
安東文書

(通表切封)
(墨引)

今度其表亂念之刻、波多藤次兵衛尉得^{ヨルヒル}指南、別而馳走のよし、感
入候、彌堀木丸山一類之衆申合、無^{ヨルヒル}油斷心かけ專一候、猶統秀中
へく候、かしく、
(天正八年)
五月四日

よし統(花押)

安東宮内とのへ

安東外記とのへ

七三 田原親家感狀(紙切)

○安東文書
人分県史料一〇

去十二、西來切寄討崩候之刻、分捕高名之段、感入候、何様靜謐之
候、一様可賀之之間、彌可^{ヨルヒル}勦軍忠事、肝要候、恐^{ヨルヒル}謹言、
(天正八年)
五月十四日

親家(花押)

堀木宮内丞殿

七四 大友義統感狀

○大友家文書
大分県史料三三

去十二、佐井木切寄打崩候之刻、田染給人中、鞍懸爲押勢、被勦粉
骨之由候、軍勢之段感入候、彌申談、可抽貞心事肝要候、必以時分
可賀^{ヨルヒル}之候、恐^{ヨルヒル}謹言、
(天正八年)
五月十四日

(大友)
義統 在判

銀量 久保舍人允殿

七五 田原親家恩賞宛行狀(紙切)

○津崎文書
大分県史料一〇

今度親買金逆意、海陸以行、動自他國、既當家及破滅之處、一味中
中談、後來郷郷引割令歸陳、剩同日以猛勢、鹿越表江雖相働、到國
東打人候之條、令敗北屬御勝利候、別而忠候之至、不異他候、爲其
價、去月佐渡人進先給所^{ヨルヒル}、在之、不殘段歩、并保見役職之事、預遣
之候、下地云、土貢云、守此旨、全知行肝要之狀、如件、
(田原)
親家(花押)
天正八年五月廿六日

津崎大和入道殿

七六 大友義統書狀(紙切)

○佐田文書
熊本県史料中世二

度、如申候、至鞍懸表、諸軍可差寄之段、加下知候、然者郡衆之事、
可被申談、此節依利陳、可被勦忠貞事、肝要候、自然未斷之人於有
之者、從衆中茂以交名承、可得其意候、委細續、田原近江入道可申
候、恐^{ヨルヒル}謹言、
(宇佐部)

六五 大友よし統感狀案(紙切) ○宇佐到
津文書

今度田原右馬頭依^(親實)逆心、其堺令^(親實)錯亂候處、無別儀覺悟、殊就^(西條)該懸近方、夜白無^(ヨルヒル)油斷よし、軍勞感入候、必追而一段可^(親實)賀し之もの也、

(天正八年) 卯月十日

大河内右京とのへ

「ふんこはやミノくん」

よし統(花押)

六六 大友義統感狀(紙切) ○宇佐佐
田文書

今度田原右馬頭就^(親實)逆心、其堺及錯亂候處、無別儀覺悟、殊就^(西條)該懸近方付而、夜白無^(ヨルヒル)油斷軍勞之由感入候、必追而一段可^(親實)賀申候、恐^(親實)謹言、

(天正八年) 卯月十日

○尾被損

義統(花押)

六七 大友義統感狀(紙切) ○遠見長野
旗雄文書

今度依^(右馬頭)田原^(ヨルヒル)逆心、其堺令^(親實)錯亂候處、無二之覺悟、殊就^(西條)該懸近方、夜白無^(ヨルヒル)油斷、軍勞之次第感入候、彌可^(親實)勵忠儀事肝要候、必追而可^(親實)賀之候、恐^(親實)謹言、

(天正八年) 卯月十日

長野中務入道殿

義統(花押)

六八 大友義統感狀(紙切) ○遠見長野
末明文書

(包紙折封のハ書)

義統

今度田原右馬頭依^(親實)逆心、其堺令^(親實)錯亂候處、無二之覺悟、殊就^(西條)該懸近方、夜白無^(ヨルヒル)油斷軍勞之次第感入候、彌可^(親實)勵忠儀事肝要候、必追而一段可^(親實)賀之候、恐^(親實)謹言、

(天正八年) 卯月十日

長野因幡守殿

義統(花押)

六九 大友義統感狀(紙切) ○遠見
玉文書

(端紙切封)

今度田原右馬頭依^(親實)逆心、其堺錯亂候處、無別儀覺悟、殊就^(西條)該懸近方、夜白ゆたんなく軍勞之よし感入候、必追而一段可^(親實)賀之もの也、かしく、

(天正八年) 卯月十日

松ヶ尾新次郎とのへ

よし統(花押)

七〇 大友義統感狀 ○遠見小
野尾文書

今度田原右馬頭依^(親實)逆心、其堺錯亂候處、無別儀覺悟、殊就^(西條)該懸近方、夜白無^(ヨルヒル)油斷軍勞のよし感入候、必追而一段可^(親實)賀之もの也、かしく、

(天正八年) 卯月十日

よし統(花押)

差遣、右之惡黨可討果之段、加下知候、雖申志候、當城信以堅固之覺悟、至親家可勵軍忠事、肝要候、必取鎮可成其感候、恐々謹言、
(天正八年)
閏三月廿六日

津崎大和入道殿

義統(花押)

六二 大友義統書狀(紙切)

○東國東
竹田津文書

〔尾紙封ワハ書〕
〔竹田津準入道殿〕
(應永初年)

義統

就今度其表亂念之儀、統運別而馳走之趣、感悅無極候、然者其方事、自最前以同心、每事辛勞之段、令承知候、彌被申談、至統運被添心、可被抽貞心事、可爲喜悅候、必取鎮可賀申候、恐々謹言、
(天正八年)
閏三月廿八日

義統(花押)

竹田津準入道殿

六三 大友圓齋(義)書狀(紙切)

○西國東
田原文書

〔北〕

猶も紹鑑討果候者、以其親、南部衆之事、自被表、直く安岐表へ、可差寄之由、兼而儀定候條、此節者、不可有緩候、此間諸軍其表へ運陳の儀も、彼者さハリ故、不成立候、其子細者、親家として、存知有ましく候、紹鑑一人討果候者、諸方之覺、悉可相替候間、爰元才覺聊非、油斷候、濃々之儀、治石入まで、追而書二申候、可被得其意候矣、

一昨日兩書狀、昨日午廻着府候、則退事雖可申候、用物從三白杵、依召趣、令遅候、其元入用之儀候哉、任承銀子參買目、調進之候、寔報事二候、不限彼儀、何篇用所等、不被心責承、可得其意候、然者田北紹鑑成敗入組之趣、此四五日前、帶刀宮内承へ申含差返候之處、此書面に無其沙汰候、如何二候哉、然者紹鑑事、熊半禮と申山ほとりへ、俄取あかり、か、ミ居候て、言語道斷淺間敷候條、平生之口ニはたと替たる由、只今も到來候、南郡衆之事、一昨日二扶間村ヲ打立、昨日重々差寄候由候間、今明日中可落去候歟、字佐郡其外羣心之族、紹鑑謀伐付而、色立候哉、案中候、紹鑑可討果事者、指掌候之條、吉左右不圖可申遣候、其間之儀事、當城用所第一候之條、夜白不可有油斷之儀候、猶本彈正・立川主水申含候、恐々謹言、
(天正八年)
卯月三日

田原新九郎殿

圓齋(朱印)

六四 大友義統感狀(切紙)

○大分軌足
市太文書

今度至浦部表、在陣之儀申付候處、從最前馳走、殊度々勳之刻、別而軍勞之次第、感入候、弥可勵粉骨事、肝要候、必取鎮一稔可賀之候、
(大友)

卯月九日

義統(花押)

○充所ヲ欠ク、頼田憲史軌足文書ニハ「帆足九郎殿」トアリ

及是非候、宮德幼稚之間、領地被官以下令裁判、^(隱)陳旅之奉公不可有緩之段、宗雲江以狀中候、心中之儀候間、每事可被添御心事、肝要候、爲存知候、恐、謹言、

(天正八年)
閏三月十三日

田原新九郎殿

(大友) 統 (花押)

五六 田原親家感狀(紙切) ○安東文書
大分県史料一〇

昨日十三、鞍懸表防戰之刻、被疵之由、軍忠狀到來、披見感入候、今度最前以來之忠儀、非忘却候之間、必於向後可賀候、恐、謹言、

(天正八年)
閏三月十四日

安東宮内允殿

(田原) 家 (花押)

五七 田原紹忍親感狀(紙切) ○安東文書
大分県史料一〇

(端裏切封)
(墨引)

其表勲之樣狀、預注進候、先々鞍懸矢入勝利之趣、尤珍重候、殊宮内丞被疵之由、粉骨之次第、無比頗候、然者到此方茂、名代進候、是又被疵候、彼是忠意之至候、必一段可賀之候、恐、謹言、

(天正八年)
壬三月十四日

安藤大膳亮殿

(田原親實) 紹忍 (花押)

五八 田原親實感狀(紙切) ○東國東
郷司文書

(端裏切封)
(墨引)

昨日十三於龍屋之口、敵取懸之刻、終手被疵之段、粉骨之次第無比

類候、何様追而賀可申候、恐、謹言、
(田原) 實 (花押)
(天正八年)
壬三月十四日
如法寺淡路房

五九 田原親家書狀(紙切) ○東國東
森文書

其表之儀、被犯不慮之敵、案衆中驅之儀、不單是非候、併其方事、内々無相違之由候、一段喜悅之至候、宗龜已來無等閑被召仕候由候之条、於今今茂無別儀候者、何様不可有疎意候、以此旨被顯懸忠候者、別而可成其志候、恐、謹言、

(天正八年)
壬三月廿一日

森與三右衛門尉殿

(田原) 親家 (花押)

六〇 大友義統感狀 文書錄 ○大友家

親家登城已來、別而馳走之由、其間候、乍案中悅入候、殊安岐郷之者共、一雅意無止事之条、諸勢差違、可耐果之段、加下知候、雖、

申迄候、當城倍以堅固^(之)覺悟、至親家、可勵軍忠事肝要候、必取靜、

可[□][□][□]、恐、謹言、

(天正八年)
□月十六日

(津崎) 備前入道殿

(大友) 義統 在判

六一 大友義統感狀(紙切) ○東國東
津崎文書

度々如申候、親家登城以來、別而馳走深重之由、其間候、乍案中悅入候、殊安岐郷之者共、彌一雅意之企、無止事之條、諸勢

五一 田原親家感狀(紙切)

○東國東
董嶋文書

(包紙折付ハ書)
「董嶋美濃入道殿」

親家

(通義切付)
「(墨引)」

今度當郷宗徒之諸士構未練、安岐郷惡黨令一致、錯亂之林、不及是非候、然處其方事、從最前、別而以貞心之覺悟、於所被勸軍勢、候次第、感悅無極候、因茲從公儀茂被成下、御書候之條、彌可被抽懇忠事、專一候、何様靜謐之刻、無忘却一棧可、願其志候、爲御存知候、恐謹言、

(別筆)

「天正八」
閏三月四日

親家(花押)

董嶋美濃入道殿

五二 大友圓齋義書狀

○佐田文書
熊本學史料中世一

(包紙ウハ書)
「佐田彈正忠道殿」

(大友)
圓齋

就國東表之義、先日者、早敷示給候、被添心候次第、案中候、先書如申候、爰許出勢之儀、愚老以出府、義統申談候之條、來十日、十一日之間、可爲著陳候、連承候首尾、此節候條、別而可被勸忠儀事、肝要候、年寄中、南郡衆馳走、不可有餘儀之出候條、被得其意、無油斷、心懸專一候、仍爲首信、猪股ニ送給候、懇志之趣、祝著候、則賞貶此事候、猶重々可申候、恐謹言、

(天正八年)
壬三月五日

(大友義統)
圓齋(朱印)

佐田彈正忠道殿

五三 田原紹忍親書狀(紙切)

○字佐
瀧貞文書

(通義切付)
「(墨引)」

就今度郡内動亂、諸人覺悟雖無實所候、其方事依無別儀、最前已來忠良帶刀兵衛尉申談、勸等之刻、馳走之由神妙候、然上者、早屋敷可下居事肝要候、自然風說之儀候共、聊不可有氣遣候、仍中詰一折到來、祝著候、恐謹言、

(天正八年)
閏三月十日

紹忍(花押)

衛藤弥三郎殿

五四 大友圓齋義・同義統連署知行預ケ狀

義統

○大友家文書
大分學史料三三

連無緩奉公、就中近年於所辛勞、感悅無極候、彌向後可被勸貞心事、肝要候、仍來魏郷之内、帶刀右京入道一跡分之事、預置候、可有知行候、恐謹言、

(天正八年)
閏三月十一日

(大友)
義統
(大友)
圓齋 朱印

(礼徳)
柴田治右衛門入道殿

五五 大友義統書狀(紙切)

○田原連三郎文書
大分學史料一〇

帶刀安藝入道事、去年中至高田要害、馳在城、初春以來者、屋山岳江令登城、統連別而申談由候、然處孫宮德母、對宗黨不孝之由、不

(天正八年)
二月廿三日

安東宮内亮殿

(田原) 家 (花押)
親家

(親類)
田村作進殿

四七 大友圓齋・大友義統連署書狀

○古弘親整文書
增補訂正編年大友史料二五

就安岐郷之者手替、國東表無實所候歟、親家事至雄渡幸、禮登城之由候、迄無心元存候、惡黨行、雖不可有差儀候、統整表堅固被相搦肝要候、爰許勢衆、急度可爲着陣之儀、其間之儀、雄渡幸禮江、別而可被添御心事、可爲殿着候、聊不可有油斷之儀候、恐々謹言、
(天正八年)
三月廿四日

(大友) 義統 (花押)
(大友義統) (口イマ字)
圓齋 (朱印)

吉弘太郎殿

四八 大友圓齋・大友義統連署書狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

於其表在陣、辛勞察存候、然者、安岐郷之者就手替、親家事至雄渡幸、禮登城之由、到來候之儀、當陣衆之儀、木付迄弄寄、木付新介被申談、右郷於差柄者、可爲國東表之加勢候、俄之龍城、氣仕候間、彼狀到來候者、即時陳易肝要候、被得其意、聊不可有御油斷之儀候、恐々謹言、
(天正八年)
三月廿四日

(大友) 義統
(大友義統) 在判
圓齋 朱印

四九 田原親家感狀

○大友家
文書錄

先是、親家登雄度幸禮城、指麾諸兵、圓齋・義統授連署書於田村統順、使其同隊士赴木付、議軍事于木付新介、今度兩郷宗徒之諸士構未練、重々逆亂之勢、不及是非候、就夫到赤松之村、切寄取誘、惡黨構範之衆、可討果之通、加下知候之處、最前懸合頭一分捕之次第、忠貞無比類候、何様一様可顯其志之間、弥可被勵軍勞事肝要候、恐々謹言、
(天正八年)
三月廿四日

(親類)
津崎兵庫助殿

(田原) 家 在判

五〇 田原親家感狀

(紙切)
○東國東
雲鶴文書

(包紙折封ハ書)
一 雲鶴兵庫助殿

親家

今度兩郷宗徒之者共、構未練、惡黨等令同意、到赤松之村、切寄取誘構範之儀、可討果之通、加下知候之處、則落去之刻、預壹分捕之次第、忠貞無比類候、何様一様可顯其志之間、彌可被抽軍勞事、可爲殿着候、恐々謹言、
(天正八年頃方)
三月廿五日

親家 (花押)

荳嶋兵庫助殿

四二 田原親家本領安堵狀(紙切)

○東国東
壹嶋文書

(包紙折付ウハ書)
「壹嶋美濃守殿」

親家

(端本切付)
「(墨引)」

今般登城供奉之儀、一段神妙之至候、爲忠實其方本領不足分之儀、
今歸附一候、彌守此旨、忠儀頼入候、恐々謹言、

(墨書)

「天正八」
三月十九日

親家(花押)

壹嶋美濃守殿

四三 宗温・宗柏等五名連署奉書(紙切)

○東国東
壹嶋文書

(包紙折付ウハ書)
「壹嶋美濃守殿」

(同裏)

(端本切付)
「(墨引)」

本領之儀、此節被成還補之由、被仰出候、尤珍重候、彌
可被抽「粉骨」之儀、干要候、恐々謹言、

(天正八年)

三月十九日

淨仙(花押)

宏恒(花押)

秀兼(花押)

宗柏(花押)

宗温(花押)

壹嶋美濃守殿

四四 田原親家書狀

○内田文書
大分県史料一〇

從鞍懸雖計策候、寄合中最前以來、無別心、以首尾無同意之由、乍
案中頼數候、至御座所則遂注進候之條、直可被成、御感候、乍勿論、
於親家一様可令賀候之事、不可有餘儀候之間、彌馳走頼入候、恐々
謹言、

(天正八年)
三月廿三日

(田原)
親家(花押)

内田孫四郎殿

内田彈正忠殿

四五 田原親家書狀

○河野正二文書
大分県文化財調査報告書三七

從鞍懸雖計策候、寄合中最前以來、以無別心、首尾無同意之由、乍
案中頼數候、至御座所、則遂注進候之間、直可被、御感候、乍勿論、
於親家一様可令賀候之事、不可有餘儀候、彌馳走頼入候、恐々謹言、

(天正八年)
三月廿三日

(田原)
親家(花押)

大島但馬守殿

大島長左衛門尉殿

大島宮内丞殿

四六 田原親家書狀(紙切)

○安東文書
大分県史料一〇

從鞍懸雖計策候、寄合中最前以來、以無別心、首尾一通到來候、乍
案中頼數候、至御座所、則遂注進候之條、直可被成、御感候、乍勿
論、於親家一様可令賀候、彌馳走頼入候、恐々謹言、

(大正八年)
三月十五日

鹿子木三河入道殿

御宿所

(志賀義正)
遺輝(花押)

三九 大友圓齋書狀(紙切)

○田原達二郎文書
大分県史料一〇

如存知、古庄(マ)允事、義統近邊江舞令堪忍候、養父跡目依連續在宅候、鞍懸近方付而、夜白無油斷之由候、弟大學助事、耽愛許江召仕候條、旁以進允事、別而可被添御心事肝要候、可被得其意候、恐、謹言、

(大正八年)
三月十六日

(大友義隆)
圓齋(朱印)

田原新九郎殿

四〇 田原親家感狀(紙切)

○安東文書
大分県史料一〇

(彌義切封)
(墨引)

去八日鞍懸敵相格之刻、懸合手火矢仕、粉骨之次第其間候、神妙候、一城落去之由、可成其感候、彌辛勞肝要候、恐、謹言、
(大正八年)
三月十七日

(田原親家)(花押)

安東宮内丞殿

丸山外記尤殿

四一 大友義統書狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

(通旨部) 於辻開村、在陣之由候、辛勞察存候、然者至鞍懸表、可被打出時分柄之儀、親家(田原)以內談、同日越山肝要候、彌無油斷熟談、專一候、雖然、先以都甲境目迄、被差寄、可被申談候哉、殊以條々申旨候、被

得其意、每事堅固之才覺、可爲祝着候、猶兼田右京入道・田北治部少輔、可申候、恐、謹言、
(大正八年)
三月十七日

(大友義隆)

(大友義統) 在判

蕭藤紀伊入道殿

林左京亮殿

一万田民部少輔殿

上野兵部少輔殿

實相寺

坪井兵部少輔殿

野上彈正忠殿

蕭藤市正殿

臼杵刑部少輔殿

上野準人佐殿

□村左近大夫殿

□留左馬進殿

田尻太郎殿

轉ノ原八郎殿

田吹左馬助殿

上野掃部助殿

宗像權右衛門入道殿

寒田藤記兵衛尉殿

田村作進殿

右上包田村作進殿
蕭藤紀伊入道殿

義統

申合、郷内早、静謐之調儀肝要候、殊在郷已來、内外別而心懸之由、
乍一案中、令、悦喜候、仍小袖壹遺、之候、聊顯志計候、猶柴田治右
衛門入道迄申遣候、恐、謹言、
(天正八年)

三月三日

津崎大和入道殿

聞 齋(朱印)

三五 大友義統感狀

○大友家文書錄
大分県史料三三

(宇佐馬) 打廻等無油斷、被逐馳走之由、感人候、被懸于今相支候之
條、彌万角衆申談、可勵粉骨之事、簡要候、猶古庄進允可申候、
恐、謹言、
(天正八年)

三月五日

久保舍人佐殿

(大友) 統 在判
義

三六 奈多鎭基恩賞充行狀

○東国軍
松原文書

今度田原親貫被奉封御國家、逆意之企、不及是非候、然者鎭
基事、以、順儀之覺悟、此堺無事罷成、千秋萬歲候、各別而辛勞故、
當切寄差堪、満足此時候、雖、爲少分、於龜川一所、預進之候、
坪付別之、可有知行、彌泰公干要候、恐、謹言、
(奈多) 鎭 基(花押)
(天正八年)

三月五日

松原甚介殿

三七 大友義統書狀(紙切)

○鹿子木文書
熊本県史料中世一

(包紙ウハ書) (讀真)
鹿子木三河入道殿

(讀書切封)
(墨引)

義 統

近日其元立柄無到來之候、染筆候、坪目無替儀候哉、示給度候、豐
筑表、今程珍子細無之之中候間、專一候、隨而、田原右馬頭逆心顯
然之條、爲可加誅伐、前廿一勢差立候處、不待付人數退散、案中存
候、然者、至鞍懸要害堀籠候之條、不拔足様、堅加下知候、遠聞難
有正儀之條、彼是爲可申、以西伯等申候、其表之儀、彌各被申談、
無油斷御才覺簡要候、委細志賀安房入道、可申候、恐、謹言、
(天正八年)

三月五日

鹿子木三河入道殿

(大友) 統(花押)
義

三八 志賀道輝守書狀(紙切)

○鹿子木文書
熊本県史料中世一

(包紙ウハ書)

鹿子木三河入道殿

御宿所

道 輝

(讀書切封)
(墨引)

近日者、其表御到來依無之、以御書被仰出候、珍重候、然者、田
原右馬頭惡逆顯然之條、被加御誅伐候、結句、不待付御人數退散候、
誠天道之意所、案中存候、親貫事、僅之以人數、要害江堀籠候之條、
不拔足様、被成、御下知候之間、落去不可移時日候、猶西伯寺江被
仰合候、恐、謹言、

二九 田原紹忍親感狀(紙切) ○字佐元重信

(順義切封)
(墨引)

如書狀、同名親實事、依逆意、被加御誅伐候、珍重候、連貞心之趣、能令承知候、弥以御馳走頼入候、恐々謹言、

(天正八年)二月廿三日

(田原)紹忍(花押)

元重隠岐守殿

三〇 圓齋大友書狀(紙切) ○東国東

(田原野村ハ吉)書嶋美濃入道殿

(順義切封)
(墨引)

圓齋

今度親家渡海之儀、從前馳走故、令首尾之事、寔忠儀之次第、感心候、殊人郷以來、至柴田治右衛門入道、別而入魂之由、申越候、乍案中喜悅候、親家若輩之儀候條、彌每事無異儀樣、被添心肝要候、猶治右衛門入道迄申遣候、恐々謹言、

(天正八年)二月廿八日

圓齋(朱印)

菅嶋美濃入道殿

三一 田齋大友書狀 ○東国東

(田原)田齋義旗津崎文書

今度親家渡海之儀、從前馳走故、令首尾候事、寔忠儀之次第感心候、殊人郷已來、對柴田治右衛門入道、別而入魂之由申越候、乍案中喜悅候、親家若輩之儀候條、彌每事無異儀樣、被添心肝要候、猶治右衛門入道迄申遣候、恐々謹言、

(天正八年)二月廿八日

圓齋(朱印)

津崎大和人道殿

三二 圓齋大友・義統連署書狀(紙切) ○東国東

(田原)書嶋美濃守殿

(順義切封)
(墨引)

義統

今度親實逆心之企、不_レ及言語候之處、家中一致申組、以順路之覺悟忠儀之心、懇感入候、親家在郷之上者、彌馳走肝要候、委細至親家申聞候之趣、猶柴田治右衛門入道可_レ申候、恐々謹言、

(天正八年)三月一日

義統(花押)

圓齋(朱印)

菅嶋美濃守殿

三三 田原親實知行宛行狀 ○後藤敏安文書

大分県史料一〇

就今度駿懸龍城、忠儀之次第、神妙候、仍五拾貫文分、坪付之前、加抽判充行候、縱雖有先判、面_レ事、無足之屈誠感心候之條、聊可有相違候、以此旨、彌忠懇肝要候、恐々謹言、

(天正八年)三月二日

親實(花押)

如法守右近允殿

三四 圓齋大友感狀(紙切) ○東国東

(田原)書嶋美濃守殿

就今度余龜一家再興之儀、從前馳走之段、令首尾親家入郷候事、對國家被勸忠貞候次第、寔感入候、家中老若彌一致

二五 田原親家書狀

○津崎
文書

御宿所

猶々津太入事、柏垣江以同意、別而被入性之段、賴敷存候
各内意之續、先日以道意言上之刻、預一通候、様鉢具令承知候、先
便返書可申之處御而殿様御内性之趣、以御相判、細碎被仰達之條、
爲此方、不及口能、于今相過候、然者入部之儀、無油斷調達最中候、
彌一味中被申談、御才覺頼入候、於委細者、從意可被申越候、恐、
謹言、
(天正八年)
二月十八日

(田原親家)
家(花押)

蓋大少(黃嶋大藏少輔)カ

津太入(津崎大和人道)まいる

訖佐人(訖摩佐渡人道)

二六 宗柏・宏恒連署書狀(紙)

○東国東
蓋嶋文書

今度一儀申談衆中之事、盡未來際可申承候、殊御本訴之儀、先御
代已來、雖被_レ燐候、無御案堵_二之趣、寄_レ申唐候、件之一儀、
於成就者、何程懸_二身上仁_一御取合、(以下折返)一不可存別儀候、以此
旨一倍可申談候、恐、謹言、
(天正八年)
二月十九日

(天正八年)

宗柏(花押)
宏恒(花押)

蓋嶋大藏少輔

訖佐渡入道

宗伯

蓋嶋美濃守殿

二七 大友義統書狀

○佐田
文書

田原右馬頭惡達之企、前代未聞之條、誅伐之加下知候處、親實家中
之人、以順路之覺悟、願忠意候、然者、親實事、至該懸種懸之由候
之間、不拔足樣可討果才覺無油斷候、此節那衆中被申談、可被勸忠
貞事、從嚴前入魂之可爲首尾候、猶重、可申候、恐、謹言、
(天正八年)
二月廿一日

(大友)
義統(花押)

佐田彈正忠殿

二八 大友円齋書狀

○佐田
文書

(急紙)
佐田彈正

圓齋

兼日粗申候調略之儀、令首尾、親實家中、此方江申組候者共、願順
路之心成候條、満足此乎候、定而生般懸可煩被候條、於于今者、難
可爲落去候、万一親實、如法寺以下、差違候者、至佐野表被懸付、
此節可被勸忠儀事肝要候、然者宗龜、筋目爲再與、家來之者申合、
懸望之條、家督之儀、至親家申與、一兩日中可爲入部之條、其罪衆
被申達、每事堅固之才覺專一候、遠方之處、早、數預注進候、御心
懸之次第案、中候、猶重、自是可申候、恐、謹言、
(天正八年)
二月廿一日

圓齋(朱印)

佐田彈正忠殿

二〇

〔大友家文書録〕 田原親實、出浦部城、守鞍懸懸、親家、入安岐

郷、津崎備前入道、津崎兵庫助等、從之、

二一 大友圓齋・大友義統連署書狀

○香下要文書
增補訂正編年大友史料二四

今度田原右馬頭逆心之企、前代未聞之義、絶言語候、然處家中之者、以順路之覺悟、一致申組、親實並退如法事一類之惡黨、家督之儀、至親家申旨肝要之由、懸望之候、令領掌、入部之義申付候、自然右之惡徒、其場へ落行者候者、郡中衆申合、不拔足様討果、此節可被勵忠儀事、專一候、委細親家江、申聞候之趣、猶榮田治右衛門入道可申候、恐々謹言、
(天正八年) 二月十二日

(大友) 義統
(大友義統) (ローマ字)
圓齋 (朱印)

香志田掃部助殿

二二 田原親家起請文寫

○立花家所藏大友文書

条々、天、八、三、

一、(田原) 親家進退之事、付、疑在府之事、
二、所々号本領、方角懸持之人領地、為家中之人、狼藉、不可然之事、

一、今度親實同意之惡黨、後人之變、堅成敗之事、

一、每事、義統下知之之外、不可然之事等、於所々、足城不可申付候事

一、直恩之衆、寄撥之契約、停止之事、

一、於向後、雖為不肖之人、深重申組事、不可有之事、

一、節々、無御腹藏預入魂、別而、可申談之事、

已上、

右以御条々、被 仰下候之趣、銘々、奉存其旨候、親家、於生中、

無忘却、万事、

上意、不可致違背候、若偽申候者、

梵天帝釋(以下略)

(註) 右は親家より、大友義統に提出せる起請文也。天正八年、國東郡安岐城主田原親實、大友宗家の叛し、亂を發す。宗麟、義統の弟新九郎親家を、田原家の家督となし、親實を攻めて之を亡はす。右の起請文は、親家が田原家の家督を命ぜられたる後にも無き時に提出せるもの也。

二三 大友義統書狀(紙切)

○遠見長野末男文書

(包紙折封ハ書) 長野因幡守殿

(通書) (墨引)

義統

依田原右馬頭逆心、其表亂念之儀、其方心底之趣、至志賀安房入道・朽網三河入道、以三神名・承候、銘々加披見候、乍一案中、感入候、親實事急度誅伐之儀申付候、時分柄之事、道輝・宗歴任、入魂之旨、別而可勵、貞心、事肝要候、恐々謹言、

せし一人のキリシタン側然之を聞きて彼等を匿置し、同伴せる青年等と共に、武器を執りて彼等を守護したれば何事もなし得ざりき。バードレ等は再び落着きたるのみならず、他の善き事之に伴ひたり。即ち親望が領せし地の大部分は親宏より奪ひたるものなりしが故に、之を奪はれたる後は其收入と名聲は激減し、之に加ふるに彼が日向の軍隊指揮の任を全うせざりし爲め、諸人皆敗戦の責を彼に歸し、彼は漸次信任を失ひたれば、王が之を殺すことを命ぜんことを惧れて、宮廷を去りて領地に歸り、名譽を失ひ甚だ貧窮となりたり。其後親宏彼を懐し始めたれば、彼は老王冠に夫人ジュリヤに書翰を贈りて、今後再びキリシタン鏡にバードレ等を迫害せざるのみならず、領内に會堂を建て、キリシタンとならんことを望む者は悉くキリシタンとならしむることを約束せり。王はバードレ・フランシスコ・カブラルに書翰を贈りてアハブ者、列王前記第十六章二十九節以下參が此の如く屈伏せるを見て喜べども、其言には多く信用を與へずと言へり。

(大友宗麟正義參多氏)

王妃ゼザベルにも殆ど同様なる事起りたり。彼女の收入の大部分は彼の三人が叛起せし地方に在り、從つて殆ど全收入を失ひ、其兄弟が勢力を失ひ收入を減じたる爲め、彼女も亦名聲衰ふるに至れり。我等の主デウスが彼女に御恵を垂れ、其救の軌の下に己を置くに至らしめ給はんことを祈る。此の如き性質の人は先づ辱しめらるゝにあらずれば救はるゝこと無きが故なり。然れども數日前親宏廢傷 *Pericula* の爲め死したれば、親望少しく元氣を回復することあるべし。但し親宏の子 ○親 は彼の敵なり。

一七 田原親貴書狀

○日田
草野文書

今度、鞍縣執付候儀、爲侍家、前後各以熟談、加下知候、就夫、別而親武才覺故、一城普請等成立候、大慶此事候、於然者、彼要害之儀可預置候間、妻子等以隨身茂在城肝要候、自然誰人申妨仁候共、爲親買不可許容候、必靜謹之刻者可申談候、爲御存知候、恐々謹言、

(天正七年)
十二月廿三日

親 貴 (花押)

如法寺藤五郎殿

一八 田原親貴感狀寫

○東国東
片山文書

今度武藏要害并福壽院切奇落去之刻、於攻口碎手、預查被討取候、誠盛悅候、必追而可願其志候、彌可勵忠儀事、頼入候、恐々謹言、

(七カ)
天正八年

十二月廿七日

片山越後守殿

まいる

(田原)
親 貴

一九 大友義統感狀寫 (紙切)

○字佐
渡辺久文書

田原親貴不義事、早速注進神妙之至候、尚其邊由斷有問敷候、恐々謹言、

(天正八年)
正月十一日

(大友)
義 統 (花押)

江賴彈正介殿

(天正七年)
二月廿七日

田原常陸入道殿

(大友)
義統 在判

一六 バードレ・フランシスコ・カリヤン書翰

○耶穌會士日本通信豊後編
熊本國豊前

○一五七九年十二月十日(天正七年十一月十二日)口ノ津ヨリ耶穌會總長二贈ル書翰中「豊後に付きて」首尾略

右大嵐の通過したる後地の嵐起りたり。是は直接キリシタンにも又バードレにも反對して起りたるものにあらざれども、最初の嵐に劣らず危険なるものと認めたり。前に述べたる豊後の大身中最も有力にして名を親宏 Chikahito といふ人○國東郡安岐城主諸國の叛起し、豊後が非常に窮迫せるを見て、數年前豊後の王が彼より奪ひて親堅^親に與へたる大收入を回復する好機會なりとし、老若兩王に少しも語ることなく、一日突然宮廷所在地より出發し、若王に其退去を報告し、先年父王が彼より奪ひたる親堅^親の所領を返還せしめんことを要求せり。諸國の大身叛起の報日々到達せる際、右大身が自領に還りたる付、諸人親宏の叛起は必然にして、彼叛けば豊後の王は如何ともする能はず、親宏は甚だ有力にして、豊後は既に粉砕せられ、他の諸國は皆戰爭中なれば、其兵を率めて容易に侵入し、欲するが如くなすことを得べしと考へたり。而して戰爭の際家を焼き之を破壊するは日本の習慣にして、此際社寺其他何ものを除外せざるが故に、親宏はキリシタンにも又バードレ等にも反對せるにあらざれども、彼に隨ふ者は皆異教徒なれば、住院は掠奪せられ又燒かる、

は確實にして、バードレが殺され又は虐待せらるべき危険あり。

諸國の一に於て叛起し既に其大部分を占領したる重立ちたる大身は、親宏の娘を娶りし婿なれば、彼も亦叛起すること疑なしと考へ、宮廷所在地なる臼杵の市の大部分と、豊後の最大市なる府内に於ては、各人其財産を携へて他の地に逃れんとし之を總め始めたり。右の大身叛起せば第一に攻撃すべきは兩市なるが故に、我等兩住院に在る者は大混亂に陥り、住院者に在る者と外より來りし者の中に、一方に逃ぐべしと主張する者又他の方面に逃げんと言ふ者あり。國王も此事が何處まで進むべきか知らずして意決せず、又毎時間種々の恐しき報傳はり、兩市は非常なる混亂を早したり。我等は若し留れば殺さる、虜あり、他の地方に行かんとするも異教徒等我等の去るを見れば、半は財産を奪はん爲め、又半は我等に對する嫌惡の爲め、混雜に乗じて我等を殺すは容易なり。仍てキリシタン等或は一の事或は他の事を勧めたり。結局バードレ・フランシスコ・カプラルは同所を去ることを危険と認め、重要な所有品は之を取纏め、敵近づきて他に方法なきに至れば之を持ち去ること、なしたり。我等は再び準備をなし祈禱に依りて我等の主の御助を願ひしが、主は事件を鎮定し給ひ、若王は其父が親堅^親に與へし領地を奪ひて元の所有主に返したれば、親宏は満足して豊後と平和を結びたり。而してバードレの處置は我等の主の定め給ひし所にして、我等若し此地を去りたらば危険は非常に大きく、バードレが他の地に逃れしめたる二人のイルマンの冒したる危険と同じかりしならん。異教徒等は此二人を殺して所持品を奪ふ協議をなしめたるが、イルマン等と同行

岡部（正） 宗殿

荳嶋（後） 入道殿

利行主（水） 亮殿

宗 龜

今度安岐郷之儀、不殘段歩令安堵候、然者郷内諸給人領、或者本給或者別所、其外相論之地等、爲札明、五人事差遣候、役所申談、堅固之目肝要候、不可有緩之儀候、恐、謹言、

（付通）七九

（天正八）

正月十八日

（田原義統）
宗 龜（花押）

荳嶋美濃守殿

溝部新左衛門尉殿

岡部 彈正忠殿

荳嶋越後入道殿

利行主 水亮殿

一三 大友圓齋義統書狀

○通見
入江文書

今度吉岡申務入道・柴田治右衛門尉進之候之儀、別而顯承候、祝著之至候、殊以之條申候趣、被得其意之由、示給候、具令承知候、然者就重祿之儀、預口能候、尤無餘儀存候、併思老令思惟、如此申候上者、強而斟酌難有之候歟、年寄中江雖不及申候、宗龜（田原義統）內存難默止候之間、必遂入魂、重疊可令申候、於彼條者、何様可申談覺悟候之条、可有領掌事、可爲喜悅候、次新九郎進退之儀付而、始中終被添御心候次第、愚老満足不可過之候、向後彌顯存候、隨而今一儀之事、才覺半候、

様鉢重々自是可申入之条、其間之儀密々專一候、至彼方角差遣人候、到來候者、則託與佐渡守差歸、可相達候、雖無申迄候、界目怙無異儀之様、調略專要候、爲御存知候、恐、謹言、

（天正七）

（大友義統）
圓 齋（花押）

二月一日

田原常陸介殿
（包紙ウハ書）
田原常陸入道殿

圓 齋

一四 大友義統書狀

○通見
入江文書

就鞍懸要書之儀、承候之趣、得其意候、任指南彼城番之事、堅固可申付候、委細重々以之使節可申候、恐、謹言、

（天正七）

義 統（花押）

一月廿三日

田原常陸入道殿
（包紙ウハ書）
田原常陸入道殿

義 統

一五 大友義統書狀

○大友家文書録
大分県史料三三

見村之事、至小笠原玄信、健馬別所、累年預進候之處、今度預舊領、安岐・國東兩郷之儀、宗龜（田原義統）江令還附上者、雖不及兎角候、如御存知、別地無格護候、條、右代地以分別可申出間、無相違玄信可被申談之由、申候之處、被得其意候段、以口託承候、祝着不斜候、如此預入魂候之間、自今已後、兩郷之内訴詔之人候共、曾而不可有許容候之條、每事可被添心、賴存候、恐、謹言、

九 朽網宗歴等連署書狀

○連見
見卷文書

〔裏打紙端裏書〕
朽網參河入道宗歴

一万田左馬介入道宗慶

志賀安房入道道輝

〔別箋〕
朽網參河入道宗歴

一万田左馬介入道宗慶

志賀安房入道道輝

不圖御歸宅之衆、不能面上、心外候、暫時被逐御休息、明春早々御參上尊一候、然者度々如申候、堺日御内略之事、不被閣、御調儀難不可有御油斷一候、委細法花津左京入道江申候之條、聞筆候、恐々謹言、

〔天正六〕
十二月廿六日

〔朽網〕
宗歴（花押）

〔木付乙〕
宗虎（花押）

〔二万出〕
宗慶（花押）

〔田原義實〕
宗龜 まいる

申給へ

一〇 大友義統條々事書（紙）

○連見
入江文書

覺

一 豊前表動之事

一 肥後衆手切之事

一 國中之衆猶宗龜申事
付、御後慮之事

以上

〔包紙ウハ書（宗龜）〕
田原常陸入道殿

義統

一一 大友家年老連署書狀

○須田義史収載
田原文書

就豊前表火急之注進到來、急速出張之由言上候、無油斷心懸、御感深重候、然者、國東郷、安岐郷之事、数年雖御托言候、或被行忠賞、或不遇至奉公無緩、任仰被加御扶持候、于今無御分別候處、今度宗龜御馳走不斜候條、各致取合、右両郷之事、被成御裁許候、最以珍重候、如此系被請上意候上者、親類寄親家中之人等、被申進、彌可被勵忠儀事簡要之段、能々可申旨候、爲存知候、恐々謹言、

〔天正七年〕
正月十一日

〔朽網義實〕
宗歴（花押）

〔一万田義實〕
宗慶（花押）

〔木付義秀〕
宗虎（花押）

〔田原義實〕
宗龜 忍 在城

〔包紙ウハ書（宗龜）〕
田原常陸入道殿

一二 宗龜田原書狀
○須田義史収載
田原文書

〔包紙切封ウハ書〕
（墨引）

壹嶋美濃守殿

溝部新口衛門尉殿

五 吉弘鑑生等連署書狀(切) ○速見
荒巻文書

(御筆)
「吉弘左京大夫鑑生」
〔義打紙捲端〕

田原次郎進退之事、連々忙言深重候、於于今者、宥免之段被申出候之条、可致歸國之由、申遣候、累年御扶持之事候、可然様以御取合、下國可爲本懐候、恐々謹言、
(天文十九年)
三月十五日

(吉弘)
鑑生(花押)

(綠地)
治景(花押)

(小原)
鑑元(花押)

(山下)
長就(花押)

杉伯耆守殿

杉民部大輔入道殿

陶安房守殿

御宿所

六 大友義鎮知行預ケ狀 ○西国東
小田原文書

〔所封包紙ウハ巻〕
「田原次郎殿」
〔義打紙〕
義鎮

(御筆切封)

安岐郷國東郷兩政所職、武藏縣余名之内、田原近江守上表之地拾町、

國東郷之内兩所分拾壹町分、同正田左衛門尉・富來彦三郎上地分并

筑後國秋月種方先給之内百町分別紙押付在、預遣之候、可々知行候、

恐々謹言、

(天文二十庚)
三月三日
田原次郎殿
義鎮(花押)

七 安岐郷間別除分注文 ○有原八幡
宮文書

就由原御造營之儀、國東郡間別調之事、御公領職、宇佐御神領、無餘儀社官家内等、六郷山領、南北御國衆、奈多宗連領ヲ差除、其外諸給人分、調申間付取帳之事、
合 天正五年
六月一日

一所、安岐郷調之事

除分

(龜岩)
田原宗龜領

志賀道輝領

一萬田宗慶領

吉弘宗悅領

奈多宗連領

八 大友義統書狀 ○西国東
小田原文書

〔包紙ウハ巻〕
「田原常陸入道殿」
義統

當時加判無人数之條、乍御辛勞各被申談、如前々取沙汰肝要候、

恐々謹言、

(天正六)
十一月九日
義統(花押)

(龜岩)
田原常陸入道殿

一 足利義詮御判下文

○大友家文書錄
大分県史料二

（足利義詮）
御判判

下 豊前藏人三郎法師法名

可令早領知豊後國安岐郡日田宮内少輔地頭職事、

右、爲勲功之賞、同國大神・藤原莊戸次筑前次郎・豊前國古田村、

苅田等之替、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀、如件、

貞治二年七月十二日

三 大友親著書狀
○日田草野
安岐郷事、返付田原鶴松丸一候、任先知行之旨、可有沙汰一候、
就其當給人等事、此間忠節事候間、宛行替地候、於當作者、
當給人可相計之旨申付候、其段申含森太郎一候、可有御心得候、
恐々謹言、
九月廿日
木付入道殿
親著（花押）

二 足利義滿袖判下文

○通見入江
文書

（附通）
一氏能讀狀德一九（一）

（足利義滿）
（花押）

下 田原德一九

可令早領知筑後國田口村内西方參分壹・同國怡土庄内末永名

參分壹、豊後國田原別符半分内參分壹、同國田原別符内波多方

半分戸次丹後守、副防國岩田保津田左近將監、肥前國山田庄阿蘇

少弼治時・豊後國安岐郡日田宮内少輔・同國光一松名・同國玖珠

郡山田郷跡・原次郎・帆足郷・古後郷志津利孫三郎・飯田郷井來繩

郷内福成吉久名等・同國香地庄・國東郷信澄入道・同國武蔵

郷・同國橋來別符・同國日出庄朝直跡

東郷・山本郷宇都宮常陸等々地頭職事、

右、任今年七月十八日父下野守氏能讀狀、可令領掌之狀、如件、

康暦元年十二月廿四日

四 大友義長條々書寫

○大友文書
大分県史料二六

（新包紙ウハ書）

田原親述事 大友 義長公御自筆

條々

一 田原親述兄弟三人之事、子孫及も、許容有間敷候、彼田原か
事ハ、以上八代と哉らん、無本をたくミ候之由申候、是も自然浦
部之者共、敵成うせ候ハ、辛勞したる無足ふかひの者共を、彼
在所二うつさるへく候、

○以下二
カ条申略

右申愚意、内爲心得候、此内一ヶ條も取次候する者、則野心たる

へく候、又其方も許容候ハ、

國家ミヤうか有間敷候、文書等おかしく候、不可有他見候、

（本正十書カ）
六月二日

義長（花押）

安岐城関係史料

解 説

この史料集は安岐城に関わる文献を取めたものである。収載範囲は安岐城の戦略的位置づけを明らかにするもの、及び築城年代を推定するために必要な史料に限定した。

この史料の作成にあたっては、渡辺澄夫編『豊後国荘園公領史料集成』（別府大学付属図書館出版）、田北学編『増補訂正藩人大友史料』、大分県史料刊行会編『大分県史料』に負うところが大きく、必要に応じて県史編さん室及び県立図書館の撮影フィルムを参照した。

富米城など国東郡内、および杵築城など速見郡内の山城は、安岐城と密接な関連を有するが、これらの史料については紙数の関係で割愛せざるを得なかった。とくに、『大友興廃記』・『黒田如水石垣原軍記』（いずれも『大分県郷土史料集成』に収載）は関連するところが多く、必見の史料である。

凡 例

- 一 文書名は原則として、正文・案文・写の別を示し、『大友家文書録』など編書から採録したものは写とした。
- 一 無年号文書は、年代比定可能なものは、その年代の所に挿入した。
- 一 原文には、句点・並列点・を加え、異体字・俗字・真仮名・変体仮名は、原則として正字・現行仮名に改めた。
- 一 原文の磨滅虫損等は、字数を推して、「又は」を以て示し、また文書的首缺には「尾缺には」を以て示した。また原文の墨抹は■、文字の読み得るものは、文字の左側にミミを加えて、右側に書き改めた文字を加えた。
- 一 文字の缺落、誤字の場合、推定可能な時は（ ）内に編集の案を示し、異筆のある場合には「」で示した。当字などをとのまま示す必要ありと認められる場合は（マ、）と註した。又本文中の人名・地名など説明傍註の場合は、（ ）内に註を加えた。

- 04 史料編 4号
 05 『大分県史料』(26) 36号、史料編5号
 06 史料編 6号
 07 史料編 8号・9号・16号
 08 史料編 11号・12号・15号
 09 史料編 14号
 20 史料編 13号
 21 史料編 17号・18号
 22 史料編 24号
 23 史料編 21号・28号
 24 史料編 27号・28号・33号・37号・38号
 25 史料編 41号・47号・48号・49号・50号・55号・82号・127号
 26 史料編 135号
 27 史料編 78号
 28 史料編 91号
 29 史料編 94・95号・96号
 30 史料編 101号・116号・122号
 31 史料編 103号・100号・112号・108号・109号・110号・111号
 32 史料編 114号・115号・134号
 33 『安岐町史』 138頁
 34 史料編 142号・144号
 35 史料編 140号
 36 史料編 142号・145号

I 鎌倉時代は宇佐宮領であったから、京泊付近に安岐郷司が徴収した年貢物を一時的に保管しておく倉庫や役所があったであろう。

II 南北朝時代には、田原氏が入郷して居館を構え、港灣を掌握し、全郷の一円支配をめざしたと考えられるが、国東郷を既に本拠とした田原惣領家が常住したかどうか不明である。

III 室町時代初期、本格的に城郭を築いたといわれるが、田原惣領家の重要拠点の一つとして、城砦を整備し、大友惣領家の領国支配に抵抗したと考えられる。

IV 戦国時代末期、鉄砲の普及による戦術の変化によって、東は海、南は川口、西は山という天險を利用して、強固な要塞が築かれ、長期の籠城戦にも耐えられるよう設計され、田原氏の本拠となった。

V 豊臣時代、秀吉子飼の武将熊谷氏によって、城砦は更に拡張され、近世的な城郭に変身していったと考えられる。

安岐城は、当初より、港灣を眼下に見ることができ、豊後水道を一望のうちに眺めることを意識して築城されたのであるが、鉄砲を主力とする戦国末期には、その条件をもっともよく具備する城郭として整備された。この点、富来城や杵築城もよく似た城郭であった。

注(1)史料編1号・2号

(2)『大分県史料』(35) 330号

(3)『大分県史』中世編I 566頁

(4)『大分県史料』(13) 657号

(5)『安岐町史』 96頁

(6)史料編3号

(7)『安岐町史』 138頁

(8)史料編2号

(9)『大分県史料』(10) 675号

10 史料編136号

11『大分県史料』(10) 376号

12『大分県史料』(26) 36号

13『大分県史料』(32) 1250号

う。^②この乱で、安岐城は三月から十月まで半年以上も籠城できるほど、堅塁を築いていたということである。

これより十五年後、大友氏が朝鮮出兵時の不手際を理由に改易され、豊後国は、秀吉・子嗣の部將達に分割給与された。安岐城には、文禄三年（一九四）熊谷直陳が、一万五千石を与えられて、一族の熊谷外記を留守として置き、自らは近江二万石の領地に拠った。この時、安岐城は二の丸・三の丸を築いて城郭を整えたという。^③

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の合戦で、熊谷氏が石田三成の聲という関係から、西軍に属したため、黒田長政の留守を預っていた豊前中津の黒田如水は、豊後へ出兵し、国東半島を横断して赤根嶺より富来城・安岐城を攻め、木付城を救援し、別府石垣原に、お家再興をかけた大友義統を討つべく出陣した。

『黒田家譜』には、安岐城について、「此城の形、南北に長くして、東は海なり。東北は石壁高く、屏風を立たるがごとし。西の方は山近し。城と西の山との間は平地にて、堀をほり南の方を大手とす。土橋あり。又乾の方にも土橋あり。平城なれども要害堅固の所なり」と述べている。黒田如水は、富来城は静まりかえって籠城していたので、母里太兵衛の一隊を残して、木付の方へ移動し、安岐城の向いに着陣した。安岐城の城内は、はやり立ちたる形勢で、黒田勢が発見すると、追撃してくると予想して、栗山四郎右衛門に五十騎ばかりを付けて、山間の道脇の蔽陰に伏兵させた。案のごとく、城中より二百人ほどが追撃してきたので、弓・鉄砲をあびせて、首級四十八をあげ、城将の一人熊谷次郎介をも討取った。^④

石垣原の合戦に敗れた大友義統が降参したのち、黒田如水は安岐城へ引返し、攻撃にとりかかった。城の西の小高い所に陣を構え、城を囲み、竹木をきらせ、井樓をあげ、所々に木戸をかまえて、城内を窺い見て、夜討をかけるような隙もないようにし、「龜の甲」を作って、二所の土橋より、櫓の下石垣を崩そうと支度させた。

こうした構えのもとに和平の使者を立て、わずか四日で降伏させた。城中の者の多くは如水の供をして富来城へ向った。城には、手塚孫太夫、且原市兵衛を城番として残した。つづいて、如水は富来城攻撃にかかり、昼夜隙なく攻めて、外郭を攻め破り、堀一重になるまでにして、城主寛和泉守が美濃大垣城で討死したとの使者を城中へ入れ、開城を促した。留守城を預った寛利右衛門等もこれを容れ、富来城も落城した。如水は上原新左衛門を城番として、豊前中津へ帰った。^⑤

関ヶ原合戦後、細川忠興が豊前八郡と豊後は二郡六万石の知行を得て、田辺より小倉城に入り、杵築に城代松井康之がそのまゝ置かれた。安岐城は武家諸法度の発布によって破却された。

以上のように見てくると、安岐城の歴史は、次のように要約することができよう。

之事、子々孫々及も、許容有間數候、彼田原か事ハ、以上八代と哉らん、無本をたくミ候之由申候」と述べている如く、その子親重、親宏も立花城や周防国で亡命生活を送っている。その間、所領は闕所され、武蔵田原親賢のち人道紹忍へ預置かれたり、無足・不証の家来の給地となつたらしい。安岐城が田原家によつて拠点の一つとして修築されるのは、大友二階崩れの変で、大友義親(のち人道紹忍)が家督を継ぎ、周防亡命中の田原親宏が帰国を懇願していたのを教し、安岐・国東両郷の政所職等を与えてのちのことであろう。

田原親宏は、主として、豊前国計略に従事し、豊前国に強大な勢力を扶植するが、天正六年(一五七八)十一月の日向高城での薩摩軍との大戦に敗北してから、豊前・筑前等の大友氏支配はゆらぎ、田原親宏の豊前国等の所領は、国人の離叛によつて不安定となつた。

田原親宏は当時、加判米であつたが、突如、国東へ帰り、国東郡の旧領返還を要求した。大友宗麟は事態の重大さに驚ろき、彼の要求を全面的に容れ、ひとまず危機を回避した。その後、親宏は鞍懸城の構築について義統に許可を求め、公然と要害を整えることになるが、まもなく嫡で死んだ。死の直前には、宗麟の子林新九郎を親宏の養子とする話が進んでいらい。

親宏が死んで間もなく、養子の親賢は、整備の成つた鞍懸城に如法寺氏を置き、武蔵の田原紹忍の城や福が院切寄を攻めて、反旗を鮮明にした。親賢は大友氏の仇敵ともいふべき秋月文種の遺児長野種信の子といわれ、秋月種実・高橋元種に連携して安岐城に挙兵したのである。天正八年(一五八〇)二月、大友宗麟は「宗龜・筋目、為再興、家来之者申合、懇望」したという理由で、自分の子親家を、渡海、入郷させることにした。入郷は安岐郷か国東郷が明らかでないが、国東郷に入部したと考へたい。田原氏家臣の中には親賢の挙兵に反対する者がいて、親家を宗龜跡に迎えようとしたのである。

親賢は安岐城を出て鞍懸城へ入った。豊前の秋月方との連絡を考えた事と、家臣の分裂が原因であろう。三月下旬、大友本隊が辻間(日出町)から木付(杵築)へ在陣するころ、安岐郷・国東郷の者が挙兵し、赤松村(国東町)や安岐城に籠城したため、田原親家は雄渡牟礼に登り、両郷の逆徒の説得を行う一方で、犀山城(豊後高田市都甲)の吉弘統運と連絡をとりながら、安岐城と鞍懸城を南北より挟撃する構えをとった。

安岐城攻めは「兵糧詰め」にする作戦で、包囲したまま日を送っていたが、六月十八日、城内より夜襲をかけてきたのをきかけとして、小ぜりあいがはじまり、八月二十日には、如法寺親武が芸州の毛利氏のもとへ出かけ、加勢の警固船数十艘の派遣を実現させた。この上表兵船は安岐浦で若林鎮興の率いる豊後水軍に撃退され、向地の室富江(山口県室積カ)まで追尾され、一艘を捕獲された。

九月六日、鞍懸城でも、豊前より加勢軍が押寄せて包囲軍と交戦した。安岐城では、毛利兵船による救援の失敗に動揺してか、降伏を願う者が出はじめたところで、包囲軍の攻撃が本格化し、九月十三日、高橋口の戦いを経て、十月七日落城した。降参人は赦され、その所領も安堵された。安岐落城を知らされた鞍懸城も十月九日、親賢が没落して落城した。田原親賢は豊前善光寺近くの高家(宇佐市)で討伐されたとい

Ⅵ 豊後国安岐城の歴史的性格

「豊後国国東の郡は、昔より田原持來の領地なり」と『大友興廃記』（寛永十二年、勢州人杉台宗重撰）に記されているが、田原氏が安岐郷に入部し、安岐城を築くのは、貞治二年（一二六三）、足利義詮によって、田原氏三代目の直貞入道正曇が豊後国大神・藤原莊、豊前国吉田村・畑田等の營所として、日田宮内少輔詮永跡である安岐郷地頭職を宛行われて以後のことと思われる。

弘安八年（一二八五）の『豊後国図田帳』には、「安岐郷三百町 宇佐宮領 余名三十六町 領主神宮名主等 弁府十町 地頭目田弥三郎永基法名法基 弘永名三十町 同人 成久名二十七町 相模七郎殿母御前辻藏 朝来野浦十四町 地頭朝来野弥三郎公平・同次郎公繼守江浦三町 戸次太郎時頼」とあり、日田永基の地頭職は弁府十町と弘永名三十町であるが、『豊後国日田郡司職次第』によると、「安岐郷辨分弘永以下五ヶ名」を、文永の役の勲功の實として得たという。その後、日田詮永の代に、建武動乱等で安岐郷總地頭職を得たらしいが、南北朝の争乱中に日田氏は南朝方に降ったために、本貫である日田莊を没収されたことがあり、そうした経過の中で、安岐郷總地頭職が田原正曇へ与えられたらしい。

応永二年（一二九五）、田原氏能の子親貞が上洛するにあたって記した置文に「安岐の大方殿」という女性の名がみえ、親貞の母が安岐の京泊の館に住んでいたであろうという。大字馬場に「マンドコロ」という地名があるという。「大方殿」はこの安岐郷政所のそばに住んでいたのであろう。しかし、親貞の子親幸は幼少の頃、この郷を一時失っており、返還されてのち、安岐城が、のちの本丸の部分に築城されたという。しかし、田原氏は、親應二年（一三五二）、足利尊氏から国東郷總地頭職を与えられて、本拠地を田原別府（現大田村）から国東郷の飯塚の地（現国東小学校地）へ移したとされており、その後、安岐郷や武蔵郷を得て、それぞれの地に政所を設け、拠点としたらしい。

幕府の小番衆の一人として、国東半島に多数の所領を獲得してきた田原氏は在京することが多かったが、応仁の乱後は、惣領守護所大友家に臣従するようになったらしく、田原親宗は大友政親の信任篤く、筑後国郡代を勤めている。しかし、親宗は大友氏の内紛に介入して挙兵し、明応三年（一四九四）安岐郷箕崎で戦死し、その子親述は局防の大内氏と親しく、大友親治と対立して、雄渡半礼山城（現国東町大字成仏）に籠城した親治の家臣富来氏等を攻めた。その後、田原親述は立花城・博多郊外に住んで生害されたという。当時、立花城が、大内氏と大友氏の勢力の接点となっていたことは、大友義鑑の遺言に「一、立花城可取哉否之儀、能々可有思慮事」とあり、この城に手を出す、大内・大友の大戦争となると戒めていることもわかる。田原親述は大内氏によって立花城に在番していたのである。大友義長は「一、田原親述兄弟三人

安岐城跡・下原古墳

一般国道213号線安岐バイパス陶器類蔵文化財調査報告

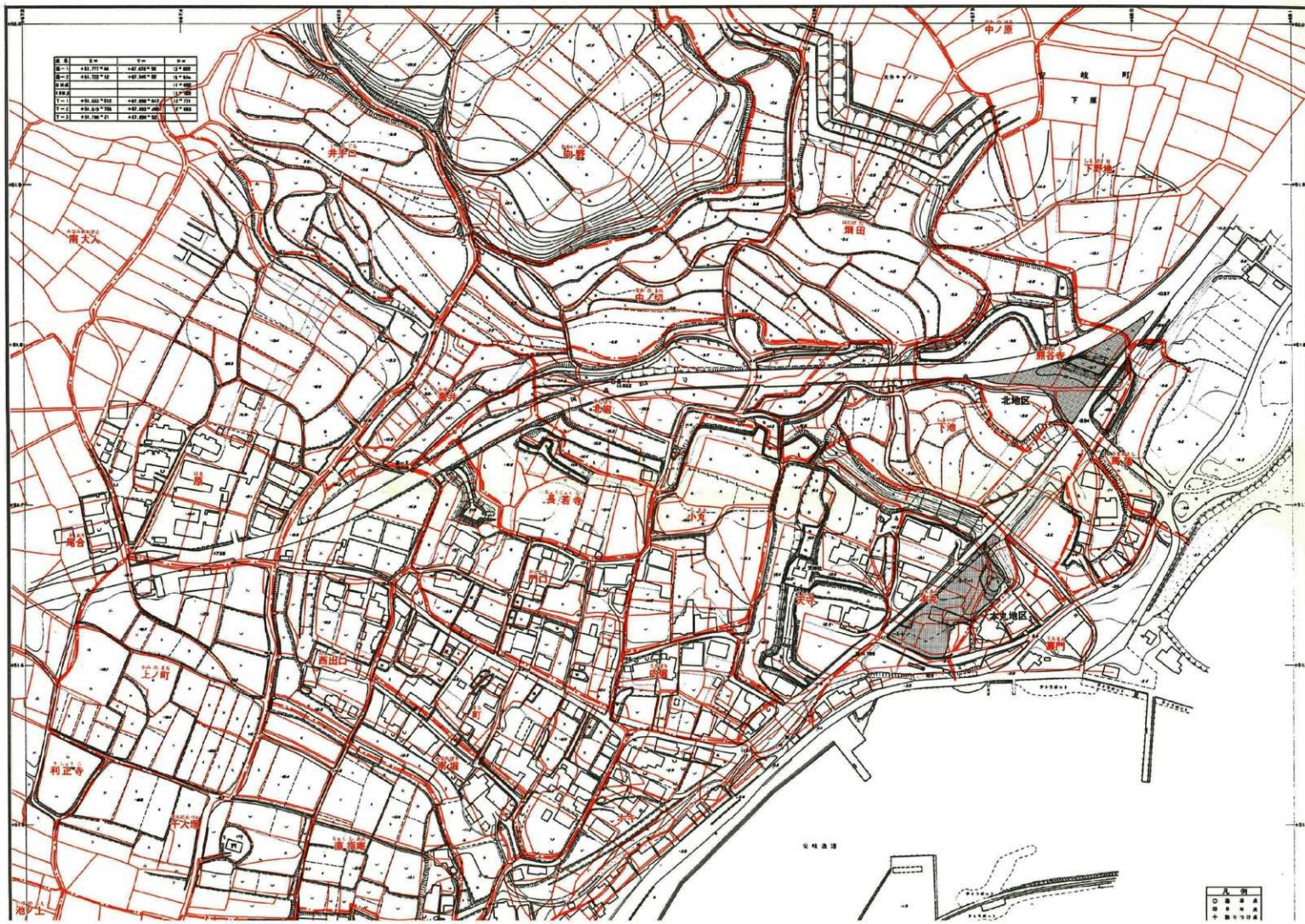
大分県文化財調査報告 第76輯

昭和63年3月

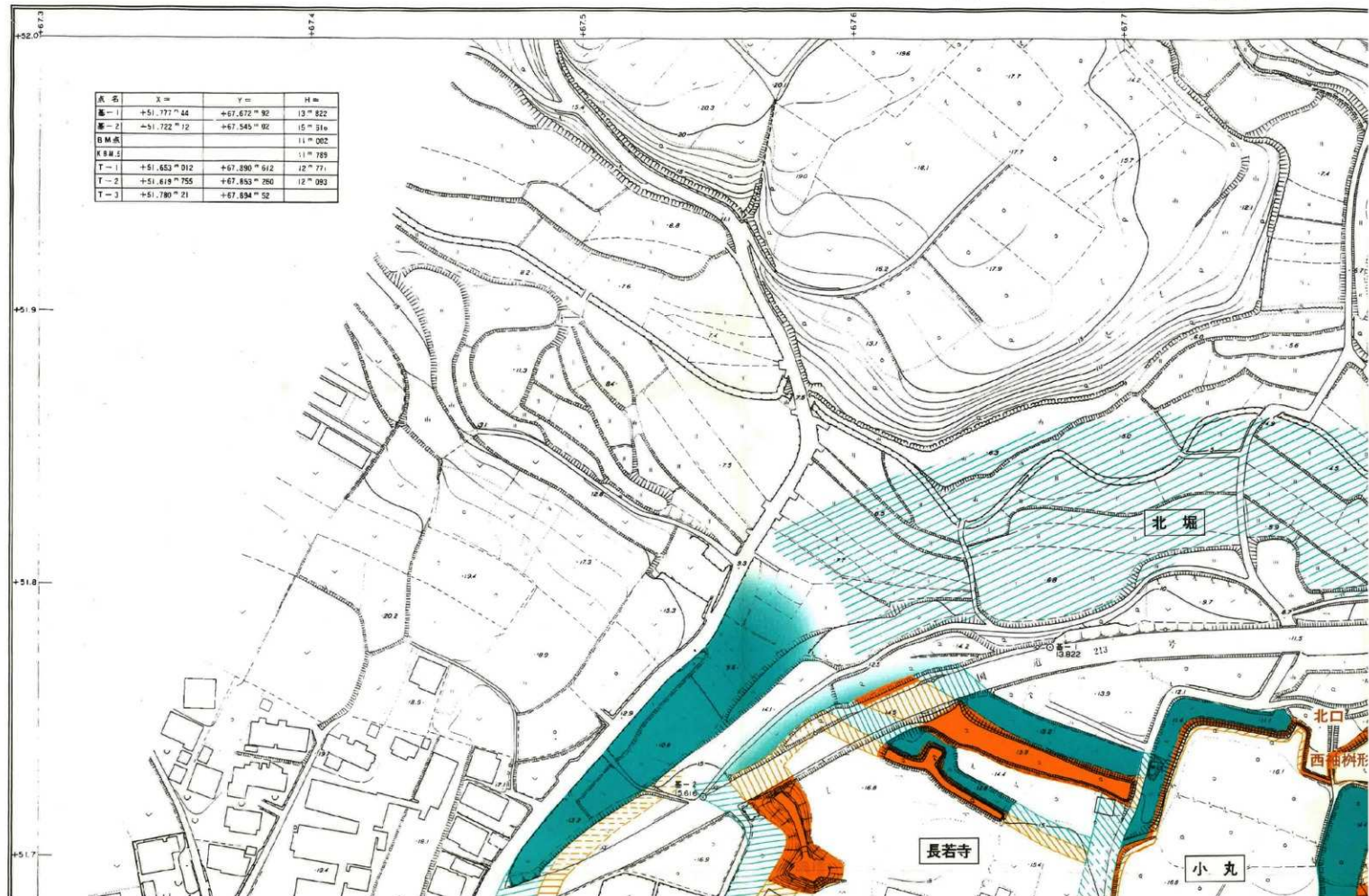
発 行 大分県教育委員会

印 刷 東洋印刷株式会社

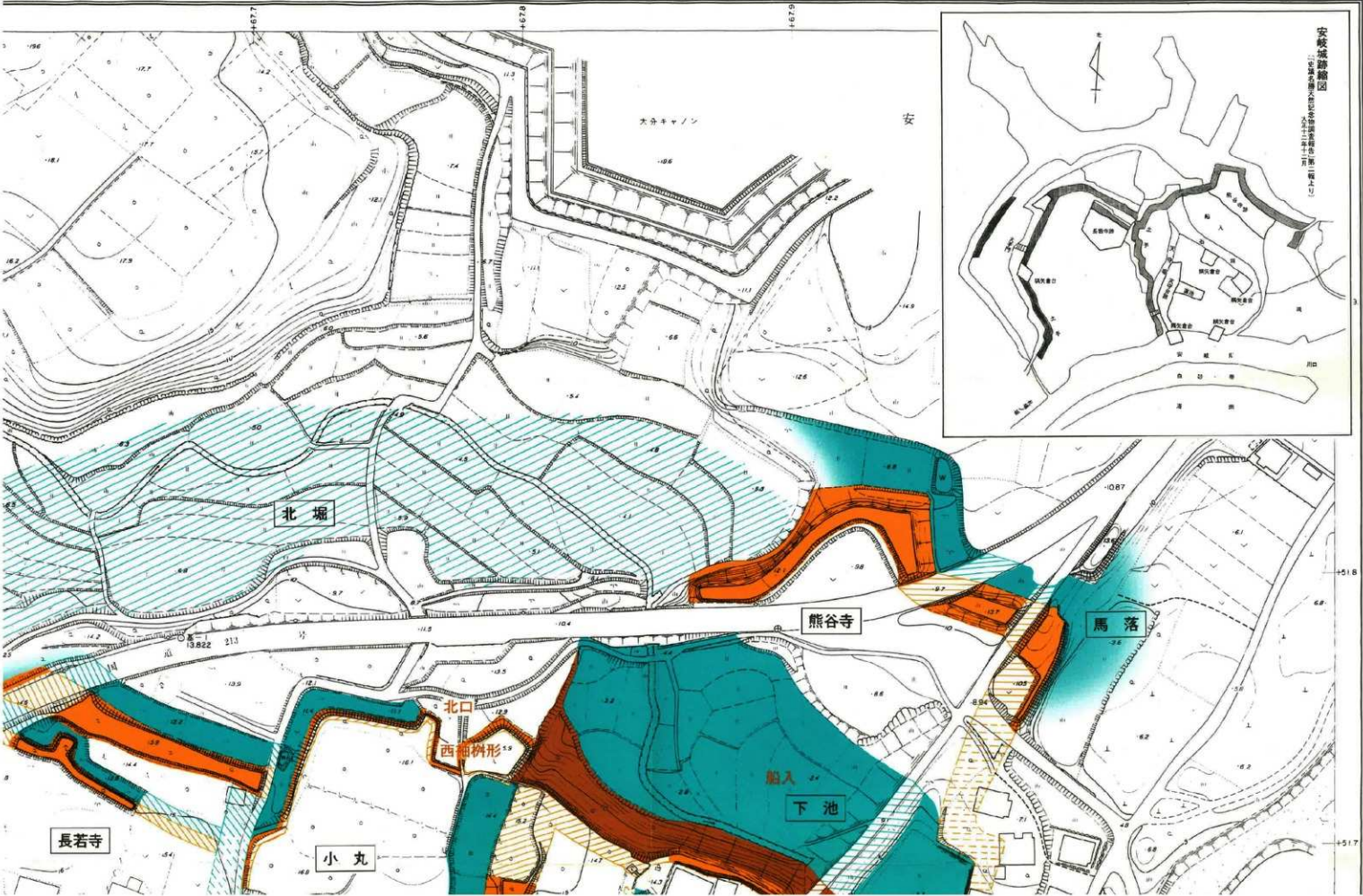
付図 1 安岐城跡周辺字図

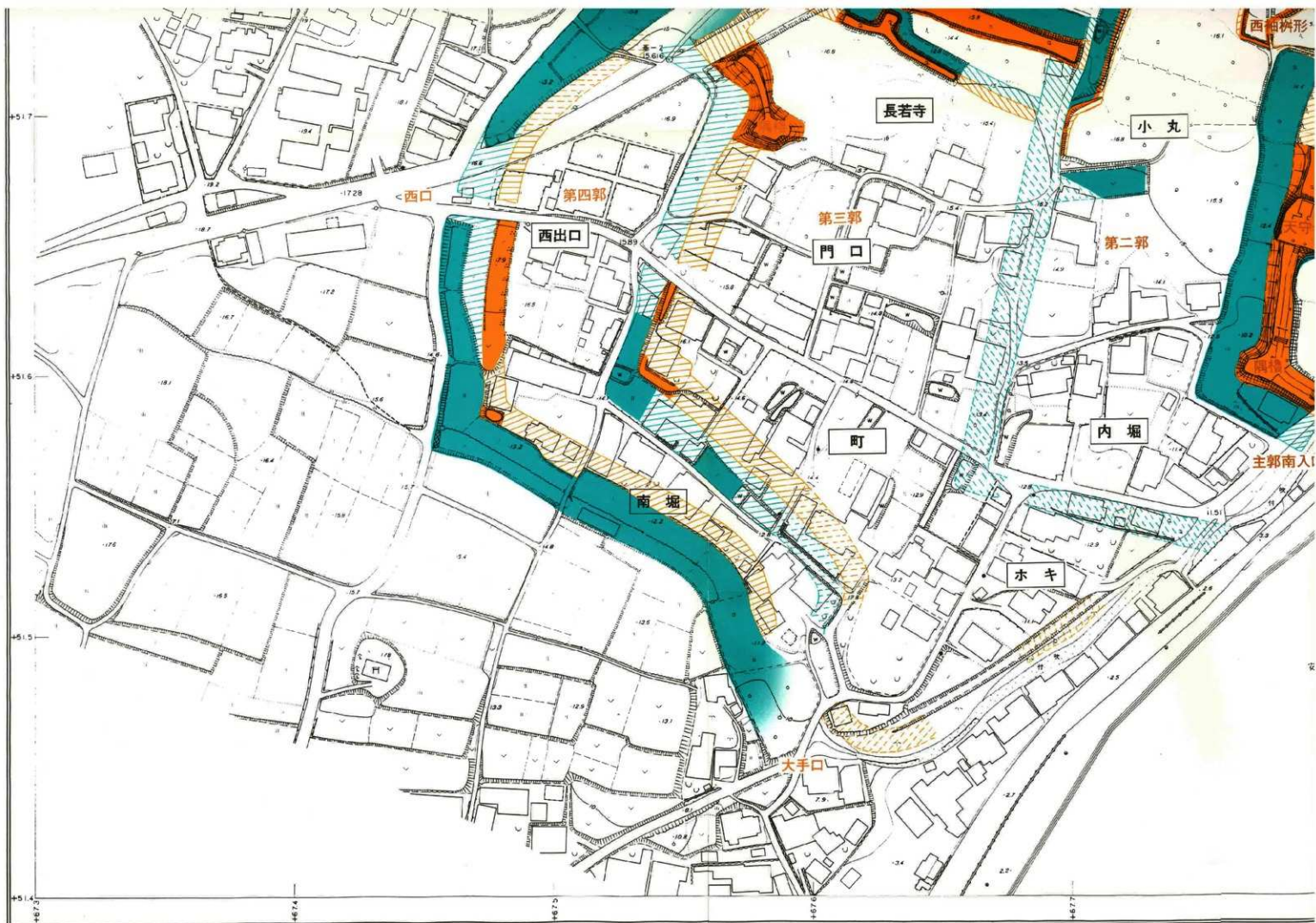


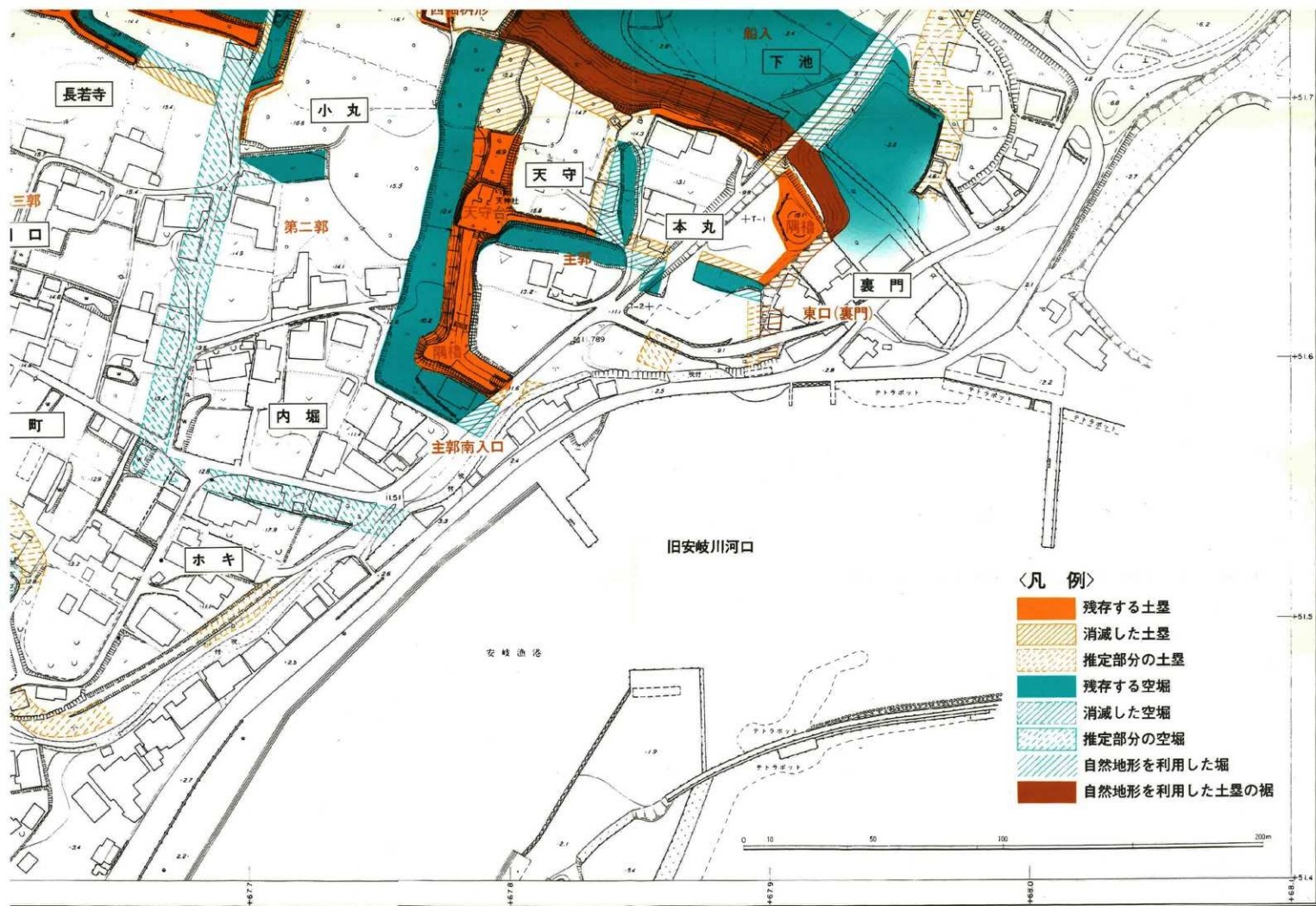
付 図 2 安岐城跡地形図及び復原想定



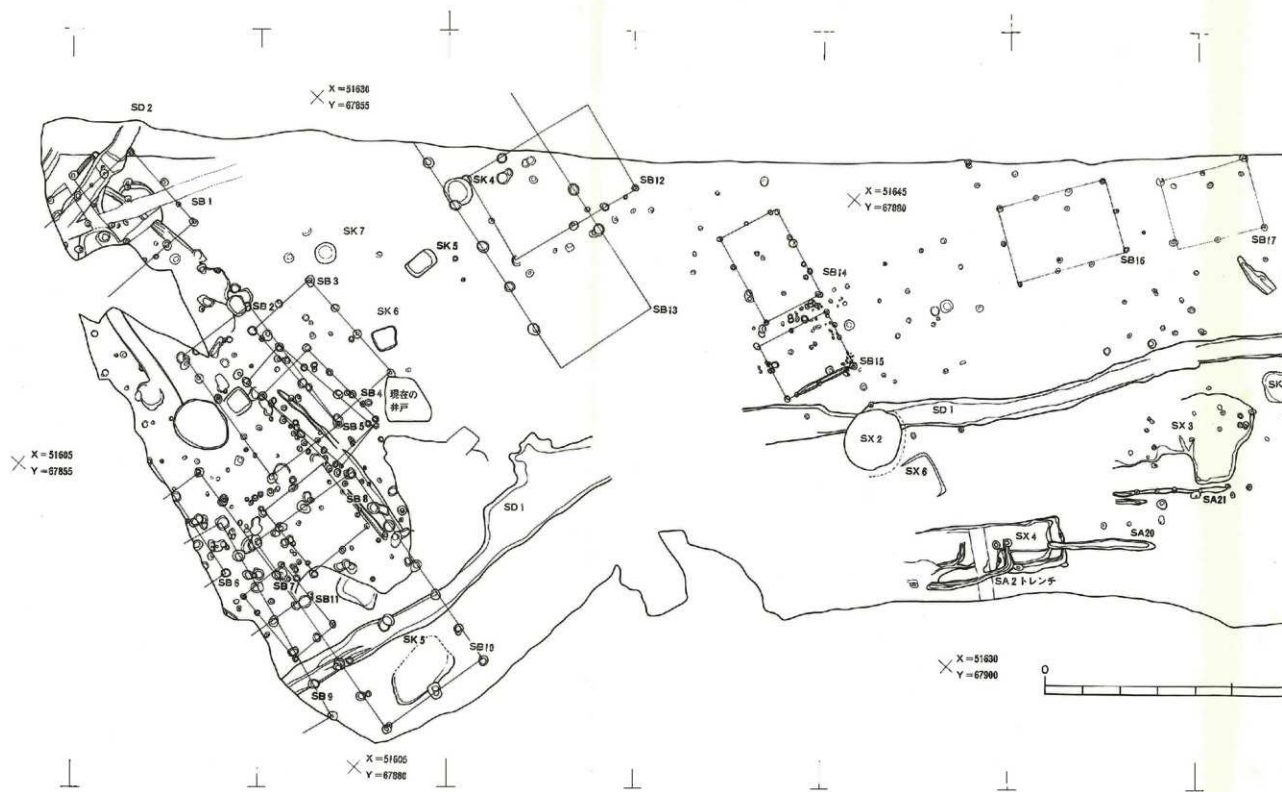
岐城跡地形図及び復原想定図



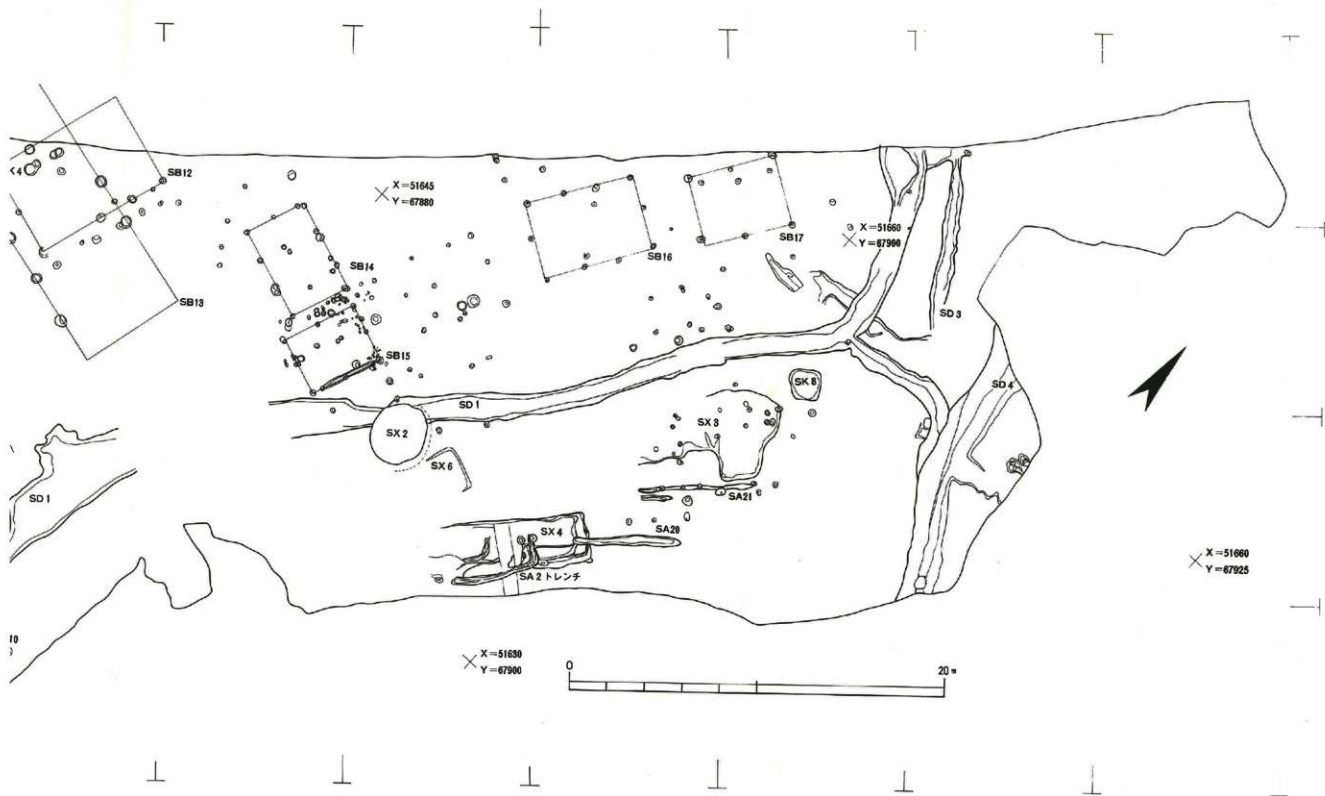




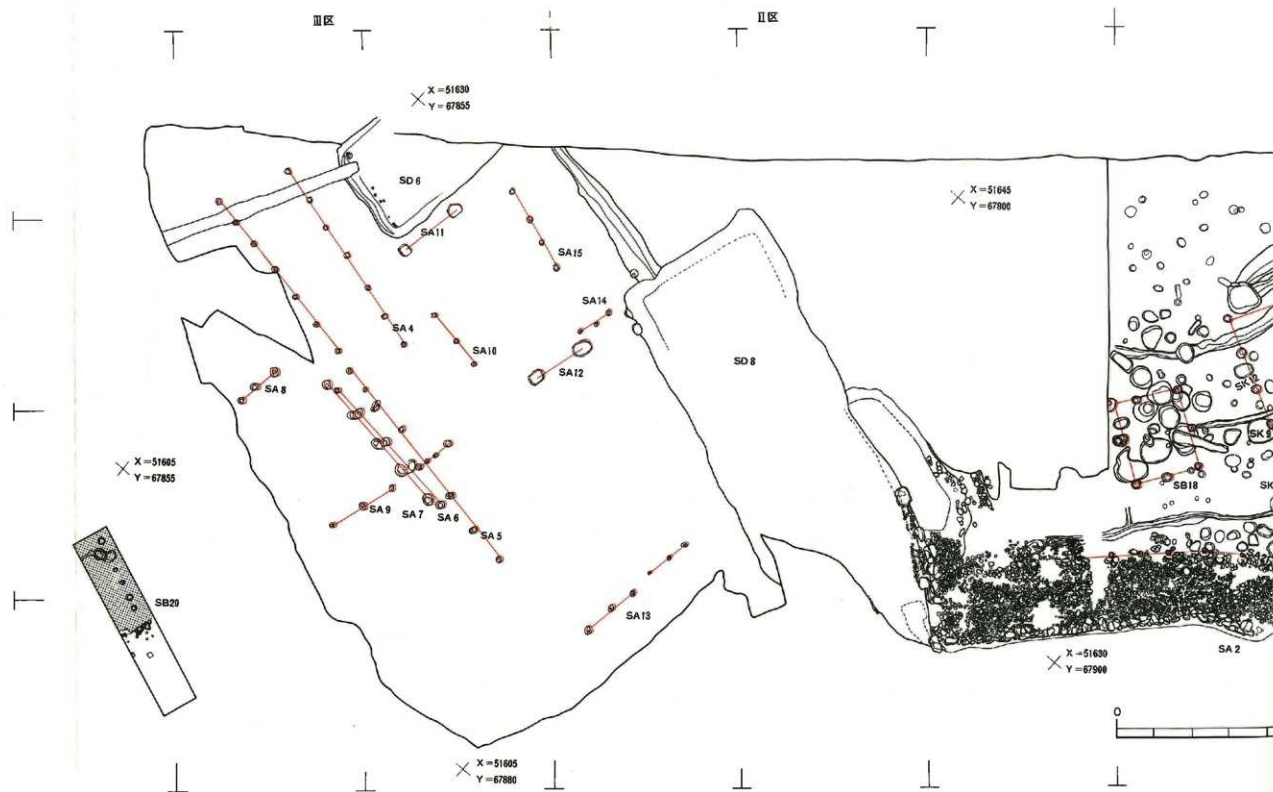
付図3 本丸地区遺構分布図(第1・2期)



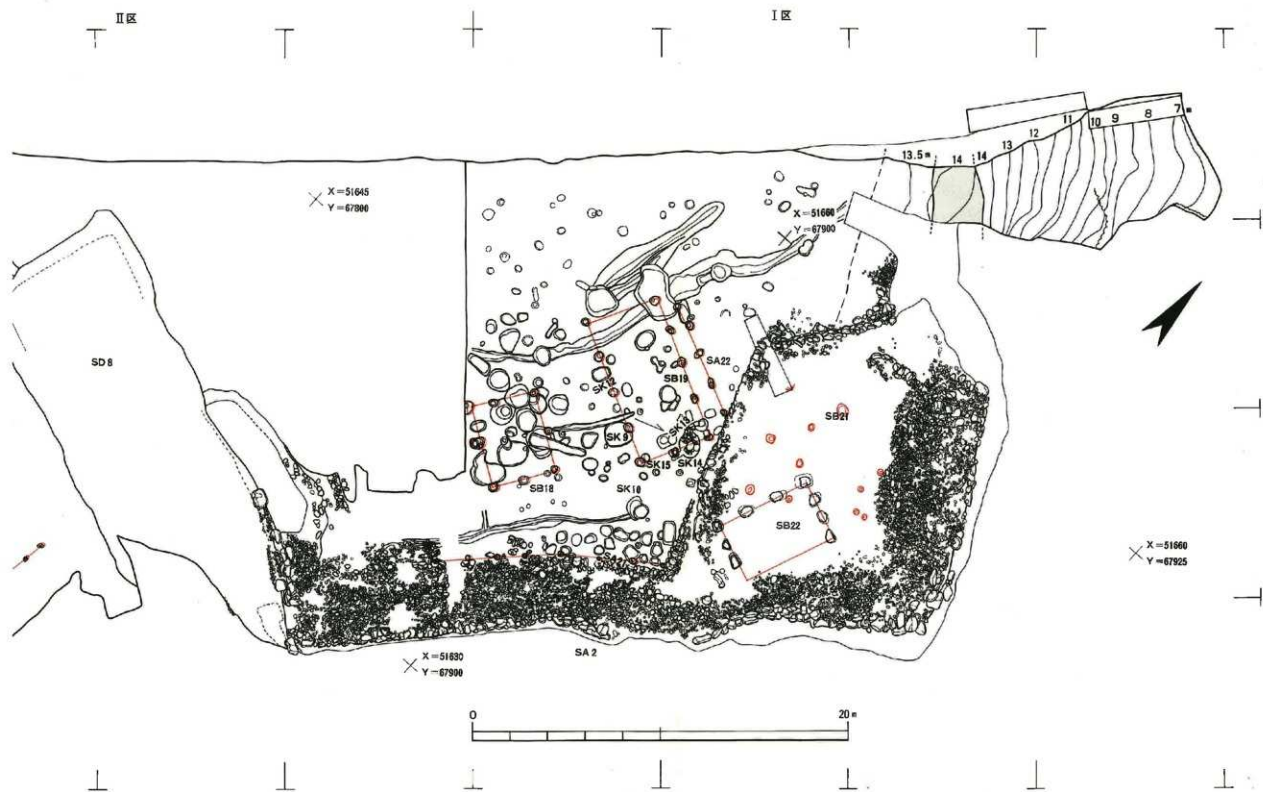
付図3 本丸地区遺構分布図(第1・2期)



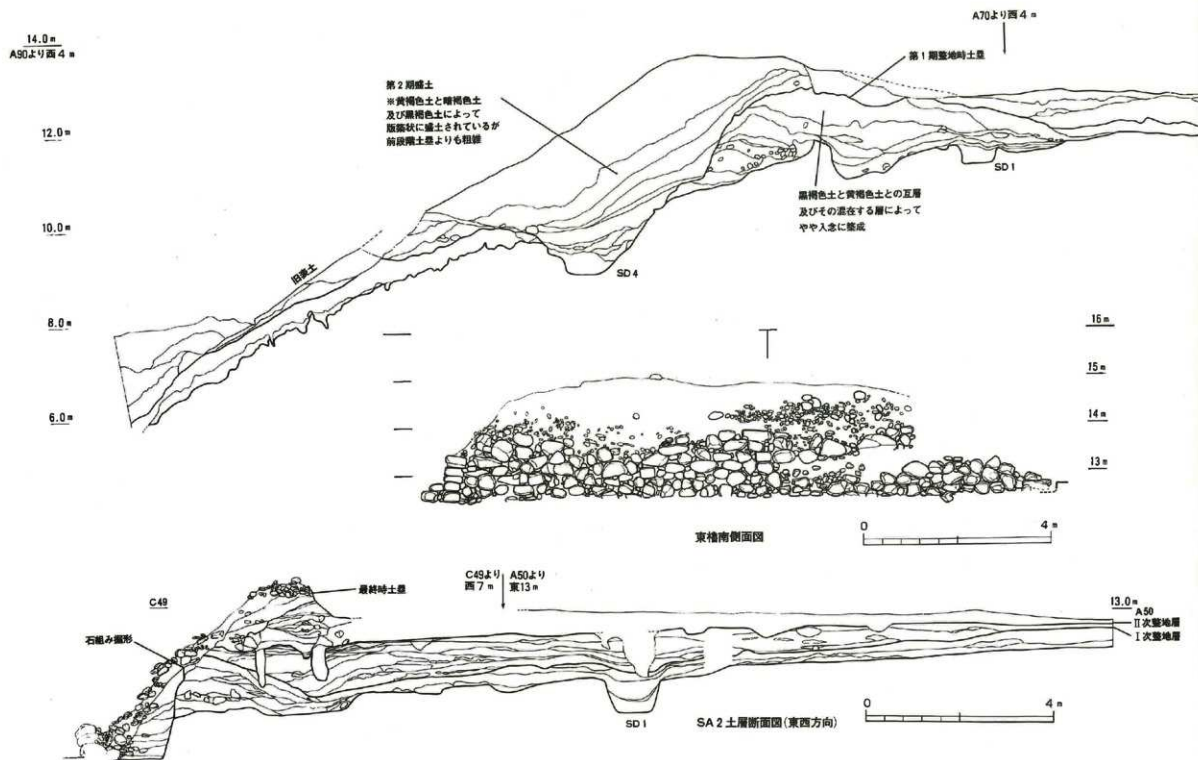
付图4 本丸地区遺構分布図(第3期)



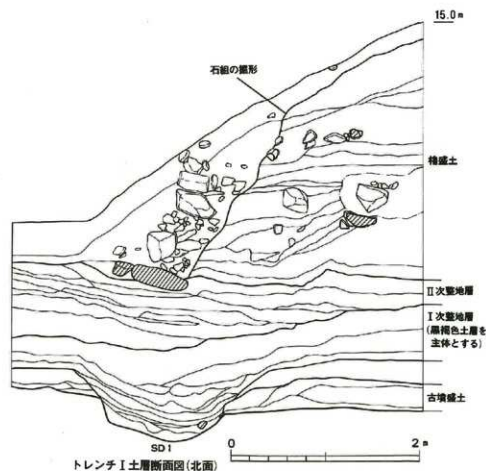
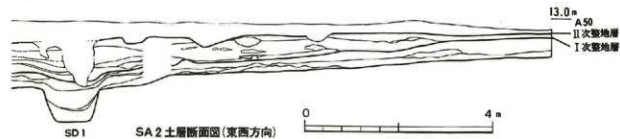
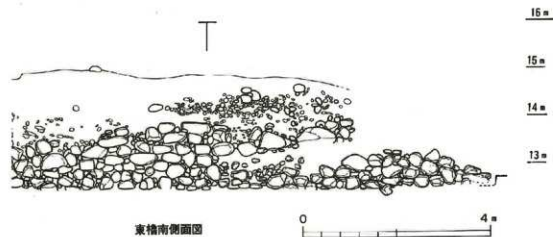
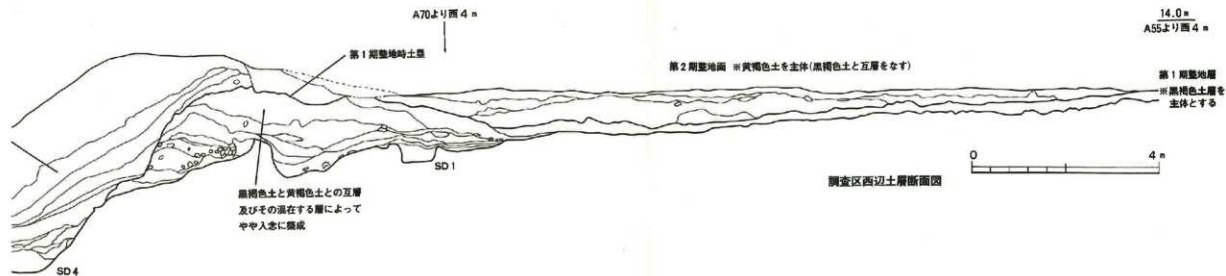
付図4 本丸地区遺構分布図(第3期)



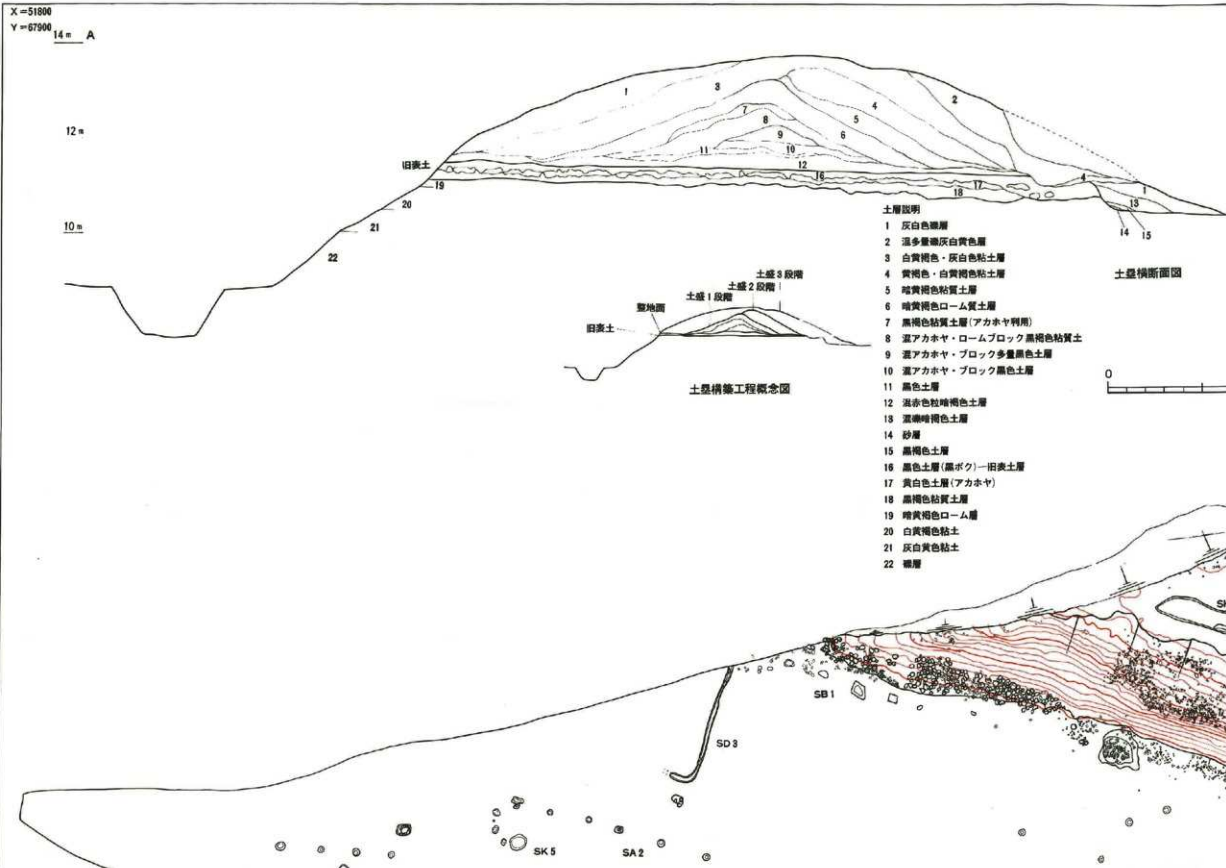
付図5 本丸地区土層断面図及び東櫓側面図



付図5 本丸地区土層断面図及び東櫓側面図



付図6 北地区遺構分布図及び土塁

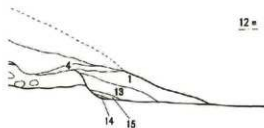


北地区遺構分布図及び土塁横断面図

X-51800
Y-68020

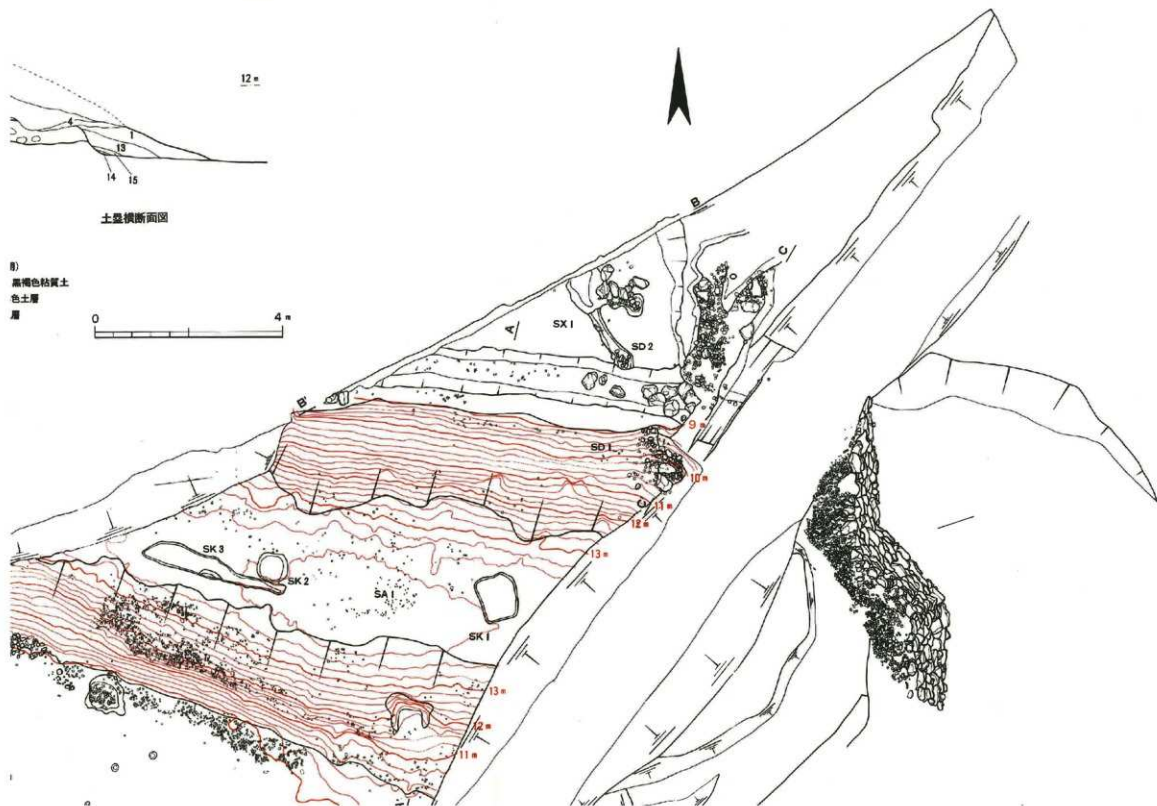
A' 14 m

12 m

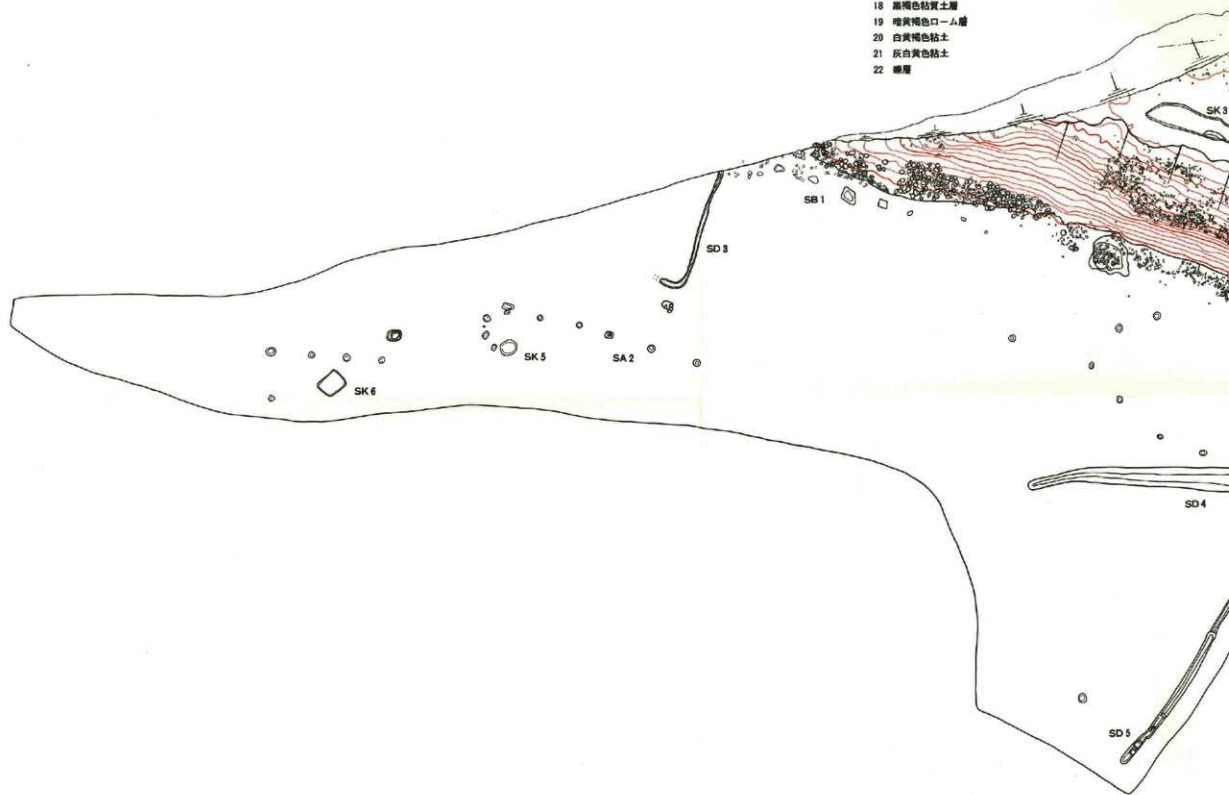


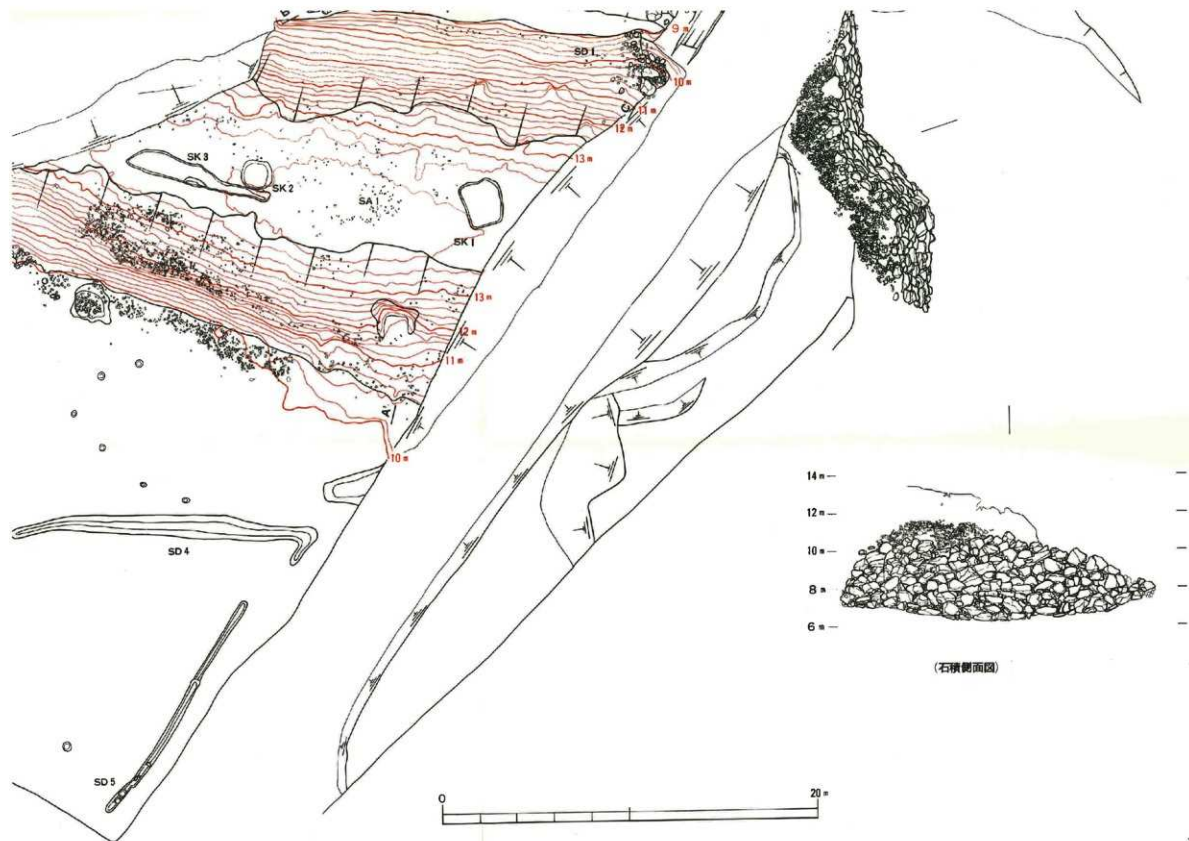
土塁横断面図

8) 黒褐色粘質土
色土層
層



- 15 黒褐色土層
- 16 黒色土層(黒ボク)ー旧資土層
- 17 黄白色土層(アカホヤ)
- 18 黒褐色粘質土層
- 19 暗黄褐色ローム層
- 20 白黄褐色粘土
- 21 灰白黄色粘土
- 22 礫層





[illegible]

[illegible]

[illegible]

